

---

# 鍊機動騎士スフォルツァンド

森鷲 皐月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

錬機動騎士スフォルツァンド

### 【Nコード】

N1948X

### 【作者名】

森鷲 皐月

### 【あらすじ】

人類が生きていく為に錬機術が繁栄をもちたらず時代。

貧富の差が激しい町に住むアルバイトに精を出す少年、シスカは騎士隊の艦へ配達に向かった際に、巨大な錬機獣ルーディメンツに襲われる。

戦う術をなくした騎士隊にシスカは、誰にも乗れない筈の政府直属騎士隊の兵器ブレスであるスフォルツァンドに呼び寄せられる。

無我夢中でスフォルツァンドを動かしルーディメンツを撃退するシスカ。

その出来事が、貧しくも少しだけ平穏な生活を送る少年の運命を変  
えることになった。大幅ストーリー変更のため、一部ストーリ  
ーを削除します。近日upしていくのでよろしく願います。

## 第1話 平穩

人類が生きていく為に鍊機術が繁栄をもたらす時代。

そんな時代に俺達は、生きている。

鍊機術による蒸気機関、生活の火種、戦争の兵器までもそれが出てきている。

そうだ、俺達は鍊機術に生かされている。それが当たり前の生活。当たり前前の平和。

でも、その平和は政府直属の騎士隊がいるからだ。

人々を脅かす、人類の敵：ルーデイメンツ。

何者かが操縦しているのか、生物なのかわからない。

ただ、巨大で生身の人間がどう立ち向かっても敵うはずの無い、大きなその存在は時に俺達の平和と心を掻き乱す。

だけど、それを守ってくれるのは騎士隊だ。

騎士隊を統括する政府に全部任せておけばいい。

誰もが安心しきっていた。

自分達には関係ない。外の世界のような…そんな感じがした。

太陽が昇って朝が始まり、陽が沈んで夜になるように…それが当たり前前のことだって、ずっと思っていた。

明日の不安を恐れるより今日の食い扶持を稼ぐ。

貴族や中流の人間と違う下町の俺達にとって、生きていく為の術が全てだから。

\*\*\*

「ロイドさん、ただいま！」

バタバタと足音を立てて、少年シスカは小さな店の扉を開く。

見るからに泥だらけの擦り傷だらけ。しかし、笑顔で明るい声を上げる。

それを待つていたのは、スキンヘッドにサングラスをかけた派手なシャツを着た啞え煙草の男だった。

「んだ、シスカおめー…またやられたのか」

「はは…でもバイクと伝票は死守したよ。大事な商売道具だからさ」  
下町で暮らす者たちは大人であろうと子供であろうと、生活の為に働くことを余儀なくされる。

幼い頃に家族を失ってからスラム街で育ったシスカは、ある人物に拾われ、そして今現在、ロイドの店で配達の仕事しながら生活をしている。

だが、幼い頃の生活もあり、今でもシスカを色眼鏡で見る者は少なくなかった。

しかし、そういった冷遇や理不尽な暴力を受けても屈することは無かった。

「喧嘩買えたか？」

「まさか！ 勝てるわけないし…なんか、面倒だし」

目を逸らして気まずそうにするシスカに呆れたロイドは、シスカにタオルを投げた。

「取り敢えず、風呂いってこい。そんな泥んこだとますます苛められんぞ」

「べ、別に苛められてるわけじゃ…」

「だったら一回くらい見返してやれ！ オメーはもう石投げられてスラムにこそこそ逃げるガキじゃねえんだ」

「う…でも…」

「でも？ オイオイ、まだ弱虫シスカのままか？ …おめー、苛めっ子の貴族のガキと荒くれルカのどっち怖い？」

「ルカ！ 断然、ルカの方が怖いですっ！ 何するか分かんないから！」

「だったら胸張っておめーのバイクと共に突っ切って、そいつらを轢き倒せ」

「そ、そんな無茶苦茶な…」

「あん？」

ロイドが睨み付けるとシス力は肩を震わせ、タオルを持ち直して扉へと急いだ。

「お、お風呂行って来ます！ わーい、銭湯楽しみだなあ〜」  
伝票を置き、わざとらしく笑顔で逃げようとする。

「おい、シス力」

代わりにタオルと桶を慌てて逃げようとするシス力をロイドが呼び止める。

「は、はい…」

これまでかと観念したシス力は、そろりとロイドを見た。

「風呂行ってからでいいからよ、もう一軒頼む。ちょっと町の外出るがいいか？」

「町の外…？ あ、そっか」

「根性なしで逃げやがった馬鹿の尻拭いで悪いが、次の奴見つかるまで頼むわ」

「うん、わかった」

さも当然のように返事をしてシス力は店を出る。

外でバイクのエンジンがかかる音がした。

シス力が去った後、ロイドは伝票をめくり煙草をふかした。

「…即答かよ」

くくつと喉元で笑い、ロイドは短くなつた煙草を灰皿に擦り付けて消した。

「臆病で腰抜けのくせに根性だけはありやがる…。面白えガキだ」

そう言つてロイドは柔らかな笑みを扉の向こうに向けて店の裏口にある倉庫へと消えた。

\*\*\*

臆病者、弱虫、腰抜け、スラム育ちのドブネズミ。

もう何十回、いや…何百回かもしれない。聞き飽きた言葉だ。

俺の両親は、優秀な政府直属の研究施設のメカニックだった。ルーディメンツを迎え撃つ為の兵器ブレスの開発に関わっていて、その影響か俺も小さい頃から機械が好きだった。

親の書いた設計図を参考にそれを改良して、新しい玩具を作っては友達に自慢して一緒に遊んでいた。

だけど、二人は俺が九歳の頃に突然死んだ。

本当に突然だったんだ。研究所にいた父さんと母さんは、実験中に死んだって聞かされた。

機密事項だから死因も分からない。

最後の顔を見ることすら許されなくて納得いかなかった。

でも、当時の俺には何も出来なくて、それどころか身寄りが無い俺は泥臭くて薄暗いスラムで生きること余儀なくされた。

スラムは荒れ放題で食べ物も奪い合いで…力が無かった俺は、お腹が空いたら道を這ってでもパンの欠片を探し出して食べる。

そんな生活が毎日毎日続く。

人のものを盗むのは嫌だったが、人の捨てたものを拾うのは罪悪感を感じなかった。

同じスラム街にいる奴等に殴られるのも日常だ。

その代わり、心は死んでいた。

自暴自棄になって何もかもが滅茶苦茶に壊れて、ただ息をしているだけだった。

そんな生活が四年も続いて、生きることすら面倒臭くてこのまま死んでも良いと思っていた。

そんな時に、そいつは現れたんだ。

「なーに死んだ振りなんかしてんだよ、てめえ」

そいつは、態度も体もでかくて見上げるのが眩しくて…泥の中を

無理矢理這い蹲って生きる俺とは違う太陽のような男だった。  
その男が、俺を泥沼から太陽の下に戻してくれた。  
それが…そいつこそが、ルカだ。

\*\*\*

「ちょっと待ったあああああ！」

バイクで走るシスカの前に両手広げて飛び出してくる男が一人。  
「うわあああああ！」

突然目の前に現れた人間にシスカはタイヤを思い切り地面に擦り付けてドリフトをして止まった。

「な、な、な…！」

ハンドルを震える手で握り締め、肩も震わせてその人物を見た。

「へっ！ 湯にあたってのぼせてんのか？ ぼーっとして走ってた  
ら危ねえぞ」

「飛び出してくるほうがよっぽど危険だよ！」

「うっせえなあ。いちいち細かいこと気にしてっつとハゲンぞ。ロイドのジジイみてえにな」

「全然細かくない上に、ロイドさんのあれはハゲじゃなくてスキン  
ヘッドだから」

「うっせえ！ この俺！ ルステイカ！ピッツィカード様がそう言  
つたらそうなんだよ！」

「…意味わかんないし。もうルカどいてよ。俺、まだ仕事中」

バイクに乗ろうとしたルカを退こうとシスカは溜息を吐いて、エ  
ンジンをかけなおす。

「配達か。何処だ？」

「町の外。ほら、ニムさん辞めちゃったから俺が…って何してんの  
？」

シスカが話をしている途中で、事もあろうかルカはバイクに乗っ  
た。シスカの前に。



「進め、シスカ！」

「何馬鹿なこと言ってるんだよ！」

シスカはグツとハンドルを握り締め、勢いを付けてルカを振り払った。

「うおっ！ 何すんだテメエ！」

再びバイクに縋り付き、ルカは牙を剥き出しにする。

今度は後方に積んである荷物を掴んだ。

「潰れる！ 荷物潰れちゃうって！」

「だったら俺も連れてけ！」

いくら振り払ってもルカはしがみ付いて来るだろう。そういう男だ。今に始まったことじゃない。

「…分かったよ。ただ、荷物傷つけないでよ。怒られるのは俺で、最終的にロイドさんに迷惑掛けるんだから」

「おうっ！ 俺もあの親父の拳骨は痛エからちゃんと守ってやるぜ！」

無邪気な子供のように歯を出してルカは笑う。

こんな顔をされると、神経質になる自分が馬鹿らしくなって実際そうじゃないのにルカが正しいと思えてくる。

でも、それは嫌じゃなかった。

どこか体の中がほっとするようなそんな感覚で、自然に顔が綻んだ。

\*\*\*

町を出て広い荒野を走り抜けると、荒野に駐在している艦が見えてきた。

「おー、あのデカブツか。クソ政府の騎士隊の巢じゃねえか」

「うん。暫く動かないらしいから直接持って来て欲しいって。なんか、機密限定荷物だから俺も中身はわかんないんだけど」

「…開けちまおうぜ」

ニヤリとルカは笑う。

驚いてシスカはバイクを止めて、掛けていたゴーグルを頭へと上げた。

そして、後部座席に座るルカを見る。

「は、はあ？ 何言ってるんだよ、駄目に決まってるんだろ！」

「いいじゃねえか、元に戻せば問題ねえって」

「問題あるから！ 怒られるだけじゃすまないって！ しかも政府のものだよ？ 生活できなくなっちゃうよ！」

「大丈夫だ。その時は俺が面倒見てやる！」

「あああああ！ 開けちゃ駄目だって！」

シスカが止める暇も無く、ルカは積荷を開ける。

「お？ …なんだこりゃ」

「箱の中に箱…？」

「相当なお宝だぜ、こりゃ」

「もうやめようよ！ 箱の重ねがけなんてほんとまずいよ、この荷物…って、あああああ！」

シスカが制止する暇も無く、幾度も重なる箱をルカは開け続ける。頭を抱えて悲鳴を上げるシスカの声は虚しく空に消えていく。

\*\*\*

「よし、これが最後だな」

小さな箱が目の前に現れる。

「だああああ！ 駄目だってばああああ！」

必死に守ろうとルカから箱を取り上げる。

「あ」

既に半分テープを開けられたその箱は、シスカが取り上げた反動で開き、中身が飛び出してしまう。

「あーあ、出しちまった。シスカ、お前も共犯だな」

ニヤリと笑うルカに抗うどころか涙目になりながらシスカは、中

身を持ったまま放心する。

「んで、何だこりゃ。鍵か？」

それは鍵の形をした透明な宝石だった。

「え、えお…え、お…」

涙目ではくぱくと口を開閉させて言葉にならない言葉を発するシスカの目の前で、ルカは手を振ってみせる。

「おい、シスカ。大丈夫かー？」

「馬鹿ルカ！ これ、エオリアだよ！」

「は？ エオリア？ …なんだ、それ」

「何だそれって…錬機動の原石だよ！ 錬機術ってこの石から物質作ってるんだって…子供でも知ってるよ！」

「ほう。んで、なんでそんなテンパってんだよ。そこまで仕事に命かけなくたって…」

「そうじゃない！ そうじゃないんだよ！」

中身を開けたショックと言うより、その中身自体に恐れをなしてのようにシスカは怒鳴る。

「エオリアの鍵！ これ、ブレス起動のキーなんだよ。こんなの俺達みたいなの持ってたら犯罪者って思われても不思議じゃないだろ！」

「…なんで持つてると犯罪なんだ？」

「ブレスは、政府の最重要兵器だし…。そんなのを動かす鍵なんか持つてたら、俺達みたいなのだって兵器を動かすことが出来…」

「

そこでシスカは止まった。

失言だった。こんなことを言ったらルカは面白がるに違いない。

恐る恐る目を向けると、案の定シスカが想定した通りの表情をルカは浮かべていた。

「よっしゃあ！ そうと決まったら、艦に行くぞ！」

「行ける訳ないだろ！ 中身出しちゃったんだから、捕まっちゃう

よ！」

「おいおい、お前のバイクがそんじょそこらの騎士なんかには捕まるかよ」

「全力で捕まるよ！ 逃げられるわけ無いよ！ そんなにパワー出るわけじゃないんだから」

「いや、出る！ 走れ、シスカ！」

「い、嫌だ！ っ！」

首を振って拒否を示そうとするシスカだったが、手の中のエオリアキーが白く光り輝いた。

それが、一本の線となって艦へと導く。

「な、なんだ…こ、れえええっ！」

止めたはずのエンジンが掛かり、動かしてもいないのにも拘らず勢いよく艦に向かっていく。

「と、ととと…止まれえええ！」

何度もブレーキをかけようとするも、全くびくともしないで勢いは止まらず、バイクは艦の中の格納庫へ転がり込む。

「うわあああっ！」

バイクごと叩きつけられ、シスカとルカは目を回す。

「いってて…大丈夫か？ シスカ」

「う、うん。頭ぐわんぐわんするけど…」

頭の中で散る星を振り払うように首を横に振る。

流石のルカも頭を抑えて落ち着いた。

「誰っ？」

階段から少女が血相を変えて向かってくる。

「うわっ！ ルカ、逃げようよ！」

「おい、そこのお前！」

シスカの行動とは逆に、ルカはシスカの首根っこを掴んで少女へ向かっていく。

「ちよっと、ルカ！ 何やってんだよ！ 此処、騎士隊の艦なんだよっ？」

「んなもん知ってる！ おい、お前！ ブレスのところに案内しろ」

「な、ななな…何言っただよ、馬鹿ルカ！」

そんな二人の掛け合いに少女は不信がり、通信端末をつけた。

「此方、ユリアアナリーゼ。不法侵入者が二名。指示をお願いします」

ユリアという名の少女が上に報告すると、シスカは震えながらこくりと息を飲む。

「…分かりました。では一時的な拘束を…はい」

雲行きが怪しくなり、シスカとルカは足をそろりと後ろに下げた。

「…行くぞ、シスカ」

「う、うん…。せえーの…」

それを合図に二人はこの場から逃げるべく走った。

「あ、こら！ 待ちなさい！」

『どうした？』

端末の向こうから男の声が聞こえる。恐らくユリアの上司だろう。

「二人が逃げました。足止めします！」

そう言っ通信を切り、ユリアはホルスターから拳銃を取り出し二人を撃つ。

「ひいいいっ」

「うっわ！ あつぶねーな、このクソ女！」

銃弾を避けながら二人は一心不乱に走る。

「ルカ、捕まって！」

「よっしゃ、あの女にぶちかましてやれ！」

「馬鹿！ 逃げるんだよつ。完璧に俺達お尋ね者状態じゃん！」

そう言っ、シスカはバイクのエンジンをかけようとする。

「あれ…？ あれっ？」

何度もエンジンを掛けようとするが、何の音もせず、鍵を回す音がカチカチと鳴る。

「何やってんだ、シスカ」

「エンジンがかからないんだよ！」

「は？」

「さっきので使い果たしちゃったのかな？ …ど、どうしよう」  
「どうしようだったって、お前…」

シスカが何度もエンジンをかけようとするが、鍵が虚しくカチカチと鳴るだけでエンジンがかかることはなかった。

タイムリミットか、ユリアは銃口を至近距離で二人に向ける。

「大人しくしなさい」

鋭い眼光でユリアは引鉄に手を添える。

シスカとルカは観念して、両手を挙げた。

「じゃ、ついてきて。下手なことしたら撃ち殺すわよ」

ビクツと肩を震わせ、シスカはカチカチと歯を鳴らした。

「る、ルカ…」

ルカの服の裾を引っ張り、シスカは視線で降伏を提案した。

「はあ…。わーったよ！ 行けばいいんだろ、行けば」

「じゃあ、はい」

ユリアは二人を拘束しようとして手錠を用意する。

「て、手錠…。ルカ、やっぱり俺達捕まっちゃうのかな…」

「まあ、半分もう捕まってるけどな。はは、悪い」

「本当に悪すぎるよっ！ ああ、もう…」

この先のことを考えると怖かった。

こんな重要犯罪を犯してどんな刑罰が待っているのだろうか。

もしかしたら、死刑にでもされたらと思うと涙を流すわけには行かなかった。

「この忙しい時に余計なものが…」

溜息を吐いてユリアが悩ましげに言葉を発する。

「良い？ 取り敢えず大人しくしてなさい。そうすればこれ以上の罪は重くならないわ。多分ね」

ユリアなりの慰めといったところだろうか。

それでもシスカの震えは止まらない。

(情けない奴…。男の癖にめそめそしちゃって)

正直、シスカはユリアの嫌いなタイプだった。

思い思いに今後のことを考えながら歩く。  
突然、ずしんと重い音がして激しい揺れを感じる。  
この揺れは何度も感じたことがある。  
敵襲だった。

## 第2話 初陣

「うわっ！」

「な、なんだ？」

大きな揺れにルカやユリアはよろけてしまい、シスカは尻餅をついた。

「いてて…」

床に打った尻を押さえながらシスカは立ち上がる。

艦内に警報が鳴り響き、クルー達が慌しそくに走り回っていた。

「これは、まさか…！」

ユリアは周囲を見渡し、シスカとルカを睨む。

鬼気迫る真剣な表情だ。

「早く来て！ ルーディメンツが攻めてくる！」

「ルーディメンツだと？ よっしや、見に行くぞシスカ！」

「馬鹿、何言ってるんだよ！ この人の言うとおりにしないと危ないよ！」

外に出ようとするルカの腕を掴んで、シスカは叫ぶ。

途端、目が眩むような光がシスカのポケットから発せられる。

「これは、さっきの…！ いや、違う…」

先ほどの白い光とは違い、今度は青い光が強く発せられ道標を示す。

（…行かなきゃいけない気がする。さっきの光も今の光も何かを伝えたいのだとしたら…）

光の示す方にシスカは走り出した。

「ちよっと、待ちなさい！」

ユリアがシスカを追いかけようとする、その腕をルカが掴む。

「な、何？」

「何じゃねー。その銃下ろせ。こうなったら逃げも隠れもしねーよ」

「…わかったわよ。ただ、妙なことしたら容赦なく撃つ！」



「へいへい。分かってっから、そんな怖い顔すんなって」  
頭をぱりぱりと搔き、ルカは欠伸をする。

しかし、少女は警戒を怠ることなくルカを睨み彼の後ろを歩いて  
いた。

「はあ…はあ、はあ…」

光の示す方に走ると、格納庫の奥の暗い場所へと辿り着く。  
エオリアキーが唯一の光となって、その場所を照らし、輝きは増  
していく。

「うわわっ！ 眩しっ…！」

眩む目を堪え、光り輝くエオリアキーの示した先を見る。

一際輝く鋭い光がその方向を示すと、それが明らかになる。

「ッ！ これって…ブレス？」

目の前には巨大な体があった。その顔は、高く見上げないと見え  
ない。

瞬間、胸の高鳴りを感じた。

少しずつ、それに近付いていくうちに胸の高鳴りは増していく。

そしてひとつの単語が脳裏に響く。

「スフォル…ツァンド…？」

その名を呟いた瞬間、それに呼応するようにブレスが起動しスパ  
ークしたように光が発せられる。

眩しくて目を開けられない。

「うわあああっ！」

あまりの眩しさに悲鳴が出た。

「シスカ！」

後ろからルカがシスカを呼んだ。

「ルカ！ これ…」

「ちよつとあんた！ 何やってんのよ！」

ユリアが怒りの形相でシスカの胸倉を掴む。

その表情にシスカは、肩をビクツと震わせた。

「う…ごめん」

「民間人が何でエオリアキーなんか持つてんのよ！」

「そ、それは…その…」

「はつきり喋りなさいよ！ あんた、ただじゃすまないわよ！」

「何やってんだ、ユリア！」

怒鳴り声を上げるユリアの背後から男の声が聞こえる。

カンカンカンと鉄製の階段を急いで降りる音がした。

振り向いて男に気付くと、ユリアの手がシスカの胸倉から外れる。

「ロック隊長」

「今、ジェントが戻る。ルバートもかなりの損傷だ。手があいてるなら手伝ってくれ」

「損傷つてまさか…！」

「左目と右足がやられてる。これ以上の戦闘は無理だ」

「そんな！ 唯一ブレスに乗れる副隊長が動けなかつたら、もう…」  
ぐつと隊長と呼ばれた男、ロックは歯を食い縛る。

ガラガラガラとストレッチャーの音がして、そこには恐らく今話していたであろうブレスのパイロットが左目と右足を血塗れにして苦悶の表情を浮かべながら運ばれていた。

その姿にシスカの顔が青褪めた。

今まで考えたことも無い騎士隊とブレスの戦闘がこんな間近で現実として視界に入っている。

関係ないと思っていたものが、妙にリアルで戦場に出るのはこんな怪我が出るほど命がけでリスクが高いのだと理解できた。

「おい、誰がブレス乗りがいねえって？ お前ら見るよ。此处にいるじゃねえか」

ルカがニヤリとシスカへと目を向けて肩に手を回した。

「なあ、シスカ」

「へっ？」

何を言ってるのか分からないとでもいうようにシスカは不安げに

ルカを見た。

その様子を見てルカは不敵に笑い、シスカの背中を思いきり叩いた。

「いった！」

「この俺が説明してやるう。シスカの持つてるエオリアキーが光った先にブレスがある！　そんで、こいつはシスカが現れたことで起動した！　ブレスがシスカに反応したって事は資格があるってことたる。　イケるぜ！」

「は…はあああつ？」

ルカの簡易的な説明にシスカは、信じられないようなものを見る目でルカを見て叫んだ。

「無理！　無理だつて！　俺なんか、ただの庶民だし騎士でも何でもないよ！　動かせるわけないから！　イケない！　全然、イケない！」

大体、怖いし。

死にたくないし。

涙目でルカに抗議するシスカは、自分には無理だと首を横に振った。

「無理に決まってる！　何も訓練を受けていない民間人が戦えるわけ無いでしょ！　あんた何言ってるの？　その子に死ねって言ってるようなもんよっ？」

怒りの頂点に達しそうなユリアも叫び、ルカを非難した。

だが、ロツクは少し考えるように首を捻った。

「君のエオリアキーが反応したのか？」

「え、いや…俺のって言うか…これは、そもそも騎士隊のもので…俺は届けに来ただけで…その、えっと…ごめんなさい！」

焦ったように頭を下げて、シスカはエオリアキーをロツクに渡した。

しかし、渡した瞬間、光は薄れ、次第にただの透明な石に戻ってしまっ。

そしてプレスも反応を示さなくなった。

「…………イケるな」

「…へ？」

ニヤリと何かを企むような凶悪な笑みをロツクは浮かべ、エオリアキーをシスカに渡す。

再び青い光が瞬き、同じようにプレスも起動する。

「そのキーは持ち主を選ぶ。こいつに乗る資格のある奴以外に光を委ねることは無い。坊主やってみないか？ 寧ろ、やれ」

「や、やってみるって？ え、や…やれって…どうということ…ですか？」

ピクリとシスカの顔が引き攣った。

「プレスに乗って戦わないか？ 大丈夫だ、死んでも俺が全ての責任を持つ」

「し、死んでも…って…む、無理無理無理！ 無理です！ 俺なんか戦えるわけ無いですっ」

首が取れそうなくらいシスカは首を横に振り、涙目で訴えた。

「隊長！ 民間人に戦わせるなんて、いくらなんでも無茶苦茶です！」

「おー、おもしれえじゃねえか。やってみるよシスカ。こいつで勝って政府の鼻へし折ってやるうぜ！」

「じゃあ、ルカがやってよ！ 無理だよ、俺には…！」

面白がるように笑うルカに対してシスカは拒否を止めず、ルカにエオリアキーを差し出す。

しかし、ルカはシスカの額をぺちんと叩いた。

「あたっ」

「お前、さっきこのオッサンが言った事忘れたかよ。そいつはもうお前のもんだ。このデカブツもな」

「だ、だけど…」

言い訳を探すシスカにエオリアキーを握らせると、ルカはシスカの頭に片腕を乗せて笑った。

「な？ やつてみるって」

「うっ…そんな…だつて…」

「頼む、坊主。もう乗れる人間がない。さつき見たとおり、唯一のプレス乗りはともじやないが戦える状態でもないんだ。俺が代わってやりたいところだが、条件が照合しない。このままだと、この艦も近隣の町も…いや、この世界が奴らに滅茶苦茶にされる」

「隊長…」

男が哀願するように頭を下げるとユリアは止めに入ろうとしたが、彼の命を預かるという責任の重さを覚悟していることを理解し、それ以上は言えなかった。

「お、俺がやらないと…みんな、死ぬ…」

「そうだ。出来る限りでいい。危険を感じたら逃げても構わない。

少しでも可能性がある以上、賭けたい。どの道、奴らを倒さない限り俺達に未来は無い」

事の重さにシス力は震えた。

もしかしたらさつき運ばれた人間のように大怪我をして五体満足じゃいらなくなるかもしれない。

五体満足どころか、死んでしまうかもしれない。

でも、自分が負けたら人類は全滅だ。

自分が敵を倒さなければ、多くの命が失われる。

共に生きてきた友人も恩人も全て。

その重みで恐怖を更に煽られる迷いの中、大きな揺れを感じた。

「うおおおおっ！」

「きゃああああっ！」

「くそ…もうこんな近くまでっ！」

大きな揺れに全員、体のバランスを崩してしまいゆっくりと起き上がる。

しかし、シス力は迷いの中で起き上がることなく、伏したままだった。

「俺…俺が……！」

可能性が低くても、今、沢山の命を守れるのは自分だけ。

だとしたら怖くても何かをやるのは自分だけなんだとシスカは体を起こし、カタカタと震える肩を手でグッと押さえ身体を起こした。

「俺…やって、みます」

小さく呟いてシスカはブレスと向き合った。

「よっしゃ、それでこそ俺の認めた男だ！バシッと決めてやれ」

「う、うん！」

シスカとルカはハイタッチして、拳をぶつけた。

「よし、じゃあ坊主。改めて頼むな。騎士隊長のロック＝レントだ」

「シスカです。シスカ＝ブルーネル」

「ブルーネル…って、まさか…」

「え？」

シスカの名前を聞くや否やロックの表情が変わる。

「いや、こつちだ。来てくれ」

「あ、はい」

余計なことは考えまいと首を軽く横に振り、ロックはシスカを連れていく。

「頑張れよ、シスカ」

二人の背中を見送るルカは、腕を組んだ。

「こんな…民間人に頼るなんて…！」

ルカの隣にいるユリアは不安と緊張で悔しそうに小さく呟いたが、ルカは何も言わず視線を向けることも無かった。

今は何を気にするよりも友人の背中を応援することだけが今自分に来ることだと、ルカはそう思った。

\*\*\*

「準備はいいか？」

コックピットの中に入ったシスカは、緊張の息を吐き、顔をあげ

た。

「はい…！」

エオリアキーを鍵穴に差し込むと、シスカが乗るプレス…スフォルツァンドは立ち上がった。

「うわわっ…、っと…！」

バランスを崩しそうになり、慌てて操縦桿そうじゅうかんを握り直す。

握りなおした瞬間、スフォルツァンドは艦を飛び出しその勢いは止まらない。

それは、シスカが方向転換をして歯止めをきかせることで止まった。

「な、な、なんだこれ…！」

目が回りそうな感覚に酔ってしまいそうで、思ったよりも上手く動かせないことに手に汗を握る。

(…落ち着け。落ち着くんだ、俺…)

深く深呼吸をして操縦桿を握り直す。

今度は勢いをつけることなく、脳内に操作が全て入ってくるような感覚を覚え、一歩足を前に出した。

「よし、歩いた」

第一関門突破とでも言うようにシスカは、ほっと息をついた。

『坊主、何やってんだ。敵に仕掛ける』

モニター越しにロックとの通信が繋がる。

「し、仕掛けるって…どうやって…！」

『遠距離ならライフルやマシンガンがある。接近ならナイフが搭載されてる。上手く使って戦え！』

「そ、そんな！ 扱い方なんか、俺…ッ、うわあああっ！」

しどろもどろに言い訳している間もなく巨人を模したルーディメンツがスフォルツァンドに気が付き、エネルギー砲を発射する。

間一髪のところ避けるも、シスカの表情が恐怖で歪み、腕と膝は震えて笑っていた。

「あ、あ…あんなのが当たったら…」

『しっかりしろ！ 何もしなかったらただけだぞ！』

「は、はいっ！」

やらなきゃやられる。

今、戦場に立っているのは他人じゃない。自分なんだ。助けられる人なんかいない。

シス力は俯いていた顔をあげた。

とにかく、仕掛けないと。

「うおおおおあああっ！」

敵に向かい、マシンガンを撃ち込む。

戦意高揚のシス力に敬意を払うように、敵も負けじとエネルギー砲を発射した。

激しいエネルギー砲の粒子がスフォルツァンドに何発も狙い、シス力はそのたびにスフォルツァンドで逃げていた。

「ひいひい！」

やはり怖いものは怖い。

あんなものに当たったら死んでしまう。

「くっそおおおっ！ もう、どうとでもなれええええ！」

むやみやたらに攻撃するより、敵の手を封じるのが先だとシス力は涙目で敵へ突っ込んでいった。

接近戦に持ち込めば、なんとかなる筈。あのエネルギー砲は武器の位置的に近いと死角で当たらない。

だが、それに持ち込むにはあまりにも無謀な突っ込み方をシス力はしていたのだ。

早く終わってほしい。これ以上此処にいたくない。怖い。逃げたい。

そんな事ばかり脳裏に浮かんでくる。

「うわっ！」

躓いて転んでしまう。

「いつてて…。ひっ！」

顔を上げると、至近距離で敵がスフォルツァンドを狙っていた。



「ひいひいっ！ 死にたくないっ！」

情けない声を上げながら、敵から逃げる。

一定の距離を置くと素早くナイフを取り出し、敵に突き刺して体当たりをすると敵がよろける。

「い、今だ…！」

そこから距離を置くことも無くマシンガンを撃ち込む。

怖くて怖くてたまらないけど、初めて乗ったとは思えない。

自分の手足のように動かせる感覚に、シス力は自分の機敏さに驚いていた。

シス力だけではない。

艦の中にいた誰もが、その戦闘の鮮やかさに目を離すことが出来なかった。

### 第3話 覚醒

一方、ブリッジではその様子を艦の者達は啞然と見ていた。

「あれが…初めて乗った人間の戦い方か？」

ロツクは、生唾を飲んだ。

モニター越しに情けない悲鳴が聞こえ続け、戦い方も滅茶苦茶だった。

しかし、確実にルーデイメンツヘダメージを与えている。

戦い方を磨けば、確実に化ける素材だった。

「こりゃ、いい拾いもんしたな」

ニヤリとロツクは笑って見せると勝利を確信したように頷いた。

「敵前方から高エネルギー反応！」

オペレーターの少女が戦闘の状況を伝える。

「坊主、いいか。闇雲に突っ込むな。遠くから…」

「シスカ！ やれ！ やるんだ！ 正面突破で蹴散らせええ！」

ロツクの言葉を遮ってルカが絶叫する。

「なっ…！ お前、何を…。ユリア！ お前、何をしているんだ。」

勝手にブリッジに入れるんじゃない」

「も、申し訳ありません…！ いきなりこの男が凄い勢いで走り出

して…。はあ…はあ…。お、追いつかなくて」

ブリッジに息を切らしたユリアが入り、呼吸を整えた。

その様子に仕方ないとも言おうようにロツクはルカに目を向けて肩を落とし、再びモニターに目を向けた。

「いいか、坊主。生き延びたかったら言う事を聞けよ。慣れないお前が出来ることには限界がある」

このまま焦って闇雲に突っ込んだままだと、死んでしまう確率が上がるだけだ。

必死にロツクは指示を送った。

\*\*\*

ブリッジのやり取りと命令を聞き、シス力は操縦桿を握った。

しかし、それを握ったまま、敵からの攻撃を避けるだけで、中々反撃のチャンスを伺えない。

「遠くからにしても近くても…敵が素早く狙えない…！ さっきの攻撃もあんまり効いてないし…あんなの当たったら、死んじやうよ！ も、もう無理だよ！」

『シス力、逃げるんじゃねえ！』

ひたすら逃げ場を探し走り回るシス力の耳にルカの怒号が聞こえる。

「ルカっ？」

『お前は一度やるって決めたんじゃねえか！ だったら、ちゃんとやりやがれ！ お前のやり方で！』

「お、俺のやり方？ 何言ってるんだよ。いい加減、限界が…」

『うるせえ！ お前ほど根性のある人間はこの世界の何処にもいないんだ！ 自分で限界作っちゃったら、そこで終わりなんだよ！』

「そ、そんなこと言われても…だって、死んじやうよ！」

『その程度の奴にやられるくらいなら死んじまえ！』

「なっ…！」

ルカのその言葉に流石のシス力も頭を熱くさせた。

「戦ってるのは俺なのに…好き勝手言ってるな！ こっの…馬鹿ルカアアッ！」

シス力の怒りと同調するようにスフォルツァンドもパワー出力を上げていく。

それをさせまいとでも言うように敵が一際強いエネルギー砲を發した。

「ちまちまちま…遠くから攻撃してんじゃねえっ！」

恐怖の震えではなく、やり場の無いルカへの怒りをぶつけるように突進をして敵の攻撃をエネルギーのシールドで防御し、拳をルー

デイメンツの顔に減り込ませる。

「お前を倒して、少しでも早く…ルカをぶん殴る！」

目的が履き違えたことを当然のようにシスカが叫ぶと同時にスフォルツァンドの拳から増幅されたエネルギーが溜まり、手を開くと大きなエネルギーが発せられルーデイメンツが爆発する。

\*\*\*

その様子をブリッジにいたロックを始め、ルカを除いた全員が硬直した。

「ユリア…あんな防具と武器どうやってつけたんだ？」

「…あんなのつけようがないです。…というか初めて見ました」

「怒りと根性で新しいものを生み出したって…解釈でいいのか？」

「現実的には考えられないので…回答できません…」

結果はオーライだが、信じられないことと突っ込み所が多すぎて開いた口が塞がらない。

その中でルカだけが満足そうに笑った。

「相当、イケてんじゃないか」

新しい玩具を見つけた子供のようにルカはモニターに釘付けになっていた。

しかし、ほっとしたのも束の間、警報が鳴り響く。

「な、なんだ！」

「スフォルツァンドから高度の熱源発生！」

「パイロットはどうしたっ」

「脳波メーター、レッドゾーン！パイロット生死不明！コック

ピット内の温度が急上昇しています！」

艦内で警報が鳴り響く中で、バタバタと幾人もの者達が走り出す。

「スフォルツァンドを回収しろ！パイロットの救出を最優先！

早くしろっ！」

ロックが指示を出すとますます人数は増え、その場を動ける者全

員が機体回収と救護作業に入った。

「シスカ！ おい、起きやがれ！」

モニターに向かい、ルカは大声で叫んだ。

しかし、シスカにはその声は届かなかった。

「シスカ！ シスカアアアア！」

叫ぶことしかできないルカは友人の目を覚めることを願い、喉がはちきれそうな程にシスカの名を呼んだ。

しかし、スフォルツァンド内で倒れるシスカにその声は届かなかった。

\*\*\*

身体中が熱い。熱くて溶けそうに息が苦しくなる。

このまま死んでしまうのかな…。

そんなことを考えて、ぼやける頭が徐々にはつきりとしてくる。

「う、ううん…」

薄っすらと目を開くと、シスカはベッドの上にいることを認識する。

いつも下宿しているロイドの店の古臭いベッドとは違う清潔感のある真っ白なベッドだった。

無機質で殆ど物が置いていない。

横を向くとベッドの隣には何かの波を刻む機械が稼働され、その機械はシスカの頭に取り付けられている。

「なんだ、これ…あぐっ！ う、うう…」

起き上がるうと身体を起こすと頭に激痛が走る。

眩暈がするほどの激痛に頭を抑えずにはいられない。

いう事の聞かない身体と謎の機械に混乱するシスカは目が回りそうだった。

その時、見たことの無い一人の少女が部屋に入る。

「あ、駄目ですよ。まだ安静にしていな」と

「え…あ、あの…君は？」

「あ、はい。アニーミ…アナリーゼと申します。騎士隊の戦況オペレーターをしています」

「あ、う…うん。俺は…」

「シスカ…ブルーネルさんですよ。もうこの艦であなたを知らない人はいないと思いますよ」

ふふ、とにこやかに笑い、アニーミは手に持ったタオルでシスカの汗を拭った。

「え、な…何で？」

「シスカさんはルーディメンツを倒した英雄さんですから。ただ、あの後コックピットがオーバーヒートして…あと少し遅かったら手遅れだったみたいです」

アニーミの言葉に想像したシスカは背筋を凍らせ、怯えた表情を浮かべた。

「お、俺…ちゃんと生きてるんだよね？」

「はい。足もついてますよ」

「良かった…本当に良かった。もう俺…あんな怖い御免だよ」

「え？ シスカさんって…騎士隊に入隊するんじゃない？」

「はっ？」

アニーミの言葉に耳を浮かべた。

誰が何に入るって？

「ごめん、もう一回…」

「はい。だから、シスカさん…騎士隊でのプレスパイロットとして入隊するんですよね？」

「なっ！ ななななな…！」

動揺とシヨックで言葉にならない。

取り付けられた機械の波は激しくなり、シスカは目を回した。

「無理！ 何が無理って、あんなの乗りたくないし戦いたくないし

！ 騎士なんて無理だし！」

「シスカさん、落ち着いてください！」

「うう…」

アニーミに怒鳴られ、シスカはしょんぼりと肩を落とす。

その様子にアニーミは苦笑をして機械を止め、機械からシスカの頭へ伸びてるコードも外した。

「これは…?」

「シスカさんの脳波状態を示す機械です。倒れた時、以上に高い脳波粒子が出てそこから脳死状態だったので」

「の、脳死?」

「はい。でも、三日前には通常の脳波に変わりましたのでシスカさんの意識が戻るのを待つだけだったんです」

「み、三日? 待って、あれから何日…」

「今日で七日目です。あ、でもあまり動く…」

「あ、大丈夫。こう見えて身体は丈夫だから…」

シスカが心配をかけまいとアニーミに答えようとした時、布団がもぞりと動いた。

「きゅ?」

「え?」

布団から飛び出し、白いゴムボールのような感触の動物がシスカの身体をよじ登り、頬を舐めた。

「うわっ! な、何?」

「へー、もう生まれたのか」

シスカの肩に乗る謎の生き物をつつく突然現れた男に、シスカもアニーミも驚きの表情を浮かべた。「ジェント副隊長」

見覚えがあった。

先日の戦闘で大怪我をした人物だ。

左目には眼帯をしている。

引き摺っている右足は恐らく義足だろう。

ジェントは優しい表情をアニーミに向けた。

「すまない、アニーミ。彼と二人で話したい」

そして、再びシスカに向き直る。

意味深なジェントの笑顔と謎の生き物に、シスカは戸惑いを隠せない表情を浮かべていた。



## 第4話 ソルフエージュ

「騎士隊の入隊…って、俺には、無理です…！」

震える声で、シスカは俯いた。

シスカが意識を失っている間、先日の戦闘の映像を見ていた上層部がシスカを騎士隊に入れる手続きを行っていた。

スフォルツァンドに唯一乗れる人物。

そして先日の戦闘でルーディメンツを倒したという功績。

戦力として、シスカを手放したくなかった。

「この間の戦い…。初めてにしては…いや、君のあれは熟練した騎士に値するほど君のブレスの扱いが巧みだった」

「でも、あの時は…無我夢中で…。」

「それでも、上は高く評価していたよ。また、興味も示している。

勿論、戦力としても欲しい逸材だ。でも、それ以上にシスカ「ブルーネル」という君個人に対する興味を持っている」

「え、俺…？」

「君は、ブレスを設計した技術者…ブルーネル夫妻の息子だそうだね？」

「は、はい。でも、父さんと母さんはもう…」

「うん、既に亡くなっている。六年前にね」

「はい…」

両親の死を知らされた時のことを思い出し、シスカは俯いた。

「辛いことを思い出させて悪かった。しかし、君とスフォルツァンドが共鳴したことに何かしらの可能性を感じているんだ。これは、君とブルーネル夫妻を繋ぐ形見に等しいものなんじゃないかい？」

「だけど、それとこれとは別で…！」

「…こういう言い方は、あまりしたくないんだが」

眉間に指を添えて、ジェントは溜息を吐いた。

「正直、君に拒否権はないんだよ」

「え…？」

シスカは顔を上げた。

拒否権が無い？

どういうことだろうか。

「君が元々この艦に来たのは何の為だ？」

「そ、それは配達に…。…あっ」

シスカは、艦に来たいきさつを思い出す。

政府極秘の配達物を開封してしまった上に成り行きとはいえ、それを持ち続けてしまった。

立派な犯罪で、捕まっても何ひとつ文句は言えない。

捕まるどころかこんな大きな犯罪を犯したら最悪、死刑になる可能性もある。

「分かってくれたみたいだね。明日にでも本部に来て欲しいんだが…身体は大丈夫かな？」

「は、はい…。大丈夫…です」

何も言い返せず、俯いて布団を爪が食い込むほど握り締めるシスカを見兼ねたように謎の生き物がシスカの頬を舐める。

「おー、随分懐かれてるね。俺の時は全然懐かなかつたのに」

「あ、あの…これは一体…」

「ああ、そっか。何も聞いてないから知らないんだ？」

「へっ？」

目をパチクリとさせるシスカに小さく笑ってジェントは続けた。

「そいつはエオリアキーから生まれた生態系なんだ。普通は孵化するのにもっと時間かかる筈なのにな」

「…はい？」

「プレスに乗り続けることでそいつは成長し、そいつとの信頼でプレスは強くなる。プレス乗りとしては貴重な存在なのさ」

「…ということは…エオリアキーの分身って考えていいんですか…」

？」

「物分りがいいな」

「いえ…そんなこと…」

言いかけた時、シスカの瞳が戦慄した。

「ルカ！ ルカはっ？」

自分と同じようにこの艦に来たルカが何の処罰を受けない筈が無い。

自分が目を覚まさなかった七日間、ルカがどうなったのか。

シスカの中で嫌な予感がして声を荒げた。

「心配しなくていい。彼は今個室に監禁してる。食事も与えてるし大丈夫だ。ただ、退屈のせいか暴れてはいるがね」

「よ、良かったあ…」

ほっと一息つくシスカにジェントは笑った。

「彼も君のことを心配してたよ。シスカに何かしたらこの俺がぶっ飛ばしてやる！ てね」

「…何やってんだよ。自分の立場考えろよ、少しは…」

小さく溜息を吐いて頭を押さえるシスカに再びジェントは小さく笑う。

「じゃあ、明日迎えに来るよ。それまでゆつくりと身体を休めるといい」

そう言ってシスカの返事を待たず、部屋を後にした。

「…でも。俺にはやっぱり…騎士隊なんか、無理だよ…っ」  
声を搾り出すように震えてシスカは呟いた。

「きゅー？」

心配そうに謎の生き物は、シスカを見遣る。

それに見向きもせず、シスカは布団に潜り縮こまり、ただ震えていた。

\*\*\*

呆然とシスカは、その建物を見ていた。  
今まで見たことの無いくらい巨大な建物。

この建物を見てしまえば、プレスなんて小さな人間に見えてしま  
い、自分達はそれ以上にちっぽけな者だと思ひ知らされる。

これが、世界で一番大きな建物…。

政府直属の騎士隊を取り纏めるソルフエージュ。

ごくりとシスカは息を飲む。

今から自分がその組織の関係者になると思うと、緊張で震える。

そんなシスカの背中をジェントが優しく叩く。

「行こうか？」

「はい」

緊張したままシスカは、ジェントの後ろへついていった。

\*\*\*

中に入ると、鍊機動を使った機械が数多に作動していた。

どれも興味の引くもので、アシスタントロボットや建物全体を把  
握するためのモニターや関係者のみ使用が許される指紋認識するこ  
とで開くことの出来る扉。

「…凄い。まだ汎用的に使われてないシンフォニエッタまで登用さ  
れてる…」

自然とその言葉が出て、シスカは目を輝かせる。

機械好きで自然に鍊機術の知識を蓄積し続けたシスカにとって、  
此処の最新技術は宝の山だった。

「ほう。随分と博識な少年だな」

背の高い中肉中背の軍服を着た男が歩いてきた。

「どうやら、迎えらしい。」

鍊機術に夢中になってたシスカは、現実に戻され言葉を捜し  
ていた。

「す、すみません。えと…あ、その…」

「何を謝ってるんだ？ シロフォン「サステインだ。役職は大尉にあたる。…錬機術にお熱なのは良いが、先に用事を済ませようか。シスカ「ブルーネル君」

「は、はい…！」

やってしまったとばかりに、シスカは肩を落とした。

どうしてもこういった技術を見ると興奮してしまう。

ずっと、昔からそうだった。

錬機術が、唯一の物質と残る家族との絆で自分にはこれしかないから。

だから、その興味だけは何があっても薄れることはない。

自然にそう出来ている。

それでも、この場所に来た意味を考えると気を落とさずにはいられなかった。

\*\*\*

シロフォンにとある一室に案内される。

「失礼いたします」

そうシロフォンが声をかけると、扉が自動でスライドされる。

部屋の主の操作によるものだ。

入っても良いという証拠だ。

どんな人物が待ち構えてるのかと思うと緊張で胸の高鳴りが止まらなかった。

部屋に入ると妙な匂いがした。

これは、煙草の臭いだ。

顔を上げると、アシスタントロボットに灰皿を持たせ気だるそうに椅子に座り堂々と煙草を吸っている女性がいた。

眼鏡をかけたスタイルの良い女性だ。

格好だけ見れば、キャリアウーマンに見えるがそのワイシャツの着崩し具合で胸の谷間が覗く。

灰皿には山のような吸殻。

「おー、やっと来た？ 待っていたよ」

ニヤリと笑い、その女性は吸殻を揉み消し立ち上がった。

まさかと思うが…もしかして、彼女が…。

「初めまして、カペラ」ノクターン。一応、どうでもいいけど…階級は大佐。ま、よろしく」

あまりにも軽い言葉だった。

「は、はい。シスカ」ブルーネルです。あの…」

しどろもどろのシスカに、カペラはチツと舌打ちをする。

「ああ？ 何だよ、ルーディメンツを瞬殺したっていうのに思いっきり草食系のガキじゃねえか。シロフォン、マジでこいつがあこのブルーネル？」

「はい、間違いありません。先日、資料をお渡ししましたが…」

「んなもん見るかボケ。あたし見る資料は戦績とサインするものだけって知ってんだろが。ま、いいや…話には聞いてるし、あの映像で力は分かったしな」

そう言っつて、カペラはシスカに顔を近付けて覗む。

まるで性質の悪いチンピラだ。

「成る程…。面立ちは似てんな」

「え…？」

「ん、いや別に。まあ、取り敢えず…今日からお前はあたしの部下…つまり騎士だ。よろしくっつーか、ご愁傷様」

人事のように言う。

とにかく、ルカとは違う意味で怖い人間だ。

しかし、スラム育ちのシスカはチンピラなど怖くないがこれが騎士隊のトップとなると話は別だ。

カペラに対する不信よりも、シスカは彼女の言葉が胸に刺さった。騎士になる…。

その言葉が重い。

「ま、でもジェントがこの状態だ。人を動かすほど余裕はねえし、

適応者もいない。…悪いけど、当分一人で戦ってくれ」

「そ、そんな！ 無理…俺には、無理です！」

「こないだの戦い方なら問題ないだろ。命令だ。やれ」

「だって…あんなの、俺だってわけわかんなくて…次、同じようにいくか分からないし…それに…」

「あー、うぜえ。逃げ道作るように言い訳すんじゃないよ。もう一回言っぞ。命令だ、やれ」

にっこりとカペラは笑う。

「…ッ」

苦しそうにシスカは俯いて拳を握った。

「おい、シロフォン」

「はっ」

「あとよろしくー。煙草切れた」

そう言っつて、カペラは部屋を後にする。

その背中をシロフォンとジェントは見送った。

「相変わらず適当な人だなあ」

「しかし、それ故の力と信頼があっつてこそ、この場を束ねられる。

…ブルーネル。軍服とエンブレム、それと資料を用意した。今日から、身に着けるように。資料は戻ったら熟読し、現場のレント少佐に従え」

「……………」

シスカは言葉を発せず、動かなかった。

シロフォンが渡した紙袋をジェントが代わりに受け取った。

「サステイン大尉。あとは俺が…」

「うむ…」

シロフォンは頷き、ジェントを全てを委ね、その場を後にした。

「さ、行こう。シスカ」

ジェントは、シスカの肩を抱き歩かせた。

現実味が沸かなくて、シスカはただ呆然とするしかなかった。

言葉でしか理解できない現実が…明白になっていく。

そんなシスカをジェントは、真面目な顔つきで見ている。  
唯ひとつ言えることは、こんな状態のシスカが戦場に出たら間違  
いなく勝てない。  
それだけだった。



## 第5話 決意

騎士隊の艦に戻ったシスカは、部屋に閉じ籠りベッドに横になっていた。

強制的に正式入隊。

しかも、前線に出るのは自分一人。

どうしてこうなった？

誰のせいでこんなことになった？

ルカだ。

ルカが積荷を開けなければ…こんなことにならなかった。

違う…。

ルカのせいじゃない。

誰のせいでもない。

人のせいになんかしちゃいけない。

分かってる。

分かってるけど…俺は、俺じゃない原因を探したがっている。

「最低だ、俺…」

掠れた声でシスカは呟いた。

\*\*\*

「様子はどうか？」

エレベーターでジエントと居合わせたロックは、ジエントの顔を見ずに尋ねた。

「予想通りかな。震えて部屋に閉じ籠ってる」

「ま…かなり強制的にやらせたからな。ただの民間人がいきなりブレスに乗ったり騎士隊に入隊したり…展開が早すぎて、戸惑わない

方がおかしいな」

「それに加えてあの性格…か。まあ、それだけ人と時間が足りないんだけど。悪いね、俺がハマしちまったせいで」

「いや、よくやってくれたな。義足の調子はどうだ？」

「あんまり慣れてないけど何とか歩けるくらいには。まあ、でも口ツク隊長も人遣いが荒いつてか何と言うか…」

「すまん。人手が足りないんだ」

「分かってる」

チーンと音がして、エレベーターの扉が開かれた。

「んじゃ、行って来ます」

「ああ、気をつけて行けよ」

笑いながら敬礼するジェントに苦笑を浮かべてロツクは手を振った。

エレベーターの扉が閉まり、再び動き出す。

「民間人の子供に無理矢理戦いを強要する大人か。人手不足とは言え、本人としては堪らないだろうな」

深い溜息を吐いてロツクは頭を掻く。

「まあ、早いとこ立ち直つてくれることを祈るしかないか」

そうでなければ、使い物にならない。

折角の適応者に簡単に死なれたのでは、それこそ取り返しのつかないことになる。

戦術をなくしたら、人類が絶滅してしまう。

その為に、自分達がフォローをしてやらないといけない。

万全な状態で戦えるように、環境もコンディションのケアも仕事だ。

隊長として、一体何が出来るか…ロツクは頭を悩ませた。

\*\*\*

部屋を出た後、シスカの足は自然に格納庫へと向かっていた。

与えられた軍服は、まだ着ていない。

今は、袖を通す勇気がない。

シスカの肩には、エオリアキーの具現化した謎の生き物が乗っていた。

シスカは、気にも留めなかった。

ただ勝手にこの生物がついてきただけで、気にする余裕なんてなかった。

スフォルツァンドを見上げた。

大きな大きなその存在は、自分の手には余りすぎて拾いきれない。あの時、どうやって戦ったのかよく覚えていない。

だから、次に戦うことを考えると凄く怖かった。

「……………」

シスカは、ぐっと胸を抑えて俯いた。

「ちよつと、あんた」

背後から声が聞こえる。

「うわっ！」

突然声をかけられ、シスカは驚いて声を上げる。

「そこに立たれると邪魔なんだけど」

「ぐ、ごめん。えつと……」

「ユリア「アナリーゼ。メカニックよ。これでいい？ さっさとどいて」

「あ…うん」

ユリアの気難しい顔に怖気付いて下がると、シスカはその場を去ろうと踵を返した。

「ちよつと、あんた」

「え…？」

ユリアに声をかけられ、振り向く。

「あのバイクって、あんたの？」

格納庫に置かれたシスカのバイクを指差す。

「うん、そうだけど……」

「整備とかもあんたが？」

「え、うん。…何で？」

「何でって、鍊機動エンジンとか部品とか普通の民間人が改造するには難しい部品ばつか使ってるから。何？ 整備の仕事でもやってんの？」

「え、いや…。俺は、ただの配達のアルバイトだけだ」

「…鍊機術の知識があるってジエント副隊長から聞いたけど、知識どころの話じゃないわよ」

「え…？」

溜息をついてユリアは、少し考えた後にシスカの腕を引いた。

「うわっ」

「ちよつと来て」

ユリアに腕を引かれたまま、シスカはついて行く。

一体何事だろうか。

自分が何かしでかしたのではないかと不安になる。  
連れて行かれたのは、奥にある機関室だった。

「一箇所が作動しないのよ。この艦が今、飛行出来ないのはこれが原因」

「そうなんだ…」

ぼつつと機関室を見渡し簡略的な感想を述べるシスカに、ユリアは訝しげな表情を浮かべる。

「…手伝って」

「え？」

「あたし、そこまで鍊機動エンジンに詳しくないのよ。業者もあちこち忙しくてこっちまで回らないし…。飛行機関が無いと不便なのよ、色々よね」

「でも…俺、手伝えるかな」

自信なさそうにシスカが言うと、ユリアは少し離れた場所からいくつかの機械を持ってくる。

そしてそのうちのひとつをシスカに向けた。

「これは？」

「え？ 錬機モーターのアゴギグだよね」  
即答。

ユリアは次の機械を取り出す。

「これは？」

「浮遊CPU。タブ」

そして更に次を取り出す。

「これは？」

「錬機チップ。チター」

全て即答だった。

どれも一般的に使用用途がない部品ばかりだ。

ユリアは悔しそうに拳を握った。

「…く、悔しい」

「え…？」

「あんたがマニアックすぎて悔しいって言ってんのよ！」  
ぺしつとユリアはシスカの額を叩く。

「いてっ」

「あー、もう！ チンタラしてんな。早く来なさい！ そんだけ詳しくければ、業者なんかいらさないわよ！」

「え、ちょ…ちょっと！」

無理矢理、ユリアはシスカの腕を引っ張り、制御室へと連れて行った。

少しだけ忘れられた。

沢山の命を抱えるプレッシャーから、少しだけ逃げる時間が出た。シスカはそう思った。

\*\*\*

機関室ではユリアがモニターでの操縦、シスカが飛行機関の内部での調整を行っていた。

「ユリア、タブ二番六番上げて」

「わかった」

シスカの指示に従い、ユリアはモニターを操作する。機械の一部が上に上がると、シスカは更にそこに潜り込む。

その顔は普段の頼りない表情と違い、生き活きとした職人の顔をしていた。

オイルまみれで器用に部品を丁寧に取り付けていく。

それは、まるで機械に息を吹き込んでいくようだった。

そんな姿にユリアは、拳を強く握った。

悔しいが、メカニック技術では歯が立たない。

それを見せつけられた気がして悔しかった。

この艦では誰よりもメカニックでは一番の筈の自分が完敗だと思  
うと悔しい。

「次、七番と十一番お願い」

そんなシスカの次の指示。

だが、ユリアは拳を握って歯を食い縛ったままだった。

「ユリア？」

反応がないユリアに何かあったかとシスカが顔を上げてゴーグル  
を外す。

俯いていたユリアに駆け寄る。

「大丈夫？　どっか、具合でも…」

「触らないで！」

シスカが手を伸ばそうとした瞬間、ユリアはその手を叩いて振り  
払った。

「ご、ごめん。汚れちゃうよね。えっと、その…大丈夫？　結構時  
間経ってるし…疲れた？」

「…違うわよ。何でもないから。次、何処？」

「え…タブ七番と十一番。多分、これで故障部分は終わると思う。

…まだ飛べないけど、準備くらいなら…。多分、飛行まで一気に手  
を回すと、早くても寝ずに三日くらいかかったから」

「そんなにかかるもんなの？」

「う、うん。プログラムで設置しても…シミュレーションテストと欠陥調整、浮遊速度と高さの計算、耐熱衝撃テストとか…」

何で初めて触ったのにそんなことまで分かるのか、本当に整備士じゃないのかと疑ってしまう。

ただの知識だけだったら、此処まで実際に手を付けられるわけがない。

少し、意地悪をしたかっただけだ。

民間人が簡単に戦場で戦って騎士隊に無条件で入れたシスカが妬ましい。

ずっと勉強して何回も試験に落ちて、漸く入れた自分と全く違う。努力もしないで…此処にいる。

そんな気持ちがあつて、嫉妬していただけだ。

自分が如何に幼稚か分かる。

「やっぱ、あんた…メカニック業やってたでしょ？」

「や、やってないよ」

「…絶対、暴いてやるわよ！ あんたの秘密！ 早く行くわよ、七番と十一番よねっ？」

「う、うん」

一体何事かと流れについていけないシスカだったが、早いとこ終わらせてしまおうと再び飛行機関に潜り込んだ。

そして暫く経つと、漸く故障された部分が修復された。

「悔しいけど、本物だわ。あんたくらいのメカニックがいればいいのに…」

「……………」

再び現実に戻されて、シスカの表情が暗くなる。

「でも、あんたの仕事は別よね。ま、頑張りなさいよ」

「頑張るって…何を頑張るんだよ」

語気を荒くして、シスカは呟く。

「一人であんなのと戦えなんて、俺に死ねって言うのかよ！ 死なないうように頑張れってことか？ それとも死んでもいいから敵を倒せってことかよ！ 無理だ、そんなの…俺は…俺なんか…」  
捲くし立てるシスカの言葉の途中でユリアの平手打ちが、シスカの言葉を遮った。

シスカは、腫れたその右頬を抑えた。

「甘ったれてんじゃないわよ」

「だって…俺なんか、勝てるわけないよ。こないだのなんてまぐれだし…次、同じことが出来るかなんて…」

「何言いつして、自分正当化させようとしてんのよ！ じゃあ、何であんたは此処にいるの！ 何ですぐ逃げようとするのよ！」

ユリアは、強くシスカの胸倉を掴んだ。

「無理だつて決め付けて、自分を卑下してそれで何？ そんなに抱え込む必要なんかある？ 自分が周りに認められてるなら、自分の出来ることやりたいことを貫きなさいよ！ 何でスフォルツァンドに乗ったのよ！ あんたのそういうところが嫌いなよ、あたしは！」  
「俺は…怖くて…でも、俺がやらないと皆死んじゃうって…皆を守らなきゃって…でも、怖い…怖いんだ！ 何が悪いんだよ！」  
「だから何よ！ いいじゃん、そんなの怖くたって！ あたし達だつて戦つてんのよっ」

ユリアのその言葉に、シスカは止まった。

「え…？」

言っている意味が分からない。

戦っているのは自分だけじゃない？

「パイロットとブレスを万全な状態にして、常にサポートする。それがあたし達の仕事。パイロットが命をかけて戦ってるなら、あたし達は命がけで最良の環境を作る！ パイロットの命を預かるのがあたし達の仕事なの！ 一人で戦えるわけなんてないんだから、思いつきりあたし達を頼りなさいよ！」

真摯に向けるユリアの表情にシスカは、この目を逸らしてはいけ



ないと思った。

怖くてもいい、怖かったら頼ればいい。

その言葉が、安心を与えてくれる。

「きゅー」

地面にいた謎の生物がシスカの身体をのぼり、肩に伝わると頬を舐めた。

「…一緒に戦ってくれるのか？」

「きゅきゅきゅっきゅー」

任せるとばかりに、それは頷いた。

分かっていた。

逃げたかっただけだ。

誰かが助けしてくれるのを待っていた。

でも、毎回誰かが助けしてくれるなんて甘い世の中じゃない。

だったら、俺が…俺が、手を伸ばす側に入りたい。

だから…！

「…ありがとう。ユリア」

シスカは、ユリアの手を解いた。

まだ、恐怖は残っているが、決意を固めた瞳だった。

「俺、頑張ってみる。何処までできるか分からないけど…多分、そ

の…出来る事は少ないと思う。でも、皆が支えてくれるなら…きっ

と、怖くても大丈夫な気がするんだ」

「…シスカ」

先程の臆病風に吹かれたシスカではなく、まだ頼りないけどそれでも充分だった。

そして、シスカは柔らかい笑みを浮かべる。

緊張して泣きそうで張り詰めていた顔ではない。

「よしっ」

自分の両頬を叩いて、気合を入れたシスカは謎の生物に笑顔を向けた。

「一緒に頑張ろうな、スフォル」

「きゅっ」

その言葉にユリアは首を傾げた。

「スフォル？」

「あ、うん。エオリアキーの具現化された生き物だし…こいつの場合、スフォルツァンドだし。長いから、スフォルで」

その言葉に、ユリアは噴き出して笑った。

「何それ。単純すぎ」

くくつとユリアは、笑いを堪えた。

「な、なんだよ。いいじゃないか…こいつだつて気に入ってるんだし」

「ま、何だつていいけどね。…それより、あんた」

「え…？」

「シャワー浴びたら？ オイル臭いし。悪いけど、そのままでコックピットに入らないでよね。後処理大変だから」

「あ…う、うん」

思えば、自分はオイルだらけで汚れてることに気付いた。

服も顔も汚れていて、流石にこのままでいたら、スフォルツァンドが可哀相だと思うのは否定できない。

それに、覚悟も出来た。

戦う恐怖はまだあつて、考えるだけで震えそうになる。

それでも、みんなも戦ってくれている。

その人達の助けになりたい。

そう思うと、少しだけ勇気が湧いて来る。

一人じゃない。

ただの捨て駒なんかじゃないと、そう思えた。

\*\*\*

ソルフエージュ本部。

ジエントは、再びカペラに会いに行った。

傍らにはシロフォンもいる。

「じゃあ、頼むよ。お前も今日からあたしの部下だ」  
煙草を吹かして、カペラは笑った。

その人物も同じように不敵に笑う。

「おうよ、任せておきな！ このルステイカピッツィカードのでつけえ花火見て驚きやがれ！」

そう言っつて、エンブレムと軍服を手を取ったのは、ルカだった。

「あ、でもまだ戦闘は出られないよ。ジェントの代わりなんだし、ルバートも今修理中。ま、周りに迷惑かけない程度に大人しくしてな」

「んだとオ？ じゃ、あれか！ 俺の派手なステージは？ ルーデイメンツの打ち上げ花火はっ？」

「暫く後だね」

「くっそおおおおお！」

ルカの悲鳴がソルフェージュ内に響いた。

その後、うるさいとカペラに蹴られシロフォンに叩かれジェントの毒舌を喰らったルカは肩を落とした。

こうして、彼も騎士隊に入隊することになった。それもジェントの後継として。

その事実をシスカは、今は知る由もなかった。

## 第6話 蜘蛛の脅威

「んで、話って何だ？」

ロイドの店に戻ったシスカは、今までのあらましを話した。

そして、今後の自分のことを説明した。

積荷を勝手に開けたことの謝罪。

騎士隊に入隊して、ブレスパイロットになること。

そして、この店を辞めること。

「なるほどな。まあ、騎士隊と二足の草鞋は無理だしな」

「勝手にすみません。でも、俺…」

「何言ってやがる。おめえが決めたことだ。やるからには、しっかりやれ。…と、その前に」

ロイドは、拳をコキツと鳴らし、シスカの頭に拳骨をした。

「いって！」

ゴツイ拳の第二関節が思いっきり当たって痛い。

半分涙目になり、シスカは頭を抑えた。

「積荷勝手に開けやがって。馬鹿か、お前ら！ つーか、ルカも一

緒だったんだろ？ あいつはどうした」

「それが…ちよっと、わかんなくて」

「あ？ どういうことだ」

「なんか、捕まってるらしいんだけど…会つのも駄目だった」

「ま、あの野獣は何するかわかんねえからな」

「や、野獣って…」

はは、と苦笑するシスカの頭の上にロイドの大きな手が乗る。

優しい撫で方だ。

「ま、あんま気イ張るなや。おめえの部屋はそのままにしとくから

よ」

「はは、うん。ありがとう。でも…」

頬を搔いて笑うシスカは、何かを決意したようなそんな笑みを浮

かべた。

「逃げ道は、自分で作らないって決めたから」

その笑みに、ロイドは喉元で笑った。

弱虫シスカなんかじゃない。

まだ頼りないが、強い意志を込めたその表情に成長したのだと嬉しくなった。

しかし、何処か無理してその意思を固めたようにも見える。

「ま、人間やるうとしてすぐに出来るものとそうじゃないものがある。ゆっくりやんな」

「…今まで、お世話になりました」

最後の教えを感謝すると同時に、今までの礼を含めシスカは頭を下げた。

こんなに関心のことを考えてくれている恩人の為にも自分は、”守られる側”ではなく”守る側”にいたい。

その為に、戦う。

怖くても、少しずつ…出来ることを。

\*\*\*

騎士隊に戻るとシスカは、軍服に袖を通し左肩にエンブレムを付けた。

きつちりとした着方はどうも堅苦しくて苦手だった。

胸元のボタンを二つ程外し、袖は七分に捲くった。

軍服をいかに動きやすく着こなす為の措置だった。

格納庫でスフォルツァンドを見上げる。

「おー、似合うじゃねえか」

「ロック隊長…」

背後から聞こえたロックに振り向き、シスカは顔を強張らせ、敬礼をした。

「本日付より、騎士隊ブレスパイロットとして尽力させていただきます

ます。シスカ「ブルーネルでっ……」

折角の堅苦しい言葉が最後まで言えなかったのは、言葉を嚙んでしまったからだ。

「あ、そ…その…。あう…」

顔を赤くして恥ずかしそうに慌てるシスカにロツクは笑った。

「え、な…わ、笑わないで下さい！俺だって慣れない言葉使つて…えと…」

「いや、悪い悪い。ホント、そういうところゼウスさんに似てるな。顔はジェシカさん似なのに」

「え…」

ロツクという言葉から両親の名前を出されてシスカの表情が固まった。

「ああ、アレだ。ブレスの設計チームがあの人達がいた研究所だからな。俺も昔、世話になつたんだよ」

ロツクは、シスカの背中を軽く叩いた。

「ま、あんま気張るなよ。俺達もいるんだからな」

「あ…はい」

ぼつとシスカは、ロツクを見た。

この人が騎士隊の司令だなんて思えなかった。

確かに戦闘での指示は、それっぽいが目の前の人物は妙にフランクで…。

「どうした？」

「あ！い、いえ…！何でもないです」

「お前なあ…」

ロツクは、呆れたように溜息を吐いた。

「言葉飲み込むのやめろよ。ストレス溜まるし、周りにも良い影響与えないぞ」

「…でも」

「でもじゃねえ！気合を入れるシスカアアア！」

ロツクから目を逸らしたシスカの背中にぶつけるように大きい声が響いた。

ハツと振り向くとそこには仁王立ちのルカがいた。  
軍服のボタンを全部外して、胸元が全開になっている。

シスカが驚いた顔で瞳を戦慄させると、ルカはニヤリと笑った。

「何、豆が鳩鉄砲喰らった顔してんだよ」

「それ、逆だから」

鳩が豆鉄砲喰らうだと内心冷静に思いながらも、ルカが軍服を着ている事実にはシスカは驚きを隠せなかった。

「何でルカが軍服着てんの？ ……誰かの身包み剥がして着たの？」

「お前、俺を何だと思ってるんだ？ あア？」

「いや、だって…信じたくないんだけど…まさか。いや、冗談だろ？」

「冗談なわけあるかよ！」

ビシツとルカは、天井を指差した。

「このルステイカー…ピツツイカード！ 騎士隊プレスパイロットとして就任！ でっけえ花火上げてやつから、覚悟しやがれイ！」

「……」

シスカは、手元にあったレンチをルカに投げ、それはルカの頭に直撃した。

「いつでええええええ！ てめえ、何しやがる！」

「寝言は寝てから言えよ！ 現実に持つてくんな！」

「寝言じゃねえ上に、信じらんねえからってこんなもん投げんじゃねえ！ 下手したら死ぬぞ！」

「だって、何でルカが…！ これ以上プレスないだろ、此処に！」

「あ、それ俺の後継」

シスカとルカが取っ組み合いをしている所にジェントが現れた。

「よう、お勤めご苦労さん」

「一応、俺…安静にしないとイケないんだけどね」

ロックが手を振ると、ジェントは苦笑する。

そして、再びシスカとルカに目を見遣る。

「俺の乗ってたルバートとの相性ばつちり。下手したら俺よりもね。」

現に俺って右足と左目潰れちゃったから戦えないし。だから、ルカの言うことは本当だよ」

「まあ、まだ修理中だし出撃は出来ないけどな」

「そ、そんな…」

シスカは膝を落とし、頭を抱えた。

心強い味方ではある。

しかし、それ以上に…。

シスカは、ルカを睨む。

「んだよ、やんのか？」

「…馬鹿ルカ」

シスカはぼそりと呟き、走っていく。

「あ、テメ…！ 待てコラア！ やんのか？ おい、やんのか！」

ルカがシスカを追いかける。

その慌しい姿にロツクは、深い溜息を吐く。

「やれやれ…元気があるんだか無いんだか」

「彼、あんな表情もするんだね。これは、ルカを配置して正解かな？」

「どうだろうな」

「え…？」

安心するジェントだったが、ロツクは二人が去った入り口を見た。

「あいつの性格だ。友達を危険な目に遭わせたくない。…大方、そんな所だろ」

「だからこそそのバイオレンス？ 成る程。でも、あいつらだったら

上手くやっていけそうな気がするよ」

「珍しいな。お前がそこまで目を置くななんて」

「ん…というか、面白いタイプの二人だからかな。期待はしていないけど、楽しみだよ」

「期待してねえのかよ。やっぱ、お前らしい」

ロツクとジェントは笑った。

今後、どんなアクションを若い二人が起こすのか楽しみと言う意



味では共感出来た。

そんな中、艦内に警報が響いた。

シスカが初めて戦闘に出た以来の警報だ。

ロックとジェントは、ブリッジへ。

ルカと戯れていたシスカは、格納庫へと走った。

\*\*\*

スフォルツァンドの中で、シスカは目を伏せ小さく深呼吸をした。精神のを集中させ、操縦桿を握る。

「スフォルツァンドとの同調が…。これ、どこまで上がるんだ」

ジェントがシステムモニターを見ると、シスカとスフォルツァンドのシンクロ率を表すメーターが上がっている。

最初に乗った時とは比べ物にならないくらいの安定したシンクロ率。

「まだ、テストもしていないのに…。相性が良いと言うよりも、これじゃあまるで…」

その後の言葉をジェントは、飲み込んだ。

\*\*\*

スフォルがシスカの肩を降りてエオリアキーに変化し鍵穴に入り込むと、シスカはゆっくりと目を開きエオリアキーを捻った。

スフォルツァンドの目がカツと開き、動き出す。

シスカの手は小さく震えていた。

いくら、前向きに考えても怖いものは怖い。

周りもサポートしてくれるのは、分かっているけど…それでも理屈とは違う。

「…ッ、落ち着け。落ち着けば…きつと…」

そう自分に言い聞かせるが、手の震えは止まらない。

『シスカ!』

通信でルカの声が聞こえた。

また勝手に通信に割り込んできたのは、安易に想像出来る。

『此処でお前を縛るもんなんて何もねえ! いいか、お前はお前の思うように進め』

「ルカ…」

『お前はもう弱虫でも何でもねえ。お前の傍には俺達がいる! だから思いつきり暴れて来い』

いつもの無茶無謀とは違う頼もしく心に勇気を与えてくれる言葉だった。

その言葉に、不安な表情から勇ましい表情になり頷いた。

「スフォルツァンド、シスカ! ブルーネル。出撃します!」

そう言って、スフォルツァンドは艦を飛び出した。

\*\*\*

着地すると、そこに見えたのは巨大で足が沢山生えた蜘蛛のようなルーディメンツだった。

「こないだと形が違う…」

『ルーディメンツには、色んな種類がいる。そいつに捕まると厄介だ。遠距離からの攻撃をメインにしていけ』

「は、はい!」

ロツクの言葉にシスカは頷いて、スフォルツァンドがビームライフルを構えて敵に向かって撃つ。

ビーム状の粒子が敵を貫いて、轟音が響いた。

「や、やった!」

一発で倒せた。

自分でも出来るんだと、シスカの中に僅かだけ自信が沸いたその時だった。

『シスカ、逃げる!』

「え…？」

気付くのが遅かったか、背後にいたルーディメンツが糸を吐いてスフォルツァンドを拘束した。

「うわっ…！ こ、こんなものっ」

ビームサーベルで糸を切ろうと操縦桿を動かした。

糸に絡まれて身動きが取れなかった。

「な、何で…？」

それどころか、凄まじい速さでエネルギーが消費していく。

「な、何なんだよこれ！ エネルギーが…！ お、俺…どうしたら

…」

無闇やたらに操縦桿を動かすが、びくともしない。

そういえば、先ほどから通信の音が聞こえない。

完璧に遮断されている。

影が落ちる気配を感じて、ハッとシスカは顔を上げた。

ルーディメンツが大きな口を開けていて、そこからは禍々しい霧が吐き出された。

「う、う…うわああああああっ！」

恐怖でシスカは叫んだ。

機体が軋む。吐き気がするほどの気持ち悪さにシスカは涙目になる。

「な、んだ…これ…。身体の中に…変なの、が…！ うあ…あ…」  
息が苦しくなる。

口や耳だけじゃない身体の穴という穴に黒い霧が入り込み、コックピット内のシスカは身体ごと捕らえられた。

吐き出すことも出来なくて、窒息しそうになる苦しみに意識が薄れていった。

\*\*\*

一方、ブリッジは混乱していた。

通信が遮断され、モニターには糸に絡まれて黒い霧に覆われたスフォルツァンドがビクとも動かない。

「パイロットの様子も見れないのか！ コックピットの生体反応は  
っ？」

「ただいま、リンクしています。…照合！ …あっ…」

アニーミが言葉を詰まらせ、顔を青褪めた。

「パイロットの生体反応、レッドから沈黙…しています」

「何だっ？」

その言葉にロックが瞳を戦慄させる。

アニーミは涙を浮かべていた。

「おい、ど…どういうことだよ。分かるように言えよ！」

ルカが、ロックの肩を掴んだ。

それを振り払い、ロックは悔しそうな表情で口を開いた。

「死んでるってことだよ」

## 第7話 おかえり

黒い霧に包まれたシスカの意識は、淀んだ海に浮いていた。周囲一面、禍々しい濃厚な紫と黒が支配する。

一体、何が起きたのか。

まるで、此処は地獄のようなイメージを持つ。

（死んだ…のか？ 身体感覚が全然ない）

自分の筈が、感じる感覚は何もない。

身体の温かさも感覚も、そして…感情も。

「……………」

きつと、このままこの混沌の海を彷徨うのだろう。

終わった。

全て、終わった。

結局、自分は何の役にも立てずに無駄死にだったのだと、そう思っても何も生まれてこない。

その目には光が無く、虚ろに濁っていた。

ルーディメンツに飲み込まれ、全て支配されてしまった。

混沌の海の中で彷徨っていると、僅かに光るものを見つけた。

それを感情のない瞳で見ていると、何かが映し出された。

男性と女性…それと、小さな子供。

シスカの両親と、彼らが生きていた頃の幼いシスカだった。

みんな、笑いあって楽しそうにしている。

温かい家族。

仕事の忙しい両親は家をあけることが多かった。

しかし、家の中に一人でいても父親が書いてくれた簡単な設計図で玩具を作っている楽しそうな自分。

二人が帰ったら、見せてやるんだ。

そうはしゃぐ幼いシスカは、成長した自分とは切り離された別人のように感じた。

『おお、凄いな。素質あるぞ、シスカ。将来の夢はメカニックか？』

『ううん、父さんや母さんより凄い優秀な技術者になる！』

『大きく出たわねー。楽しみじゃない？』

『流星は俺達の息子だなー』

そうやって、両親は頭を撫でてくれる。

作った玩具は、友達にも人気があつたし、作る楽しみもあつた。

そして何より、両親が褒めてくれる。笑ってくれる。

認めてくれる。

これしか能のない自分を…周りは認めてくれる。

二人が死ぬまでは。

二人が死んで、身寄りがなくなった自分を認めてくれる人なんていない。

優しい近所の人も友達も、二人が優秀だから、その子供の俺に媚を売っていただけだ。

可哀相で哀れな子。身寄りも無く、引き取ってくれる人なんかいない。

ただ、同情されて見て見ぬ振りをされた。

自分には何も出来なかった。

同じじゃないか。

二人が死んで、スラムに逃げていた頃と全く同じ。

心なんてない。それでも身体に僅かでも栄養を入れれば生きてこれた。

でも、今は…奴らの栄養となってるのが、自分なんだ。

(もっ…駄目だ。早く…楽になりたい。こんなのは、嫌だ)

黒い霧が纏わりついて、シスカの体を蝕む。

どこまでも深くなる混沌の海に沈んでいくシスカに、先程までの光が遠ざかっていく。

(いっそ…殺して。死んで楽になりたい…)

恐怖も何も無い。

呼吸が出来ない。

それなのに感覚は何も無い。

早く楽になりたい。

『シスカ、駄目よ』

声が聞こえた。

(母…さん?)

間違いないその声は、シスカの母であるジェシカの声だった。

『駄目。そっち側に行っちゃ駄目よ』

『戻るんだ、シスカ。負の心が奴らの餌となる。お前は、餌じゃない。何も出来ない奴じゃない。奴らに身を委ねちゃ駄目だ』

今度は、父親のゼウスの声まで聞こえた。

いや、俺は何も出来ない。

誰かの為に何かをするなんて…出来ない。

『シスカ、あなたを待っている人たちがいる。あなたを必要としてくれているわ。諦めては駄目よ』

『手を伸ばすんだ。そして、掴み取れ。大丈夫だ、俺達もずっと傍にいる。見えなくても、お前の近くにいますから』

二人の懸命な言葉に、シスカは漸く本来の思考を巡らせることが出来た。

(待っている…人。そうだ、戻らなきゃ。諦めたら…諦めたら、終わり…。終わって…しまう)

シスカの指先がピクリと動く。

『シスカ』

『シスカ、行こう』

二人が、シスカの名を呼ぶ。

(俺は…違っつて…あの頃とは違っつて、そう自分に言い聞かせて

いたのに)

シスカの目から一筋の涙が零れ、全ての感覚が戻ってきた。

「あっ、ごぶっ！」

急に息苦しさが戻ってきて、水の圧迫感に苦悶の表情を浮かべる。

「ッ、かつ…！」

禍々しい黒い霧が体を蝕み続ける。

苦しくて、痛くて…でも、その痛みに生きているということを実感させてくれる。

また精神が蝕まれかけている。これに身を委ねてしまつたら、二度と戻れない。

(行かなきゃ…。戻らなきゃ…。待ってる。皆が…俺を待ってる。待ってるんだ)

シスカは、苦しさと痛みを堪えて、硬直した手を無理矢理伸ばした。

その目には、光が戻っていた。

禍々しいそれは急速に絡み続けるが、それを抗った。

「ッ、がほっ！ あ…ッ！」

黒いものが喉の奥に入り、水もそれに続いて意識が飛びそうなほど苦しい。

それでも、シスカは気を強く持った。

(俺は…俺は…！)

身体が冷たい。

痛くて苦しくて、頭がおかしくなりそうだ。

だけど、そんな身体の痛みより何より…皆の所へ…帰りたい！

その意志だけでシスカは、抵抗してひたすら手を伸ばした。

\*\*\*

ブリッジ内で、ルカは瞳を戦慄させた。

「し、死んでるって…シスカが死んでるってどうということだよ！」



んなわけねえ… あいつが、そんな簡単に死ぬわけがねえ！」

「……事実だ」

ロツクの言葉に、ルカはカツと顔を熱くさせる。

「ふざけんじゃねえ！ んなもん誰が認めるか！」

ダンツ、とルカは壁を殴りつけた。

突如、モニターの色が変わり始めた。

反応が切れた生体反応が動き出し、それは徐々に赤から緑に変わっていく。

「スフォルツァンドに生体反応あり！ パイロットの安否を確認！

オールグリーン」

アニーミが、それを伝える。

「蘇生したただとっ？」

信じられないが、モニターの生体反応は裏切ることなく緑色の上限まで行った。

そして、通信がスフォルツァンドから送られた。

『隊長…』

掠れた声のシスカだった。

「シスカ！ どういうことだ！？」

何故、生きている？

あんなに蝕まれていたのに…。 現に今も黒い霧は健在だ。

『…ッ、かはっ…！ …俺、分かりました』

今もきつと黒いそれが、シスカの身体を蝕んでいるに違いない。

その中で意識を保って喋る。

よっほどの強い意志と根性がないと無理だ。

『…あいつを…うぐっ…倒す方法が』

その声に驚いたが、ブリッジにいた人間の表情が徐々に柔らかくなる。

「……分かった。お前に任せる。必ず生きて帰って来い」

『…はい』

そう言って、通信は切られた。

ルカは、外のモニターから目を離さなかった。  
「お前の全力出して…絶対に帰って来い。絶対だ！」  
真面目な顔つきで、ルカは戦う親友にそれだけを伝えた。

\*\*\*

黒い霧に覆われながらも、スフォルツァンドは立ち上がった。  
機体に絡む糸を熱源を上げて焼き尽くす。  
いつの間にか、エネルギーメーターが上限まで達していた。

「ッ、ぐ…」

黒い霧は止むことを知らず、シスカの身体の中に入る。  
痛みと苦しみを振り払い、シスカは顔を上げて操縦桿を握り締め  
た。

身体には大量の汗が流れていたが、シスカは目の前の敵しか見え  
ていない。

ビームナイフを取り出し、敵へと突進する。

\*\*\*

その様子にブリッジにいる誰もが、驚愕の表情を浮かべた。

「一体何をする気だ？ 近づいたら益々餌食になるだけだぞ！」

「大丈夫だよ」

ロツクが驚愕する中で、ルカが軽く言い放つ。

「シスカは、馬鹿じゃねえ。大丈夫だ」

その言葉は信頼している証だった。

口こそはロツクに言っているものの、ルカの目はスフォルツァン  
ドを見据えたままだった。

そんなルカの表情を見て、ジェントは小さく笑った。

根拠もなくこの圧倒的に不利な状況で自信満々に言い切るルカと、  
その信頼を勝ち取るシスカに興味が湧いた。

\*\*\*

外ではスフォルツァンドが蜘蛛の形をしたルーディメンツに飛び乗り、背中を何度もナイフで突き刺し、銃弾を撃ち込む。

先程のライフルで生きているということは、跡形もなく消すしかない。

苦しさが息が詰まりそうでも、シスカはルーディメンツへの攻撃は止めない。

「ぐっ、げほっ…ッ」

吐き出したいのに吐き出せない。

だけど、此処で…気持ちで負けたら、それこそ終わりだ。

「うおおおおおっ！」

シスカが叫ぶと、ナイフに更に大きな粒子が密集し、刃先が伸びて敵を貫く。

そして、同時に爆発が起こる。

爆風の中で立っていたのは、スフォルツァンドだった。

黒い霧は消えていた。

スフォルツァンドからも、シスカからも。

そのまま、スフォルツァンドは艦に戻り、膝をついた。

「ふっ…はあはあはあ…げほげほっ、げほっ！」

一度に呼吸が戻った所為か、シスカは咽た。

「きゅー？」

鍵を抜き取ると、スフォルが心配そうにシスカを見ていた。

その様子に汗だくの状態で無理して笑い、シスカはスフォルを抱きしめた。

「大丈夫、平気だよ。…ちゃんと、生きてる」

ふう、と息を吐いてシスカは、シートに寄りかかる。

(あの時、父さんと母さんの声が聞こえてなかったら俺は…)

今更ながらに寒気がした。

死の恐怖。

どうして死んでもいいなんて…楽になりたいって思ったのだろう。死んでしまったら全部終わってしまうというのに。

戦闘中、殆ど息が出来なくて痛くて辛かったけど、諦めなかったから勝てた。

諦めなかったから、此処にいる。生きていられる。

そして、守れた。

自分でも、それが出来たんだという達成感があった。

ハッチが開かれ、覚束ない足取りでシスカは、コックピットを出た。

「うわっ…」

まだ頭に酸素が行っていない。

頭がくらくらして、平衡感覚がよく分からない。

それでも、この生きてる足で歩きたかった。

「シスカ」

ロックやジェント、ユリアにアニーミ達、艦のクルー、そしてルカが迎えてくれた。

「あ…えっと…うわっ」

ロックは、足が纏れて転びそうなシスカを支えて頭の上に手を置いてぐしゃぐしゃと撫でた。

「よく頑張ったな！」

笑顔だった。

誰もが笑顔をシスカに向けてくれた。

「よく生きて帰って来てくれたな」

「顔に似合わずやるじゃん、アンタ。見直したわ」

「シスカさん、無事で何よりです」

ジェント、ユリア、アニーミが優しい言葉をかけてくれた。

あの厳しい人達が、認めてくれた。

「ま、これがシスカの実力よ！ こいつを甘くみるんじゃねえぞ！」

「うわっ！」

ルカが口ツクから奪うように、無理矢理シスカの肩に腕を回して引き寄せ歯を見せて笑った。

「何でアンタが偉そうなのよ！」

すかさずユリアが突っ込みを入れて周囲は、どっと沸いた。

みんな、笑っている。

その笑顔を見て、シスカは呆然と見ていた。

そして、自然と顔が綻ぶ。

見たかったのは、これだった。

この笑顔だった。

「みんな……」

シスカが笑みを浮かべる。

その言葉に全員が口を閉ざし、シスカを見た。

そしてシスカは、一呼吸を置いて続けた。

「ただいま」

その柔らかい口調と言葉に、誰もが嬉しさと喜びを露にするのだった。

## 第8話 芽生えた心

「どうだ、様子は？」

ロックがスフォルツァンドのシミュレーションテストを行っているスフォルツァンドを見ながら、ジェントに尋ねる。

「安定も安定。可もなく不可もなく。精神状態も戦闘テストも耐吸力も平均的だね」

「そっか。まあ、安定してるなら良いが…。この間のあれは、一体何だったんだ？」

先日の戦闘…

確かに敵に取り込まれて、シスカの心臓は止まった。

しかし、絶望的な状況で彼は立ち上がることが出来た。

根性とかの問題じゃない。

有り得ない。

しかし、それを目の前で実現した。

分からなかった。

「さあね。火事場の馬鹿力か、才能が開花しきれてないのか…様子見かな」

「ふむ…。よし、シスカ上がっていいぞ」

ロックが通信を送ると、シスカは伏せていた目を開き脱力感に煽られたように深い溜息を吐いてシートに凭れ掛かった。

初めに比べれば、張り詰めていた緊張感や変に入る力は無くなったものの少しは緊張はする。

適度な緊張が丁度いいというのは分かっているが、どうも慣れない。

\*\*\*

スフォルツァンドから降りると、視界にルカとユリアが入った。  
「だから、こし餡あんだっつってんだろっが！」

「アンタ馬鹿じゃないの？ 粒餡あんに決まっつてんでしょ！」  
何か言い合いをしている。

この二人は顔を合わせると、いつも何か言い合っている。  
犬猿の仲なのか、それとも仲が良すぎるのか。

気にする必要は無い上に、絡まれる可能性があるから此処は逃げよう。

そう思っているうちに二人がシスカを見つけた。

「おうっ！ シスカ、ご苦労さん」

「テストもかなり慣れたみたいね。お疲れ」

二人の労いの言葉に、シスカは苦笑した。

「う、うん。ありがとう。じゃ、俺はこれで…」

「ちよつと待て！」

逃げようとした矢先、ルカがシスカの首根っこを引っ張った。

「ユリア、この際だ。シスカに判定貰おうじゃねえか！」

「面白い。受けて立つわよ！」

「え…？ え、あの…」

二人で話を進行していて、シスカには何のことだか分からない。

しかし、二人の言い争いの中心に立たされてるのは確かだ。

「おい、シスカ！ 餡あん子こついたらこし餡あんだよなっ」

「粒餡あんよね？ 何を分かりきったことを！」  
成る程。

この二人は、餡子の好みについて喧嘩していたのか。

ちよつと馬鹿馬鹿しいけどそれが妙におかしくて、シスカもその話題に乗った。

「…ものによる、かな」

「あ？」

「何よ、はつきりしないわね」

ルカとユリアが怪訝な表情を浮かべる。

「えーと…例えばの話なんだけど、鯛焼きは基本は粒餡が主流だろ。逆にこし餡は柏餅や団子とかによく使われるし。だから、一概にどつちとは言えないよ」

「つーことは…お前」

「うん。俺、どつちも好き」

シスカの回答に、ルカもユリアも盛大な溜息を吐いた。

「お前らしいっちゃお前らしいけどよ…」

「正論すぎ…。なんか馬鹿馬鹿しくなってきたわ」

興奮めしたとばかりに、ルカとユリアの熱も下がった。

「あれ、そういえばアニーミは？　なんか今日見かけなかったけど」  
同じ年頃の四人は、割と一緒にいることが多い。

しかし、今日は朝からアニーミの姿が無いのだ。

「ああ、あの子はサークルで遅くなるって」

「サークル？」

シスカとルカは顔を見合わせて首を傾げた。

初めて聞いた言葉だ。

「いや、あのさ。前から疑問だったんだけど…」

眉間に指を添えて、ユリアが溜息を吐く。

「あんたら、学校は？」

ユリアの言葉から出た単語に、二人は目を逸らした。

「いや、俺…下町育ちの貧乏だから」

「俺は、なんとなく。面倒くせえ」

シスカの困った表情とルカの当たり前のように言う口調に、ユリアは呆けた。

つまり、この二人は何の教養も無い。

シスカはバイトをしていたというのは聞いていたが、学校と二足の草鞋かと思っていた。

ルカに至っては、ただの馬鹿である。

「あー、いたいた。お前ら今いいか？」



タイミングを見計らったように、ロツクが三人に声をかける。

「ロツクさん」

「おー、ロツクじゃねえか。どうした？」

「コラッ！ アンタら、仮にも上司なんだから隊長って呼びなさいよ」

あまり堅苦しい事は苦手なシスカとルカは、どうもその呼び方が苦手だった。

シスカは呼ぼうと思って努力しているものの、しどろもどろになり不自然だからとロツクが了承した。

ルカに至ってはこの性格。もう諦めた。

「仮にもって…俺、階級少佐なんだけど。まあ、いいか。シスカ、ルカ。お前ら、学校行け」

ナイスタイミングな話題。

しかし、ただの雑談の中の一部と違ったロツクの言葉にシスカとルカは驚愕する。

「お前ら、ガキだろ。騎士隊にいるってことは、政府関係者。それが、教養がねえっつーのは建前的に悪いんだよ」

面倒臭そうにロツクが煙草を吹かす。

「金ならこつちが出す。節度守ってある程度の成績出せば遊んでいいから、とにかく行け」

「で、でも…」

「命令」

シスカが言い逃れの言葉を搜すも、ロツクのその言葉に従わざるを得なかった。

「既に準備は出来てる。部屋に制服やら必要なモンは置いてあるから、明日から行けよ」

「…はい」

「ちっ、しゃーねえな」

あまり乗り気でない二人だったが、命令なら仕方が無い。

それに暇を持て余して艦にいるよりは、退屈しなくて済みそうだ。

「それから、シスカ」

「え？ あ、はい」

「お前の場合は、こっちのテストとかあるからサークル活動禁止な。あくまで本業はこっちだからな」

「はい、分かりました」

シスカが返事すると、ロックは満足そうに笑い踵を返してその場を去った。

「あんたもう怖くないの？ 妙にあっさりしてるけど」

ユリアが、シスカに尋ねる。

「いや…うーん、別にそんなことはないけど」

「ま、良い傾向だからいつか。そういや、学校の授業に錬機術もあつたっけ。あんた、好きでしょ？」

「錬機術っ？」

ユリアの言葉に、シスカは目を見開き輝かせた。

「錬機術の授業なんてあるの？ え、どういふのかな。あ、もしかして将来的に一般開発されるシンフォニエッタとか。それとも錬機動エンジンの実習かな。どんなの？ どんな授業？」

輝かせた目とやたら饒舌じょうぜつに興奮するシスカを見て、ユリアの口が引き攣る。

「あんた…それ、学校でやらない方がいいわよ」

「え？」

「あんたのマニアックぶりって、半端じゃないのよ。自覚しなさいよ」

「え、でも普通…」

「あんたみたいな錬機オタクは普通って言わないの。変人もいいとこだからやめなさいよ！」

「あー、無駄だぜ」

頭をぽりぽりと搔いてルカが話に入る。

「こいつにとつて身体の一部みてえなもんだし。多分、教えてる奴より詳しいぜ」

「信じらんない…。あたし、自分でも結構マニアだと思ってたけど…シスカに比べたら全然底辺だわ。ルカ、行くわよ」

「あ？」

「一応ブレスパイロットなんだからシミュレーションテストしなさいよ。シスカが終わったんだから、次はアンタ。ルバートは修理中だからテスト専用のブレスでやるわよ」

「あ、おい！ 引っ張るなって！」

ずるずると引き摺られルカは、ユリアと共にシミュレーションルームへと向かった。

ぼつんと取り残されたシスカは、特にやることも無いし部屋に戻ろうとエレベーターへ向かう。

「きゃっ」

頭上から声がした。

携帯端末を持ちながら階段を降りていたアニーミが、足を引っ掛けてしまい宙に浮いた。

その行方は空中から床へ向かっている。

「アニーミ！」

落ちたら大怪我をしてしまう。

シスカは、宙に浮いたアニーミへと走る。

アニーミが持っていた携帯端末が転がる無機質な音がした。

そして静かになった。

床に激突したのではないかとアニーミは、目を瞑っていた。

しかし、その衝撃は無い。

その代わり、温かく柔らかい感触。それは、人の温もりだった。恐る恐る目を開くと、足が浮いていた。

浮いてはいたのだが…。

「…シスカさん？」

シスカに抱きかかえられていた。

お姫様抱っこで。

「よそ見しながら降りるの危ないと思うんだけど…。えっと…大丈夫？」

少しほっとした様子でシスカは、息を吐く。

「は、はい。ごめんなさい」

アニーミは、呆けてシスカを見た。

情けなくて戦闘以外は頼りなくて不安定な男の子。

それなのに、抱えられてる手が男性特有のもののせいか何故か今は頼りがいのある男に見えた。

アニーミの頬が若干紅潮する。

多分、抱きかかえられて恥ずかしいせいだと自分に言い聞かせる。

「あ、あの…重くないですか？」

「え？ 全然。寧ろ軽いけど…。よっと」

階段を降りて、シスカはアニーミを降ろした。

ふと、落ちた携帯端末が視界に入る。

それを拾ってアニーミに渡した。

「はい」

「ありがとうございます…。あっ」

携帯端末を受け取り、アニーミはショックを隠しきれない様子でそれを見ていた。

「嘘、電源入らない…！ 壊れちゃったのかなあ」

大きな溜息を吐いて今にも泣き出しそうなアニーミを…いや、壊れてしまった携帯端末をシスカは見た。

「…ちよつと見せてもらって良い？」

「え？ あ、はい」

アニーミが携帯端末を渡すと、穴が開くほどにシスカはそれを見る。

「あのさ…その…」

「…はい？」

「悪いけど、俺の部屋まで来てもらっていい？」

「はっ？」

部屋に来て欲しい？

女を簡単に自分の縄張りに誘うような男には見えないのだが、アニーミはそう思ってしまった。

「あ、いえっ…でも」

「俺の部屋に工具があるからそこで見てみるから…って、どうしたの？」

きょとんとしてシスカはアニーミを不思議そうに見た。

慌てふためくアニーミは首を横に振った。

「あっ！ いえ、何でもないですっ」

「…？ うん、じゃあこっち」

そう言っただけに進むシスカにアニーミは顔を赤くした。

（うう…何かドキドキする。シスカさん相手に何でこんなにドキドキするかなあ）

アニーミは落ち着かせる為、深呼吸をした。

そして、二人はエレベーターに乗った。

しかし、エレベーターの中で会話が弾むことはなかった。

（そう言えば、シスカさんと二人でいるのってこの人が最初に倒れた時以来だっけ。…何話せばいいんだろ）

思考を巡らせるが、思いつかない。

ルカやユリアみたいにシスカは前に出て話すことはしない。

アニーミもどちらかと言えば聞き役だ。

沈黙がその場を支配する。

気にしているのは、アニーミだけだ。

「あ、そういえば…」

「は、はいっ？」

「…アニーミ？」

「あ、いえいえ。何でもありません！ 続きをどうぞ」

挙動不審なアニーミに首を傾げ、シスカは続けた。

「サークルって…何？」

「え？ サークル…ですか？」

意外な質問だった。

「うん。さつきユリアに聞いたんだけど、いまいち分かんなくて。

まあ、ロツクさんには入っちゃ駄目って言われたけど気になってさ

…」

「あ、なるほどですね。えっと、サークルっていうのは同じ趣味を持った友達と活動することですよ。私は料理サークルに入ってるんです」

「へえ、そうなんだ。何か楽しそうだね」

「ええ、そうですね。料理も楽しいですし、友達と一緒にやるつてのが一番楽しいです。あの…シスカさんは何か趣味とかあるんですか」

アニーミが尋ねると、シスカは少しだけ無言になった。

そして口を開いた。

「…俺には、錬機術しかないから」

何でもない言葉の筈が、何処か寂しそうに感じて違和感を持つ。

エレベーターが音を立てて開く。

その後、部屋に着くまで二人は会話をしなかった。

話題を振っても良かったが、何故か空気が重い気がした。

(何か…まずいこと聞いちゃったのかな)

しょんぼりとアニーミは項垂れる。

「あ、此処だよ」

暗証番号を入力すると、扉が横にスライドした。

「お、お邪魔します」

少し緊張気味にアニーミは部屋に入る。

「えーと、確か…。あ、適当に何かつまんでいいよ。お茶とかコ

ーヒーとかもあるし」

「あ、はい」

部屋の中に入り、小さなキッチンにあるインスタントコーヒーを手に取ってお湯を沸かす。

顔を上げると、工具箱に向き合うシスカが視界に入った。

「さて、と…」

ドライバーでネジを外して部品を抜いていき、バラバラになった携帯端末がただのパーツになってしまった。

「な、何やってんですかあ！」

「え？ ……だって、バラさないと修理できないし」

「へっ？」

「この端末、衝撃にあんまり耐えられないみたいだから…故障した部分の修理ついでにパーツ交換して耐久度高くしようかって…。あと防水にもなっていないし。デザインは新しくても中は旧型。ソフトウェアやアプリとかで誤魔化してるけどね」

口数の少ないシス力が機械になると饒舌になるというのは知っていたが、活き活きとした表情が小さな子供みたいでアニメの顔が綻んだ。

「そうなんですか？ あたし、可愛いからってつい機種変しちゃって」

「あ…か、勝手にやつちゃ駄目かな？ よ、余計なことだった…？」

「いえ、全然！ 寧ろそこまで考えてくれて光栄です！」

「…良かった。俺、こういうのすぐ気になっちゃって…。割と暴走しちゃうから…迷惑かなって…」

シス力が苦笑をする。

しかし、アニメはそこで疑問に思ったことがあった。

「あの…さっき開けなかつたですよ。何で分かつたんですか」

「いや、開ければ分かると思って。本当に故障してるって分かんなかったし、欠陥部分も今分かつたんだ」

端末を開けて一瞬で全部理解したということだろう。

本当にこの人は、凄いメカニクなのではないかと疑ってしまう。そしてシス力は、作業に入った。

基盤を眺めて、自分の工具箱から新しい基盤を取り出して器用に部品を接着していく。

次々と出す部品は見たことも無いものばかりだった。

器用さだけではない。

とにかく速い。

次のものへ次のものへと伸ばす手は止まることを知らない。

そんな姿にアニーミは、呆けながら彼の真剣な横顔を見ていた。

(何か：かっこいいなあ)

シスカに釘付けのアニーミは、目が覚めた。

沸いたお湯をカップに注いでいたが、それが零れて自分の手にかかってしまう。

「あつっう！」

その言葉にハッとシスカは顔を上げる。

「大丈夫っ？」

「す、すみません」

「いや、とにかく水で冷まして」

そう言っつてシスカは、アニーミの手をとった。

そんな場合じゃないのは分かっているものの、掴まれた手に胸が高鳴った。

火傷部分に蛇口の冷水が流れる。

「…アニーミっつて、こんな…ドジなの？」

「お恥ずかしながら…。オペレーター機器に慣れるのも一番遅かったし」

「ん、でもさ…余計なことかもしれないけど、気をつけた方がいいよ。女の子なんだし」

「あ…ありがとうございます」

俯き加減にアニーミは、心配をかけた申し訳なさと恥ずかしさに顔を赤くした。

「あ、もう大丈夫です」

水を止めてアニーミは手を拭いた。

まだ少し腫れていてじんじんと痛むが、これ以上心配はかけたくなかった。

「…手出して」



「え…?」

きょとんと目を丸くするアニーミに構うことなく、シス力は先程アニーミが冷水で覚ましていた時にあらかじめ切り目を入れていた湿布をアニーミの手の患部に貼った。

「きゃうっ」

突然の冷たさに悲鳴が出た。

その悲鳴にも構わずにシス力はアニーミの手に包帯を巻いた。

これもまた手際がいい。

「多分、すぐ引くと思うけど…もし酷かったら医務室で見てもらった方がいいと思う」

「…ありがとうございます」

「ちよつと座ってて」

「……? はい」

言われたままに椅子に座るとキッチンに消えたシス力を見ていた。そして深い溜息を吐いた。

(…呆れられちゃったかな。いくら何でも迷惑かけすぎ…。最悪かも)

徐々にアニーミのテンションが下がっていく。

「はい」

アニーミの目の前のテーブルに置かれたのは、アイスコーヒーとクッキーだった。

カランと氷が涼しい音を立てる。

「それでちよつと待ってて。もうすぐ終わるから」

特に怒っても呆れても無い様子でシス力は、作業に戻った。全く気にしていないようだ。

寧ろ作業に集中したくてアニーミのドジなど気にも留めていない。アイスコーヒーにストローを差してくれたのは、火傷した手で飲みにくいだろうというシス力の気遣いなのかもしれない。

これ以上のドジを踏まれると困るという意味もありそうだが。

(優しいなあ…)

嬉しそうに笑いながら、シスカを見る。  
蓋を閉じてドライバーで螺子を締めている。  
もう終わるのだろう。

しかし、その後シスカが出したのは裁縫道具だった。

(え、何だろう…)

裁縫道具で何か縫っているようだ。

後姿ゆえにそれが何を作っているのか見えない。

だが、それはすぐに分かった。

「はい、完成したよ」

シスカがアニーミに携帯端末と、パンダのような形を模した可愛らしく柔らかなケースを渡した。

「え、これ…」

「ほら、液晶とか本体に傷つくと嫌だろうし…。一応、液晶も交換してカバーも塗装したから。元の色が無地でラッキーだったよ…」

完璧リフォームおまけ付き。

この人は何処まで器用なのかと尊敬してしまう。

「ありがとうございます！ このケースも可愛いですっ。お店で売ってるやつみたい」

「いや、それ褒めすぎだと思っよ…。ちょっと待ってて、工具片付けて送っていくから」

「え、そんな…。大丈夫です、一人で帰れます」

「駄目」

きっぱりと言われた。

普段の頼りなくて遠慮がちな声色と違う。

「とてもじゃないけど、この状態で帰せないよ。危なっかしくて見てられないから…」

「うっ…」

確かに今回の失態を考えれば当然なのかもしれない。

「…お願いします」

「うん。じゃ、ちょっとだけ待ってて」

明らかに重そうな工具箱二つを軽々とシスカは持ち上げた。

「お、重くないんですか？」

「ん、別に。配達業やってたから力はあるし」

そう言っつて、シスカは定位置に工具箱を戻した。

器用で優しくて力もある。

全面的に情けなさが滲み出ていたせいで気がつかなかった。

（お、王子様…！）

アニーミが恋に落ちた瞬間だった。

## 第9話 憂鬱の学園

シスカは、口を開いてそれを見ていた。  
大きくて広い庭園。

まるでプロが大会で使用するような大きな校庭やテニスコート。  
町に普通にあるようなお洒落なカフェテリア。

そして、巨大な塔の如く大きな建物：所謂、いわゆる校舎。  
完璧に貴族クラスのお嬢様お坊ちゃんまが通うような学園だった。

「こ、これが…フィルイン学園…。ど、どうしよう…！」  
いくら政府関係者と言えど、場違いすぎるこの学園にシスカは拳  
動不審になる。

その後頭部をユリアが殴った。

「いてっ！」

「きよろきよろしないの。ほら、行くわよ」

そう言ってユリアは、シスカを引き摺る。

ルカは、シスカみたいに驚く様子も無く眠気で欠伸をしている。  
興味が無いようだ。

アニーミは、どうやらシスカしか見えてないようでその後姿を追  
いかけた。

\*\*\*

校舎に入ると、益々高級な一流の学園だと思い知らされる。

あまりにも広すぎる校舎に迷子になりそう目で目が回る。

「此処があたし達の教室。あんた等もあたし達と同じクラスにして  
もらったの」

「へえ、そうなんだ。ルカ、俺達今日から…って、ルカ！」

シスカが振り向くと、ルカは鼻提灯を垂らして寝ていた。

「…立ちながら寝るなんて、器用な奴ね」

「あ、そういえば…」

ふと思い出したようにアニーミが言葉を発する。

「今日の昼から艦はソルフェージュに移動するそうです。これからの拠点はソルフェージュになるので、帰宅次第荷物を整えて配置された部屋に移動するようにと隊長から言付けを頂きました」

「…結局、艦の修理する金が無いってことね。シスカみたいなものでも部品がなかったら意味ないし」

「ははは…」

顰めっ面のユリアにシスカは苦笑を漏らす。

ユリアがルカを叩き起こして漸く四人が教室に入る。

「席は決まってるから適当に座って」

「うん、分かつ…」

最後の言葉を言えず、シスカは固まった。

その瞳は戦慄き、青褪めていく。

視線の先は、何人が固まった男子生徒のグループだった。

男子生徒達は顔を上げて、教室の扉：シスカを見た。

「あつれえ？ シスカじゃねー？」

「おー、マジで？ 何であいつが此処にいんの？」

「フーか、まだ生きてたんだ？ 神経図太いドブネズミはやっぱ違うねえ」

げらげらと笑いながら男子生徒達は、シスカに暴言を吐いて笑う。

シスカは、拳を握り俯いていた。

「ちよつと！ あんた達、やめなさいよ！」

「お前ら、そいつといると臭くなるぜ？ 何たって、スラム育ちのきつたねードブネズミなんだからよ！」

ユリアが怒った様子で止めるも男子生徒達は下卑た笑いをやめない。

そんな言葉に周囲もシスカを軽蔑したような目を見た。

貴族からしたら、スラムに住んでいたような者を人間とは認めて

いない。

故にシスカは、彼らにとっての格好のストレス発散だ。いくら暴言を吐いても傷つけても構わない。

だって、人間じゃないから。

汚い汚いネズミだから。

「ふざけんじゃないわよ！ あんた達、誰のお陰で生きてるか…」

「やめよう、ユリア」

ユリアがクラスの人間に腹を立てて抗議しようとするが、シスカの言葉で止まった。

「言いたい奴には言わせておけばいいよ。俺…こういうの慣れてるから」

その言葉は何処か冷たくて、シスカは席に着いた。

「シスカさん…」

「何よ、あれ…。こんな慣れてるって…おかしいでしょ。ルカ！ あんた何で何も言わないのよ」

「あ？ 此処で俺らがキレてどうすんだよ。益々シスカの肩身狭くなんだろうが」

正論だった。

普段のルカだったらこういうことがあれば真っ先にキレル所だが、シスカの事を思うとルカが正しい。

漸く分かった。

シスカが金銭的なことを理由に学校へ行きたくないと言い訳をする理由も。

ルカがこういう面倒な事を想定してだらけたように見せて渋っていた理由も。

ユリアは何も出来ない自分が悔しかった。

「しかも、ネズミの飼い主までいんじゃない？ 何お前ら、来るとこ間違ってるじゃねー？」

「身分わきまえろっつーの！」

男子生徒達は、ルカも馬鹿にして笑った。

しかし、ルカは気にする素振りも無かった。

「へいへい。俺らはこれから人間様の勉強するんですよ。でも、言  
つとくけどよ…」

ルカは軽くあしらうが、男子生徒達を睨んで声にドスをきかせた。

「シスカに手エ出したら、ただじゃおかねえ」

その言葉に教室が静まる。

そして普段の表情に戻り、ルカはシスカの隣に座った。

ユリアやアニーミもそれに続いた。

「んだよ…つまんねー奴ら」

「おい、俺いーこと思いついちゃった」

男子生徒の一人が固まっていた仲間に耳打ちした。

「え、それヤバくね？」

「いーんじゃねえの？ 面白そうだし」

「へっ、荒くれルカが何だっつてんだよ」

ニヤリと男子生徒達は笑って、授業の準備をした。

\*\*\*

授業が開始される。

大好きな錬機術の授業だったが、シスカは憂鬱だった。

クラスの前シスカを見る目が痛い。

あちこちで、こそこそと話して笑っているのが聞こえる。

そんな姿にユリアは怒りを抑えるので精一杯だった。

（ユリア、私たちが怒ったら…シスカさんやルカさんの立場悪くな  
っちゃうから）

（んなもん分かってるわよ…）

アニーミがユリアを落ち着かせようとするが、ユリアの怒りは納  
まりそうも無い。

「それじゃ、入ったばかりで悪いが…ブルーネル」

「はい」

教諭がシス力を指名する。

返事をしてシス力は立ち上がった。

「この部品がどのような用途に使用するか、答えよ」

モニターで、教諭はある部品を映した。

「ハンマリングフィルタですね。主に液晶関係に使用します。厚さや大きさにもよりますが、現在主流と言えるのはこのようなモニターや携帯端末にカメラのレンズにテレビ等…数えたらキリが無いと思います。何に使うかという質問にするには、あまりにもざっくりばらんだと思いますけど。あ、それから現在のハンマリングフィルタは軽量化設計の他に傷や曇り防止などの…」

「ブルーネル。すまん、私が悪かった。うん、凄く分かりやすかったからもういいぞ」

教諭が冷や汗を流してシス力を止めると、黙ってシス力は席に着いた。

その様子にクラスの誰もが驚愕に目を丸くする。

エリートコースの錬機術教諭よりも、ずっと詳しいのだろう。

だから、慌てて教諭も止めた。

自分の分からない知識を口に出されそうだったからだ。

「うっわー、容赦ないわね」

ユリアがぼつりと呟く。

その顔は若干引き攣っているものの、クラスのお高く留まっている連中を黙らせるには十分な知識を見せたシス力に感心した。

「えー…何アレ。言ってること意味分かんない」

「何でスラムに住んでいた奴が錬機術なんて分かるのよ…。おかしくない？」

近くに座っていた女子生徒が怪訝な表情を浮かべる。

ユリアは、こっそりとガッツポーズをした。

アニーミも嬉しそうだ。

ルカは寝ていたが、このくらいのことは想定済みだったようだ。



しかし、シスカの表情が晴れることは無かった。  
シスカにとって、折角の錬機術の授業も当たり前前すぎて退屈だった。

\*\*\*

一日の授業が終わり、帰宅してさっさと用事を済ませてしまおうとユリアとアニーミが話しているとルカが戻ってきた。  
用を足してきたらしい。

「あー、すつきりしたぜ」

「ちよつと…やめなさいよ」

清々しい表情のルカに対してユリアは怪訝に眉を寄せる。

「あの…ルカさん。シスカさんは？」

「あ？」

見るとシスカの姿が無い。

「おい、何処行ったんだアイツ」

「え、一緒じゃないの？ あんた出てから教室出て行ったわよ」

ユリアの言葉にルカは硬直したがすぐに口を開いた。

「…おい、お前ら先帰ってる」

ルカの肩が震えていた。

その表情は怒りに満ちていた。

嫌な予感がする。

「な、何する気よ」

「心配すんな。ちよつとゴミ処理に行つて来るだけだ」

ゆらりとルカがゆっくり歩いて口元に笑みを浮かべる。

「ちよ…ちよつとルカ！」

「うるせえ！」

「ほんとに待ちなさいよ！」

「ルカさん、落ち着いてください！」

鼻息を荒くして怒るルカをユリアとアニーミが止める。

「あんたがシスカにこだわる理由って何なのよ。過保護って言うより、異常よ」

「…あいつに…あの時みてえな顔されるのが一番嫌なんだよ！俺はっ！」

ルカが大声を上げると、教室中が静まり返った。

「…あの時って…どういうこと？」

ルカは、呼吸を落ち着かせて溜息を吐いた。

「お前ら、これ知ってもあいつと今まで通りの付き合い出来るか？」

「え、何言って…」

「出来るかって聞いてんだ！」

真面目な表情だった。

シスカの過去に何があったのか…。

でも、それがどんなものかとしても変わらない。

大事な仲間：友達だから。

「シスカさんは、シスカさんです。過去は過去のこと。過去があるから今があると思います。私は、今のシスカさんが好きです」

言葉を一つ一つはつきりと言ってアニーミは、ルカに向き合った。変わるわけ無いじゃん。あんな錬機術オタクの過去の二つや二つ…。どんな過去だろうと、ルーディメンツが攻めてくるのに比べたらちよろいもんよ」

ユリアは笑った。

その言葉を聞いて安心したか、ルカは口を開いた。

\*\*\*

その頃、シスカは男子生徒達に押さえられて理不尽な暴力を受けていた。

殴打する音や蹴る音が誰もいない裏庭の茂みに響いた。

「げっほ！ げほげほっ…ッ」

圧迫感にシスカは咳き込むと、男子生徒はシスカの胸倉を掴んで

壁に叩き付けた。

「ぐっ…！」

壁に押し付けられたシスカの腹を別の男子生徒が靴底で踏み躪る。  
「調子に乗ってんじゃねえぞ、弱虫のドブネズミ」

「テメエみてえな奴が視界に入ると、目が腐るだろうが！ あア？」  
そこらのチンピラよりも性質が悪い。

相手は貴族だ。

手を出せば、ただの喧嘩じゃ済まなくなる。

シスカは堪えた。

どうせすぐに飽きる。それまでの我慢だ。

こんなもの、ルーディメンツの攻撃に比べたら痛くも痒くも無い。  
カラン、とエオリアキーがシスカのポケットから落ちた。

「お？ 何だ、こりゃ」

男子生徒の一人がエオリアキーを拾う。

「だ、駄目だ！ それはっ！」

それだけは渡せない。

血相を変えたシスカに対して男子生徒達は面白そうに笑う。

「マジその顔最高じゃね？ よっぽど大事らしいな」

「っ！か、エオリアキーじゃん。何でお前が持ってたの？ いやー、  
こんだけのお宝盗むなんて中々やるねえ」

男子生徒が、エオリアキーで軽くシスカの頬を叩く。

「違う！ それは、俺の…！」

「テメエみたいな屑が、ブレスパイロットなわけあるかよ！」

「がはっ…！！ いつ…！！」

男子生徒の靴がシスカの腹に減り込み、壁に頭を勢い良く叩きつけられる。

腹をギリギリと踏まれ、痛い。

叩きつけられた頭が痛い。皮膚の一部が切れたかもしれない。

「じゃあ、本物が確かめてやるよ。あんだだけ立派なブレスの鍵なんだ、そう簡単には割れねえだろ」

「お、おい…それやばくね？ 本物だったら、重罪だぜ」

「はっ、コイツがあんなのに乗って戦えるわけねえじゃん？ どうせ偽物だよ。例えば本物だとしても、上手く揉み消せるさ」

根拠も無く男子生徒は、エオリアキーを振り被った。

「や、やめろおおおっ！」

シスカの叫びと共鳴したようにエオリアキーが光った。

「うおっ、何だよ！」

眩い光に、男子生徒達は目を瞑る。

押さえ込まれた手と足を振り払って、実体化したスフォルを涙ながらに抱いた。

「スフォル！」

「きゅっ」

スフォルもシスカに頬を摺り寄せた。

「良かった。本当に良かった…」

スフォルは、傷ついたシスカの頬と涙を舐めた。

「何なんだよ、一体…！」

男子生徒達は起き上がる。

彼らの目の前にいたシスカは背中を見せていた。

「…俺が我慢すれば、被害が俺だけで済む。俺を殴りたかったら殴ればいい。言いたいことがあるなら例え暴言だろうと言えばいい。気が済むまで」

落ち着いた声だった。いつもと変わらない…落ち着いた声。

「だけど、一線は越えちゃいけないの…いくら馬鹿なお坊ちゃんでも分かるよね。ちょっとやりすぎ」

徐々にその声は怒りに満ちてくる。

そして、シスカは振り向いた。

封印していたかのような危険なオーラを醸し出している…怒りの瞳だった。

「一線を越えたらどうなるか、教えてやるよ」  
木々がざわめいた。

## 第10話 光と影の交差

二年前。

いつもその少年を見ていた。

スラム街で縮こまり、ボロ雑巾のような姿の少年。

冷たくて此方が凍えさせられそうな目。

同じ境遇の少年達に腹いせに殴られていて、孤立していた。

暴力を受けない間、ずっと壁越しに背中をついて座っているその少年に声をかけたかったが、凍て付いたその目が怖くてかけられなかった。

そんなことを気にしながら、毎日少年を遠くから見ると。

いつも殴られてばかりの少年が、ある日…別の少年達を半殺しにしていたことを覚えている。

少し手を加えたら、確実に死ぬ。

そんな状態になるまで彼らに暴力を振るっていた。

「わ、悪かった！ 俺達が、悪っ…がはっ！」

被害者の少年が謝罪をするも、彼は特に気にした様子も無く相手の胸倉を掴んで殴り飛ばした。

「…お前らが悪いのは、知ってるよ」

冷たい声に悪寒が走る。

足元には、家族の写真が入ったフォトフレーム…鍊機手帳。

液晶が割れていた。

失った家族の思い出を踏み躪られて、切れてはいけなものが切れてしまった。

このままではいけない。

このままでは、本当に彼は戻れなくなってしまう。

この場所から連れ出して何とかしてあげないと。  
彼を救ってあげたい。  
無表情でもたまに見せる泣きそうで辛そうな顔が忘れられない。

\*\*\*

ある日、いつも通りに壁に凭れ掛かり俯いて座る少年に近づいた。  
影が落ちたことで、少年は顔を上げた。  
生気の無い…冷たい目だった。

「なーに死んだ振りなんかしてんだよ、てめえ」  
精一杯に声をかけるのには、これが限界だった。  
正直、怖かった。

いつ粉々になって砕けてしまいか分からない繊細な少年を傷つけてしまうのではないかと恐怖した。

しかし、少年は無視をして俯いた。

「おい、シカトすんなよ」

「…あっち行けよ」

当然の返答だった。

これだけ荒んだ人間がすぐに目を合わせてくれる筈も無い。

「お前、名前は？ 俺、ルスティカ。ピッツィカード。ルカって呼んでくれ」

「……うるさい」

全く取り合ってくれない。

名前すら教えてくれない。

特に今は機嫌が悪そうだ。

でも譲れない。

この子は、こんな場所にはいけない。

太陽の下に戻してあげないと、本当に死んでしまう。

ぼろぼろの姿の彼の腕や足を見ると、擦り傷と痣だらけで痩せ細っていた。

「腹減んねーか？」

「……………」

「お前、そんなんじゃいつか死ぬぞ。周りの奴らは死に物狂いで食べ物探してんのに、お前は動かないよな」

「……人のものを盗んで食べるのは嫌だ。俺の餌は人が捨てたゴミで充分だ。…パン屋の前に行けば、売れ残ったパンが捨てられる。」

俺は、犬のようにそれを漁って食べるだけだ」

淡々とした喋り方だ。

「いいのか？ お前はそれで」

「……………」

「俺、分かるんだよ。お前はこんなところで燻くすぶってるような奴じゃねえ。立てよ、お前がいるべき場所は此処じゃないんだ。俺と一緒に行こうぜ」

手を伸ばして笑顔を向けるも、少年はそれを鼻で笑って振り払った。

「…憐れみか。いい身分だね。俺を飼って優越感に浸りたいって？」

「違う！ そんなんじゃ…」

「帰れ」

「嫌だ。俺は、お前を連れて行くまで諦めない！」

「…ッ、うっぜえんだよ！ 相手を見下して心の中で笑いながら善人ぶってる表の人間は！ てめえの優越感の為の道具なんて絶対に嫌だ！」

「話を聞け！ 俺は…」

「そんなもんになるくらいなら、死んだ方がマシだ！」

少年のその言葉にルカの顔がカツと熱くなる。

気がついたら、少年を殴っていた。

少年は激しく吹っ飛び、ゴミ置き場に倒れた。

少年の喉元でクツと笑う声が聞こえ、そして彼は起き上がった。

「ほら、俺には此処がお似合いだ。散乱したゴミの中に屑みたいな俺。どうだ、絵になるだろ？ 哀れで可哀相な汚いドブネズミの出

来上がりだ」

皮肉めいたような笑みを少年は浮かべた。

荒んでしまった心は、どうすれば修復できるのだろうか。

まだ、こんな子供なのに。

此処に来る前のこの少年は、どんな表情をしていたのだろうか。

どんな顔で笑っていたのだろうか。

見てくれじゃ同じように見えるが、この場所にいる誰よりも酷く

歪んでいる。

心が壊れていた。

同情なんかじゃない。

隣で歩きたいんだ、この子と。

「…行くぞ」

「は？ ちよ、てめ…離せよっ！」

ルカは、無理矢理少年を担いだ。

軽くて細い身体だ。

「やめろっ！ 俺に触るな！ このくそ野郎っ」

騒ぎ立てる少年をよそに、ルカは彼を文字通り持ち帰った。

\*\*\*

ピッツィカードの家は何の変哲も無い下町の一軒家だ。

これでもかと言うほど散らかってるが、それ故に生活している匂いがする。

「えー…と、俺の服で良いか？ 多分、ちよつとでかいけど」

「……帰る」

「こらこらこら！ 取り敢えず、風呂入れ。俺ん家の風呂狭いけど」

無理矢理、ルカは少年の身包みを剥がす。

「てつめ…触るんじゃねえ！ ぶっ飛ばすぞ！」

「お前、無理してそんな言葉使ってんなよ。実際、そういう性格じ



「やねえんだろ」

「はあ？ 意味分かんねえし」

「ま、何でも良いけどな。ほれ、風呂行こうぜ。洗ってやるよ」

「……ちっ」

腹は立つが、このまま騒いでもこの男は離さないだろう。

仕方なく、風呂場へ向かった。

\*\*\*

風呂場で楽しそうにルカは少年の髪と身体を洗っていた。

「ほーら、気持ちいいだろ？」

「……」

そっぽを向いたまま少年は無言だ。

「なあ、いい加減名前くらい教えろよ」

「……」

反応なし。

「じゃ、年は？」

「……」

同じく反応なし。

「シャンプー気持ちよくて、悦に入ってるのか？」

「入ってねえよ！」

少年は突然立ち上がり、叫んだ。

「……ッ」

目が染みる。

シャンプーが目に入ってしまったようだ。

「おら、流すから大人しくしろ」

シャワーを浴びせると汚れが取れて、綺麗になる。

しかし、その翡翠色の瞳はルカを睨んだままだった。

「……すっかり飼い主気分かよ」

「だから違うつつってんだらうが。ほら、次は飯だ。飯！」

脱衣所に連れて行って、タオルと洋服を少年に渡してキッチンへと向かう。

少年は、舌打ちをして身体を拭いて用意された服を着た。ワイシャツが大きくて袖を捲くる。

ズボンは丈が長いが、ウエストはゴムが入っているので何とか履くことが出来た。

次第に良い匂いがした。

優しくて温かい匂い。

「何してんだよ、俺」

深い溜息を吐いて少年は頭を掻いた。

食卓にパンとシチュー、サラダが並べられる。

「ま、かなりやつつけただけど食べよ。腹減ってんだろ」

「いない……。帰る」

少年がそう言った途端、腹の虫が鳴った。

悔しそうに少年は、顔を赤くする。

タイミングが良すぎたその音に、ルカは噴出して笑った。

「おら、意地張ってねえで食べ！ 冷めるぞ」

「……………」

空腹には勝てないらしく、少年は椅子に座って食事を眺めた。

こんな食事を見るのは何年ぶりなのだろうか。

思わず涎よたれが出そうだった

しかし、そこで少年は我に返った。

「ち、違う！ 俺みたいな奴は、生きていく為に仕方なく食べるん

だ！ 勘違いするな」

「へいへい。いいからさっさと食べ」

言い訳をする少年をあしらって、ルカは食べ始める。

怪訝そうに顔を顰めるも、少年も食事に手をつけた。

\*\*\*

食事が済むと、ルカは少年に帽子を被せた。

少しぶかぶかで顔が隠れてしまう。

「よっしゃ、行くぞ」

「は…?」

何処に?

何て慌しい奴なんだと少年は、ルカを見上げて睨む。

「お前の服とか日用品買いにだよ」

「…俺、金無いの知ってるよな?」

「だからツケとくんだよ」

「は…? ツケ?」

「おう。明日から働け」

「なっ…!」

さも当然の如く笑って言うてのけるルカに、少年は固まった。

開いた口が塞がらなかった。

「ふっざけんじゃねえ!」

我に返った少年の怒鳴り声と共にルカを思い切り殴る音が家に響いた。

\*\*\*

その後、町へ出た少年とルカはあちこちの店を回った。

ルカは楽しそうに少年に似合いそうな服を選んだり、使用用途が高い日用品を真剣に見定めたり、笑顔が絶えなかった。

それと比べて、少年は顰めっ面のままだ。

だけど、ルカは他の奴らとは違う…。そんな感じがした。

しかし、その気持ちを振り払うべく、少年は首を横に振った。

(何、気許してんだよ。あんなの、偽善だ。別に俺を見てるわけじゃない。可哀相なら誰でもいいんだ)

胸でぎゅと拳を握り、店員と話しているルカの目を盗んで走り出した。

「あつ！ コラ！」

気付いたルカは少年を追いかけた。

しかし、足は少年の方が速かった。

「無駄にぬくぬくと育った奴に俺が負けるわけな…ッ！」

走りながら振り返ると、必死の形相で周囲に砂煙を浴びせるかの如くルカが走ってくる。

先程と違い、そのスピードは少年の足の速さの三倍ほどあった。

「え、嘘だろっ」

「ホントだよ！」

息を切らせたルカが少年の前に現れた。

「絶対に逃がさねえ…！」

「い、意味わかんねえ。飼いやつに慣らしたいなら、俺じゃなくてもいいだろっ」

「ばっか野郎！ お前じゃなきや駄目なんだよ！」

ルカが少年の肩を掴んで叫んだ。

「俺が何の為に前にお前に付き纏ってると思ってんだ、あア？ 俺は、

お前がいいんだよ！ お前と友達に…いや、家族になりたいんだよ！」

家族？

馬鹿かコイツは。

何で俺なんかを選ぶ。

俺なんか、生きるのもどうでもよくてゴミ漁りをしてるどうしようもない屑なのに。

そもそも、他人が家族になれるわけがない。

「馬鹿馬鹿しい…」

「あア？」

「簡単に…家族になりてえなんて心にもないこと言うな！ 迷惑なんだよ！」

家族を失った少年にとって、簡単に家族になりたいと言うルカが許せなかった。

「違つっ！」

ル力は、少年の肩を掴んだまま叫んだ。

「お前は、本当は助けを求めてた。だけど、我慢して堪えて本当は爆発しそうで泣きたいのに抑えてる。素直になれ！」

「んなもん、てめえの勝手な妄想だ！俺は誰も頼らない！誰も信じないっ！」

「うるせえ！無理矢理、自分に言い聞かせてんじゃねえ！誰よりも人の温もりに触れたかつたんじゃねえのかよ、お前は！」

「だ、誰が……」

「俺を見ろっ」

少年は目を逸らす、ル力がそれを許さなかった。

「お前は頑張りすぎた。長い間、よく頑張った。でもな…助けを求めるのは弱さじゃねえ！逃げるな」

助けを求めるのは弱さじゃない。

じゃあ、何か？強いつて言うのかよ。

本当にそうなのか？

そんなわけない。一人で自立して誰も頼らない。誰も信じない。

…違つ。

俺は、怖いから逃げていたんだ。

存在を否定されるのが怖くて臆病になってひたすら逃げてて…気付いたらこうなっていた。

こんな奴の言うことなんか偽善だ。反吐が出る。

あの地獄を経験してないから、そう言えるんだ。

ゴミのように存在を否定されて罵倒されて殴られて、表の奴らやスラムに住む荒んだ奴らに抵抗するのだって相手が飽きれば終わるから耐えた。

だから、それなりの屑になれた。

誰も信じない。

誰も信じられない。

誰も助けちゃくれない。

人間扱いなんかしてくれない。

それなのに…。

「くっ…！」

それなのに、どうして…。

どうして涙が出るのだろうか。

「泣きたい時は泣け。怒る時は怒れ。楽しかったり嬉しかったら笑え。それって、当たり前だけどよ…気持ちいいもんなんだぜ？」

何を綺麗事を。

ふざけんな。うざりたい。消えてしまえ。

そう言いたかった。

「…っ」

言えなかった。

喉につつかえてそれが言えない。

「もう、楽になっていいんだ。本当のお前らしく生きればいい。そうすりゃ、こっから変わっていけないだよ。俺がいつでも近くにいるやる。だから心配すんな」

俺を見てくれる。

この男は、どうして…。

どうして、俺が欲しい言葉をくれるのだろうか。

ルカが少年の頭の上に手を置く。

そして優しく笑ってくれた。

視界が歪む。

きつと今の自分の顔は酷い。

情けなくて弱々しくて小さな子供がぐずっているような、そんな顔に違いない。

「うっ…うっ…ひっく…」

嗚咽が零れた。

涙が出たのなんていつ以来だろうか。

とっくに枯れていたと思っていた。

表でみんなと同じように生きていいのか？

こんな臭くて薄汚れた屑の俺が、みんなと一緒にいられるのか？  
一緒にいて…いいのか？

言葉が出ない。

この感情は何だ。

嬉しい…。

嬉しいのか、俺は。

辛くて悲しい涙じゃなくて、安心出来て嬉しいのか？

そんなことを考える少年をルカが優しく抱きしめた。

「ほれ、これで誰にも見えねえ。我慢すんな」

ルカの優しい言葉。

ルカの腕の中に顔を埋めて、彼のシャツを思い切り握った。

「うっ…う…う…ひっ…うああああっ！」

大声で今までの全てを爆発させるように泣いた。

誰もが振り返ったが、ルカは気にすることもなく何も言わずに少年を抱きしめていた。

少年が全てを吐き出し終わるまで、ずっとずっと…。

\*\*\*

泣くだけ泣いて、少年は公園のベンチに座っていた。

少年の目は、泣きすぎて目が真っ赤になっている。

「……………」

何だろう。

今まで心の中に押し掛かっていた大きな大きな腫れ物が、すっと消えていくようだった。

ぼつと呆けてると、額に冷たいものが当たる。

顔を上げるとルカが、笑ってジューズを差し出していた。

太陽みたいな男だと思った。

暗闇の泥沼の中にいた自分を照らし続けてやっと外に出してくれた。

自然と顔が綻んだ。

「お、いいねー。その顔」

「…は？」

指をパチンと鳴らしやたらテンションが高いルカに、少年は怪訝な顔をした。

でも、今はそこまで嫌じゃない。

「ま、すつきりしただろ？」

「……うん」

素直に返事が出来た。

ジュースを受け取ると、ルカが隣に座る。

暫くの沈黙。

下を向いていた少年が小さく口を開いた。

「……シスカ」

「あ？」

少年は顔を上げた。

「シスカ〓ブルーネル。…俺の名前」

漸く名前を覚えてくれたシスカにルカは目を輝かせて嬉しそうな顔をした。

「シスカ！ シスカか！ おう、わかった。俺は…」

「ルカだろ。聞いたよ」

呆れたような表情でシスカは溜息を吐く。

しかし、すぐに小さい笑みを浮かべた。

あたたかい。

こんな気持ちはまだ残っていたんだ。

「そんじゃ、これ飲んだらバイト先に行くぞ」

「…本当に働かせるのかよ」

「あつたりまえだろ。働かざるもの食うべからず。特に下町の俺達はな」

社会に出れる。

大丈夫だろうか。



ルカ以外の人間は、きつと自分をゴミ扱にする。  
気を許しちやいけない。

そんなことを考えて顔を強張らせるシスカに、ルカはデコピンを  
した。

「いてっ」

「余計なこと考えんな。俺達や、お前を蔑む余裕なんてねえんだよ。  
行くぞ」

「う、うん……」

ルカがシスカの腕を引っ張る。

何故かルカの言葉だけは信じられた。

味方が一人いるだけで、こんなに気持ちが和らぐ。  
不思議だった。

\*\*\*

「んで、そいつが例のガキか？」

啜え煙草の派手なシャツにスキンヘッドの男。

それが雇い主のロイドだ。

ロイドは麦茶をシスカに差し出して座らせた。

「おう、シスカだ！」

歯を見せて嬉しそうに笑うルカに対して、ロイドは溜息を吐いて  
ルカの肩に手を回した。

シスカに聞こえないように距離を置いて、小声で話す。

「馬鹿野郎、お前マジでガキじゃねえか。うちは託児所じゃねえん  
だぞ」

「大丈夫だって。俺の目には間違いねえ。頼むぜ、旦那」

期待していた分、気落ちしたロイドは頭を掻いてシスカに向き合  
った。

「おい、小僧。お前、力は？」

「は？」

「うちは配達業だ。力がねえ奴は使えねえ。だから聞いてんだ」

「…あるって言って信じんのかよ」

「いや、どんくらい力があるか見せてもらおう。来い」

「ちよっ…触んな！」

有無を言わず軽々とシスカを引っ張り、ロイドは倉庫へと連れて行った。

中に入ると、やたら重そうな荷物が並べられていた。

「このリストに従って箱に商品入れて整頓してラベル貼れ。因みに、かなり重いものもあるからな。それで見る」

「…上等だ。なめんなよ、ハゲジジイ」

シスカのその言葉にロイドは顔が引き攣り、倉庫に拳骨の音が響いた。

「いつてえ…！」

頭を抑えてシスカは蹲った。

しかし、すぐに立ち上がりリストを見て溜息を吐いた。

\*\*\*

ずんずんと大股開きで歩いてロイドは扉を閉めて、店内に入った。

「ルカ！ 何だ、あのクソ生意気なガキは！」

「落ち着けて。しゃあねえだろ、それなりに大変なんだから」

「…まったく、言葉遣いから教えねえと配達のためにはクレームの嵐だな。でも、ほんとに良いのか？ 犬や猫じゃねえんだぞ。こんなこととして、お前だってどんな目で見られるか」

「ああ？ 俺を誰だと思ってるんだよ。下町一の荒くれ者ルカ様だぜ？ 怖いもんなんてねえよ」

「嘘だろ」

「ああ、嘘。アンタの拳骨は怖え。…それと」

ルカは視線を裏口の扉に向けた。

「あいつの死にそうだった顔がな」

「…そうか」

フツと笑い、ロイドは新しい煙草に手をつける。

「で？ 何で、あのガキなんだ？」

「あ？ 一目惚れ」

「…お前、そつちの趣味か。確かに顔だけ見れば、可愛い顔してっけどよ。やるなら合意の上でやれよ？」

「ちっげーよ！ 何かな、放っておけなかつたんだよ。それが何なのかわかんねえ。だから多分、一目惚れ。あいつの笑顔が見てみたいて思つてよ」

「お前、よくそんなキモい台詞乱立出来るな」

「うっせーよ！ 本心なんだからしょうがねえだろうが！ 氣の利いた言葉なんか言えるか」

頭をがしがしと掻くルカにロイドは、おかしそうに笑った。

裏口の扉が開かれた。

「終わった」

短くシスカが言うと、ロイドもルカも驚いた顔をする。

あれから三十分も経っていないのにあれほどの荷物を？

いくら何でも早すぎる。

早いというより…速い。

中には五キロ以上もある荷物だつてあつた筈なのに。

ロイドはシスカを連れて倉庫へ向かう。

ルカもそれに続いてついていった。

倉庫の中は、綺麗にダンボールが整頓されていた。

いらぬゴミは一つの袋にまとめられ、倉庫の端に置かれる。

ダンボールに貼つてあるメモとラベルは完璧に一致していた。

ロイドの理想通りの完璧な仕事だった。

呆氣にとられてロイドの口から煙草が落ちる。

「…で、どうなんだよ」

怪訝な表情でシスカが尋ねると、ハッと目が覚める。  
完璧だ。

丁寧に速くて正確。

一番欲しかった人材だ。

「よくやった、坊主！」

「うわっ」

ロイドは笑いながら、シスカの頭を撫でた。

武骨な手でぐしゃぐしゃと撫でられているのに、腹は立たなかった。

前だったら間違いなく、怒りに触れているはずだったのに。

「明日から此処に下宿しろ。一部屋余ってるからそれをやる。バイクもくれてやらあ！」

「…は？」

きよとんとシスカは目を丸くした。

「認めてくれたってことだよ」

ルカが耳打ちして無邪気に笑った。

認めてくれた？

存在を肯定してくれた？

必要としてくれる？

何だろうか、この湧き上がる気持ちは。

…嬉しい。

そう、嬉しいんだ。

欠けていった心がパズルのピースみたいに一つずつ嵌まる。

自然と笑顔になれた。

やり直せる。

そう、最初からやり直せるんだ。

希望が湧いた。

## 第11話 生まれる絆

その日は、ルカの家泊まることになった。家族だとは言ってくれたものの、ルカの家には他にも同居人がいるらしく部屋数が足りない。

だから、明日からシスカはロイドの店で下宿することになった。でも、そんなことはどうでもいい。

家が違ってもルカとの絆は変わらないから。

ふかふかの布団で寝られるなんて贅沢だと思った。

何もかも嬉しくて、心の中がくすぐつたい。

「じゃ、寝るぞ。おやすみ」

「…うん。おやすみ」

目を伏せるとすぐに深い眠りに入れた。

朝が来るのは一瞬のことだと思えた。

昨日までは、夜が長く感じていた筈なのに…。

\*\*\*

朝日の眩しさで目が覚める。

起き上がり重い瞼を擦ると、良い匂いがした。

コンソメスープの匂い…。

いそいそと着替えて、キッチンへ向かった。

「おう、おはよ！ 待ってな、今出来るからよ」

鼻歌交じりで手際よくルカは料理する。

まな板の上で野菜を切るトントンという規則正しい音に何処か懐かしさを感じた。

「…何、すればいい？」

「あ？」

料理をしながら色んな音を聞いても、シスカの小さい声を聞き漏らすことは無い。

「働かないと食えないんだろ。その、えと…手伝う」

少し遠慮がちな声に目を丸くしていたルカだが、嬉しくて満面の笑顔を浮かべた。

「おうつ！ じゃあ食器出してくれ。三人分な！」

「…三人？」

「ルカー！ 腹減ったー」

シスカが不思議に感じてると後ろから眠たそうな男の声が聞こえた。

振り返ると、半分眠気眼の男がいる。年はルカと同じくらいだろう。

「ビート、てめえも働け！ シスカですら手伝ってのに今更起きてくんじゃねえよ」

「やーん、ルカ君のいけずう　朝起きたらだらだらしたいのー。だからご飯早くう」

「ぶっ飛ばすぞ！ 女と遊んで朝方に帰って来やがって！ あ、牛乳切れてる。買って来い」

「えー、朝寒いから…やだっ」

「…殺すぞ、マジで」

ルカに引つづくビートと呼ばれた男を見て、シスカは呆然とした。同居人がいるって言ってたっけ。

こいつが、そうなのか。

何故か表情が曇る。

それに気付いたビートは、シスカに視線を合わせて笑う。

「君がシスカ？ 俺、ビート。ビート＝コンダクト。ルカと部屋シェアしてんの。邪魔かもしれないけど、よろしくね」

ヘラヘラとビートが笑う。

しかし、シスカは視線を逸らした。

この男は何となく…そう、不愉快だ。生理的に受け付けない。

「ルカ…」

少し震える声でルカの名を呼んだ。聞き取れるか取れないかの小さな声だった。

「俺が、買い物行って…来る」

「え、シスカ。でも、お前」

「だ、大丈夫だから…っ」

あまりこの場所にいたくない。

ルカが自分の知らない顔をしているのを見ると…心の中がちくちくと地味に痛む。

「ああ、んじゃこれ金な。パン屋の隣に店あつから、そこで買ってきてくれ」

「…うん」

金を受け取って、シスカは家を出た。

ボタンと扉が閉められ、ぱたぱたと走り去る音がする。

「あー…まずった？」

「いや、しょうがねえよ。でも、外の人間と触れるのはまだきつそうだな。おい、ビート」

「はい、頼まりましたあー。結局外に出る運命なのね、俺は」  
ぽりぽりと頭を掻いてビートは家を出た。

心配そうにルカは、小さく溜息を吐いた。

「少しずつ…少しずつ頑張れよ。シスカ」

優しい声色で言った。

\*\*\*

「うう、さつぷ…！」

外に出たビートは身震いをする。

「あれ…？」

左右どちらを見てもシスカの姿は見当たらない。

「足、はっや…」  
しよっぱなから見失ってしまった。

\*\*\*

息を切らせてシスカは走った。  
別にいいじゃないか。ルカくらいの奴なら友達がいたって当たり前だ。

何で、俺だけ見てくれてるなんて勘違いをするんだ。  
とてつもなく自分が恥ずかしい。  
だから走ってその気持ちを振り払いたかった。

「はあ…はあ…はあ…」  
立ち止まって呼吸を整える。  
そして深呼吸をした。

「…牛乳、買って帰らなきゃ」  
とつくに店を通り過ぎてしまった。  
引き返そうと振り向いて足を前に出そうとした時だった。

「…ッ！」  
目の前には、昨日の昼までのシスカと同じ瞳をした少年達。  
スラムに住んでいる少年達だった。  
シスカの瞳が戦慄いた。

「よう、シスカ」  
リーダー格の少年、バジルにシスカは震えた。  
こいつは中々表に出ないはずなのに…仲間を率いて表に出るのは、  
本気で仕掛ける時だけだ。

力のある奴を厳選して連れ歩く…一番関わってはいけない存在だ。  
「ちよっと、ツラ貸してもらっぜ」

\*\*\*



「ああ、ルカと一緒にいたあの子？ いや、見てないよ」

行く筈の店や近隣の店に聞いても誰も見ていないという情報しか聞けなかった。

一体何処へ行ったのか。

一度帰ってもいいと思っただが、シスカがいなくなったと分かったらルカは暴れて何処に行くかも分からない。

それを止めるのは、結局ビートだ。

「もちつと探すか！。…お？」

道端に光る何かが見える。

距離があつて何なのか分からなかったから、近付いてそれを拾った。

「硬貨？ …もしかして、ルカから貰ったやつか」

そして周囲を見渡す。

「だから…何処にいんのよ、あの子」

\*\*\*

薄暗いスラム通り。

胸倉を掴まれ、シスカは壁に叩きつけられた。

「ッ、痛…！」

肩を強打してしまい、痛みに顔を歪める。

バジルは、シスカの髪を乱暴に引っ張った。

「光の世界のデビューおめでとぅ。…でもよ、こりゃ完璧な裏切りだぜ？」

「…別に、お前らの仲間になったつもりは…ッ、ぐっ！」

バジルの靴がシスカの腹に減り込む。

ぎりぎりとは迫られて痛い。

「そういうことじゃねえんだよ。俺達は、薄汚れた屑。一人であつち側行つてもどうせ屑扱いだ。そしたらいつかまたこっちに戻ってくる。今なら許してやる。戻れ」

「ッ、嫌だ！」

折角、認めてくれたのに。

友達…家族になれたのに。

離れたくない。

ルカと一緒にいたい。

「あ…：そう？ おい、お前ら容赦しないでいいぞ。何だったら、ぶつ殺しても構わねえ。コイツはもう俺達の敵だ」

バジルがニヤけて指示を出すと、少年達は歓声を上げてシスカを取り囲んだ。

今回ばかりは、まずい。

相手が飽きるまで殴られ続けるのとは違う。

そんなことをしたら、殺されてしまう。

しかも普通の奴らより桁違いに力もあって体も大きくて強い奴らを全員倒すなんて無理だ。

逃げないと…。

逃げなきゃ。

「は、離せっ！」

必死に抗うシスカだが、一人の力で敵うはずが無い。

重い拳で顔を殴られる。

「ぐっ…！」

「おっと。ほら、パース！」

反対側にいた少年が、シスカの腕を掴み、腹にストレートパンチを食らわせる。

「ッ、かはっ…！」

ローテーションで少年達に殴られ蹴られ、身体の感覚がおかしくなってきた。

本気だ。

全員、本気で楽しみながらシスカを殺そうとしている。

これ以上の地獄なんて無いから怖くない。

その思考が少年達を支配する。

立つ気力も無いシスカが傾くと、髪を掴んで何回も腹に蹴りを入れた後に落ちかけたシスカの背中をバジルの足が思い切り踏んだ。  
「あぐっ！」

「結局、お前は一人じゃ何も出来ない可哀相な奴だよ。抵抗しても何も出来やしない。救われぬ。あつち側に行かなかつたらこんな目に遭わなくて済んだのにな。俺達は人間になれない。俺もお前もな！」

「はっ…あ、ぐう…あ、うう…！」

呼吸が上手く出来ない。

どうやってするんだっけ？

ああ、そうか。

やっぱり、駄目なんだ。

俺なんか…俺なんか、あの場所で笑って生活なんて出来ない。

ひと時の…夢だったんだ。

ルカ…。

やっぱり、俺達は住む世界が違うんだよ。

\*\*\*

その酷い暴行現場をビートは影から見ていた。

助けに入りたいけど、自分では助けにならない。

助けないと…止めないと、シスカが殺される。

息を切らしてビートは走った。

この場を何とか出来るのは…シスカを助けられるのは、一人しかない。  
いない。

「ルカ！」

家の扉を強く開けてビートは叫んだ。

「おう、どうだった？ シスカ、ちゃんと上手く出来たか？」

「んなこと言ってる場合じゃねえ！ あいつ、殺されるぞ！」

血相を変えるビートの言葉にルカは硬直した。

殺される？

誰が？

「あいつ…スラムの奴らにボコられてて…いや、あれはそんなもんじゃない。早くしろよ！ 手遅れになってもいいのかよっ！」

その言葉に、ルカは厳しい表情を浮かべた。

怒りを押し殺すが抑え切れていない…そんな表情だ。

「何処だ…。アイツは…シスカは何処だっ！」

「裏通りの…廃屋の前だ」

それを聞くと、慌しくルカは家を飛び出した。

ビートは何も出来ない自分が悔しくて、ただ友人の背中を見送ることしか出来なかった。

\*\*\*

バジルは、殆ど動けなくなったシスカの頭に足を乗せて靴底でぐりぐりと踏み躪る。

「はっ…っ…」

言葉が殆ど出ない。

このまま放置していたら、シスカは死んでしまうだろう。

ズタボロにされて動けなくなって気力もなくなって…昨日の出来事が夢のように霞んでいく。

それでも、夢にしたくなかった。

あの男の優しさをぬくもりを…夢にしたくなかった。

ただ、もう全て手遅れだ。

せめて…忘れて欲しい。

この醜い…自分を忘れて欲しい。

自分を心配するルカに重荷を積ませたくない。

それを願う。

「なあ、シスカ。お前、自分の居場所何処にあると思っ？」

「ぶ、は…あ…い、ばしょ…？」

頭を鷲掴みにされて宙に浮かされる。

言葉を発する気力が無い。

息をするのも苦しい。

「何処にも無いよな？ 裏切ったこの場所も一瞬出れたあっちの世界も…お前は、何処にもいられない！」

「ッあ…！」

ガンツと掴まれた頭が無遠慮に壁に叩きつけられ、押しつけられる。

バジルの言葉を否定したかった。

きつと、ある。

自分がいられる場所を…希望を持ちたい。

「…お前、死んだ方が楽じゃね？」

「……………」

そうかもしれない。

死んでしまえば、こんな痛い思いも苦しい思いもしないで済む。だけど…死んでしまえば、あのあたたかさも嬉しさも喜びも感じなくなってしまう。

ルカに出会わなければ、忘れられたのに。

それでも、俺は…まだ信じたい。

あの男を。

例えば住む場所が違っても、優しく手を差し伸べてくれたあの男と一緒にいたい。

「シスカッ！」

ハツと目を開く。

幻聴？

ルカの声が聞こえる。

ルカがこんな所に来るわけ…。

昨日は、俺に会いに来ただけで…今、此処に俺がいるなんて分か

りつこないのに…。

「ル…力…？」

本当にいた。

ルカが…助けに来てくれた。

これが幻覚だとしても嬉しかった。

最後にルカを見て嬉しかった。

意識が霞んでいく。

「あ？ 何だお前…」

バジルがルカを睨む。

息を切らしたルカは、バジルが掴んだシスカを見て顔を熱くする。

「てめえらあ！ シスカに何しやがる！ 今すぐそいつを離しやがれ！」

今にもバジル達に掴みかかりそうな…怒りのあまり興奮したルカを見て、バジルは鼻で笑った。

「ああ、これか。いいぜ、返してやるよ。…そらっ！」

バジルは、まるで人形でも捨てるようにシスカを地面に叩き付けて蹴り飛ばした。

「シスカ！ てつめえ…！」

動けないシスカに駆け寄りルカは抱きしめ、バジルを睨んだ。

「そんな死にかけの屑で良かったらいつでもくれてやるよ。精々、飼いやらすんだな。つか、そのままだと死ぬんじゃないかね？」

楽しそうにバジルが言うと、他の少年達は声を上げて笑う。

下卑た笑い声を上げたまま、バジル達は何をするわけでもなく去っていった。

今にも殴り飛ばしたい気持ちはあったが、今はシスカが優先だ。

「シスカ！ 目を開ける、シスカ！」

ぐったりとして目を開かないシスカをルカは呼び続ける。

いくら叫んでも起きないシスカの冷たい手を、ルカは握り締めていた。

「シスカアアアア！」  
裏通りにルカの叫び声が響き渡った。

\*\*\*

目が覚めると、古臭い天井が見えた。

助かったのか…？

生きている。

今、生きている。

ほっとしたが、あの時を思うと怖くてたまらない。

死にたくないという気持ちが生まれて、恐怖というものを感じた。

身体が震えそうだった。

「ぐあっ！」

身体を起こすと全身に痛みが走る。

痛くて痛くて涙が出る。

痛みや苦しみを感じることを想定すると寒気がした。

こんなに自分は弱くて臆病なのかと考えさせられる。

ふと寝息が聞こえる。

「…ルカ？」

傍らでルカが寝ていた。

疲れきっていて、目が腫れてクマが出来ている。

「ずっと、お前の看病をしてたんだよ。ルカは」

顔を上げると、水を持ったビートがいた。

そのコップいっぱいの水をシスカに渡す。

「酷かったぜ。泣きながら、お前が死んだらどうしようって…三日間、寝ないでお前を看病してた。こいつとは、長い付き合いだけど、あんなルカを見たのは初めてだったな」

「ルカが…俺を？ こんなになるまで…？」

信じられないわけじゃない。

ルカは、心からシスカを大事にしてきた。

「ただ、こんなになるまで…此処まで自分を大切に思っていたとは思わなかった。」

シスカは、コップの水面に映る自分とルカを交互に見た。

「それだけ、お前はこいつに必要されてるってことさ。じゃ、俺は行くよ」

手をひらりと振ってビートは背中を向ける。

「何処に…？」

「六番目の彼女のトコ。帰るのは明日の朝」

「にんまり笑って、ビートは家を出た。」

「……………」

コップを置いて、シスカはルカの燃えるような赤い髪を触った。

「絶対、お前馬鹿だろ。あんなところに飛び込んで…後先考えないで

…」

ぼつりぼつりと呟く。

薄っすらとルカは目を開いた。

そしてぼんやりと視界に入ったのは、シスカの姿。

大きく目を見開き、シスカの肩を掴む。

「シスカ！ お前、大丈夫か？」

「いった…！ ルカ、痛いっ！」

全身怪我をしているシスカは、意識はあってもまだ重傷だ。

嬉しさのあまりルカはそれを忘れてしまう。

「あ、わり。…でも、良かった。ほんと良かった。お前、全然動かないし…身体冷たいし…死んだんじゃないかと思っ、気イ狂いそうだった」

「…心配かけてごめん」

シスカが俯く。

すっかり毒の抜けたような情けない表情だ。

「んなしょんぼりするな！ やっぱ、お前無理してたんだな」

「…うん、かなり」

素直だった。



あの場所において、自分も自然にそんな風になってしまっていた。だから、そんな自分は封印してしまおう。

本当の自分：此処で生きていける自分になる為に。

地獄を見る前の、太陽の下で過ごしてきたあの頃のように…。

「あ、ルカ。ロイドさんは…」

「あ？ ああ、仕事か。怪我治ってからでいいって…」

「そんなの駄目だよ。俺、やっと認めてもらったのに…迷惑かけて」  
表情が暗くなるシスカに、ルカはデコピンをした。

「いつて！」

赤くなる額を押さえた。

これ以上、怪我が増えたら困る。

「無駄に頑張りすぎなんだよ、お前は！ ちったあ肩の力抜け」

「でも…」

「そんな身体じゃ仕事なんねえだろ。あの親父には事情説明してあるし、向こうも納得してるから大丈夫だ」

「…いや、治す。今日中に治す。誰がなんと言おうと。それがルカでもね。止めても無駄」

「おー…すげえ根性」

呆気にとられて驚いた顔をするルカにシスカは笑った。

「…俺、此処からまた始めてみるよ。もう大丈夫。なんか、周り怖いけど…今考えると凄く怖いんだけど…何とかやってみるよ」

シスカの笑顔にルカもつられて笑顔になった。

毒が抜けたせいで何処となく頼りない。

だけど、それが本当の彼だ。

それだったら、自分は彼の居場所を守り続けよう。

迷惑だって嫌な顔されても。

だって、それが家族ってもんだろ？

## 第12話 ともだち

ルカの口から聞いた衝撃の過去に、ユリアもアニーも…クラス全体が沈黙した。

「…臆病で情けない馬鹿だと思ってたけど、まさかそんな過去があったなんてね」

「でも、やっぱり…立ち直ってくれたんですね。シスカさんとルカさんは、ただの友達とっていましたけど…立派な家族なんですね」

ユリアとアニーの言葉にルカは頷いた。

「ルーディメンツよりも何よりアイツの敵は…本当の敵は人間なんだよ。だから、アイツをイカれさせてしまふ要素があったら俺は全力で潰す」

その言葉に、クラスの一部の人間がルカ達に近付いた。

「その話、本当なのよね？」

中流家庭の女子生徒だった。

「つたりめーだろ！ こんな話が俺の脳味噌で作れるとも思ってるのか！」

敵視したようにルカが叫ぶ。

「ごめん。スラム育ちってだけで偏見持って軽蔑してた。でも、同情するわけじゃないよ。ただ、頑張っていたあの子に対する自分の態度が恥ずかしいだけ」

「貴族の奴らに煽られ過ぎってことだよな。今思うと腹立つぜ」

「そうね。皆でシスカ君を探しましょう。謝らなきゃ」

口々に他の生徒達が言うとルカ達は呆然とした。

勿論、それを快く思わない一部の生徒もいた。

だけど、皆のシスカに対する見方が変わってきた。

それが嬉しい。

しかし、そんな安心感を持つのも束の間だった。

バタバタと廊下を走り、一人の男子生徒が教室の扉を開いた。

「おいっ！ 誰か先生呼んでくれ！」

「きゅー！」

血相を変えた男子生徒の後ろには、スフォルがいてルカ達に飛び掛った。

スフォルが必死に飛んできたということは、シスカ絡みだということが分かる。

「何かあったのか？」

恐る恐るルカが尋ねる。

「裏庭で…やべえことになってんだよ！ あのままじゃ、死人が出るぞー！」

その言葉に、ルカは青褪めて慌ただしく教室を出た。

「ちよつとルカ！ アニーミ、あたし達も行きましょ！」

「うんっ」

「きゅー！」

ユリアとアニーミもスフォルもそれに続いた。

\*\*\*

裏庭では、シスカの周囲に男子生徒達が倒れ一人の男子生徒がシスカに胸倉を掴まれていた。

「ひっ…！ た、助け…」

「そうやって俺が助けを求めても…お前らは笑って踏み躪るんだろ？」

哀願する男子生徒にシスカは冷たい目で静かに話す。

普段の情けなくて頼りないシスカの面影は、そこには無かった。

「こ、こんなことして…お前どうなるか…わ、分かってんのか？」

男子生徒は恐怖で声が裏返りながら、脅しにならない脅しを吹っかけた。

「…どうなるか？」

シスカは鼻で笑う。

「やってみるよ」

「がっ…！」

シスカは男子生徒の首を絞めた。

その力は、徐々に強くなっていく。

このまま力を入れ続けていたら首の骨が折れてしまいそうだ。

「シスカ！」

ルカの怒鳴り声が聞こえる。

振り向いたシスカの瞳は怒りに満ちていた。

その瞳にルカは一瞬背筋が凍ったが、ずかずかと歩いてシスカの顔を思い切り殴った。

シスカの男子生徒を拘束していた手が離れ、そして倒れこんだ。そして、ルカはシスカの胸倉を掴んで起き上がらせた。

「落ち着け！ 何も壊れてねえし傷ついてねえから大丈夫だ！ 目え覚ませ！」

ルカがシスカの胸倉を掴んで叫ぶと、シスカの瞳が徐々に光を取り戻した。

「……ルカ？」  
顔が痛い。

あいつらに殴られたものよりもずっと重い。

ハッと周囲を見てシスカは青褪めた。

「ま、まさか…また、俺…」

「おう。久々にぶち切れやがったな」

ルカの言葉にシスカが口をパクパクとさせた。  
涙目になる。

「ど、どどどどどうしよう！ 俺、やばいって。しかも貴族に手出しちゃったよ！ こ、これ…」

「いいから落ち着け。…この馬鹿野郎。見事に暴れやがって…」  
安心したようにルカは溜息を吐いた。  
いつものシスカに戻ってくれた。

いつタガが外れて暴れるか…最近は無かったからもう出ないと思  
っていた。

自分の何か大切なものを脅かされるとキレてしまう。

あの時の…家族との思い出を踏み躪られた時のように。

人格が変わるほどに暴走してしまう。

「やっぱ、ドブネズミは最終的にこうだもんな…。てめえ、ただで  
済むと思うなよ」

呼吸を取り戻した男子生徒がシスカを蔑むような目で見て逃げよ  
うとした時だった。

バリケードの如くユリアやアニーミ達が行く手を阻んだ。

「あんた達こそ…ただで済むと思ってるの？ これ、集団リンチの  
上に自分の家に泥塗ってんじゃないの？」

「いくら圧力をかけても、無駄ですから」

ユリアやアニーミ達クラスメイトの眼光に男子生徒は、息を飲ん  
だ。

「な、何でお前らまで…」

ユリアやアニーミはともかく、何故クラスメイトまで。  
状況が分からなかった。

「別に俺ら、お前らの仲間でもねえし」

「シスカ君に酷いことしたら許さないから」

クラスメイトの態度が一変したのは、男子生徒だけではなかった。  
シスカもまた驚いていた。

明らかに昼間の時と態度が違う。

「…ルカ、何か余計なこと言った？」

「お、おう…。ちよつと昔話を…」

その言葉にシスカはルカを殴り飛ばした。

「馬鹿ルカ！ 何でそう口軽いんだよつ。めちゃくちや恥ずかしい

じゃないか！」

「しょうがねえだろ！ そのお陰で良い方向行っただから良いだろ！」

「結果的にだろ。もー…ホント勘弁してよ」

深い溜息を吐いてシスカは項垂れた。

その様子にユリア達は笑った。

「ちっ…何なんだよ」

男子生徒は悔しそうに顔を歪め、逃げて行った。

「さつてとー…帰ろっぜ」

「いや、待つてよ。この惨状…どうすれば…だって、俺」

しどろもどろに言葉を紡ぎ怯えるシスカの頭をユリアが平手打ちで叩いた。

「いった！」

「つたく、さつさと帰ってやんなきゃいけないことがあるでしょ。

引越しないといけないんだから、こんなのに構ってらんないからね。行くわよ」

「ちょ…ユリア！ く、首が…！」

シスカの首根っこを掴んで引き摺るユリアを見て、アニメミは小さく膨れた。

（私がシスカさん連れて行きたかったのに）

少し恨めしそうにアニメミは、ユリアを見ながらルカと共に歩いていった。

\*\*\*

学園から連絡が入りシスカは三日間の停学処分を受けた。

「転入初日に暴力事件起こしたっつーから、ルカだと思いきや…シスカ、お前何してんだ？」

「え、えつと…ちよつとハイになっちゃって…」

ロツクに正座させられ、シスカは口籠る。

「大人しい奴がキレると怖いって言うけど…お前は特にそのタイプっぽいな」

「い、いや…えっと…ごめんなさい」

床に頭を擦り付けて涙目になりながらシスカは謝罪する。

「ま、やっちまったもんはしょうがねえ。でも三日で済んで良かったな」

「即退学になるかと思ってましたけど。このままじゃ終わらないと思っただけだから…」

「あなた、感謝しなさいよ！」

ロツクとシスカが首を傾げると背後からユリアの声が聞こえた。

何故か仁王立ちである。

「ユリア…一体、どういう…」

「モティーフの配達店に行きなさい！」

「へっ？」

そこは、前にシスカがアルバイトをしていた場所だ。

「そこであんたを待ってるわ。行って挨拶してきなさい！」  
待っている？

どういうことだろうか。

「行って来い、シスカ」

「え…？」

ロツクが、シスカの背中を押した。

誰かが自分を待っていてくれる。

ユリアが呼んできたということは、悪い影響を与える奴じゃない。

シスカは頷いて、バイクを走らせた。

\*\*\*

モティーフに辿り着いて、配達店の前で止まる。

エンジンを止めて鍵を引き抜き、店の扉を開いた。

「あ………」

視界に入った人物は、シスカも見知った顔だった。

「よう、シスカ。久しぶり」

手を振ったのはビートだった。

すぐに怪訝な表情になり、シスカは店の扉を閉めた。

「待て待て待て！　いくらなんでも冷たすぎるわ！」

「だって、俺お前嫌い。視界に入ってくるなよっ」

ビートが扉を開き、それをシスカが懸命に閉めようとする。

「ひ、酷い！　一緒に寢床を共にした仲じゃないっ」

「…気持ち悪いからやめろよ」

あまりにも刺々しい言い方にビートは溜息を吐いた。

「二年経つても、俺には懐いてくれないのね」

「ていうか…何でビートがいるの？　正直、邪魔なんだけど」

あまりのシスカの毒舌ぶりにビートはカウンターに伏して涙を浮かべた。

そんなビートを無視して、店の中に入るとロイドともう一人、そこにいた。

「よう、シスカ。元気そうだな」

「おー、シスカ。おっひさー」

煙草を啜えるロイドと手を振る少女…制服からすると同じ学校だ。その姿にシスカの顔が明るくなる。

「ニムさん！」

「あっははは。相変わらず元気そうだね。ビートに浴びせる毒舌っぷりも超サイコー」

その少女は、この配達店を一週間で辞めたニムだった。

「そんでごめんね。あたしが辞めたばかりに変な事態なっちゃって」

「いえ、そんなこと…」

「この馬鹿女。今更また雇えってんじゃねえだろうな？」

「まっさかー。楽しそうだと思ってやってみたら、疲れるし小遣いにもならない給料だしマジ勘弁」



あつはははと笑うニムにロイドの機嫌が悪くなる。

「ろ、ロイドさん。落ち着いて…。でも、ニムさん…何で？」

「んー？ どうかの誰かさんが学校で超楽しいことしたから、色々揉み消したお礼を貰おうと思って」

「へっ？」

揉み消した？

あ、そういえばニムさんって一流貴族のお嬢様だったっけ。

見てくれは完璧に下町のノリに似ているから忘れがちだけど。学園の制服着てるって事は…つまり、そういうことであって。

「ま、まさか」

「うん。貴族の風上にも置けない恥知らずな馬鹿共にお仕置きしちやった。てか、あたしシスカの超味方だしこんくらい朝飯前よ」

「は、はは…」

停学が三日で済んだのは、つまりこういうことらしい。

親の力だけじゃなく、いくつもの企業の代表取締役を務める彼女には貴族の殆どが逆らえない。

「でも水臭いなあ、シスカ。学園来るなら教えてよー。分かってたら、昨日サボンなかつたのにさー」

「う、ごめん。いきなり決まったことだから…」

シスカの肩に腕を回しながら、ニムは笑った。

「ま、どんまい。あー、これから学校楽しくなりそ！ というわけでお礼して」

「お、お礼って…何すれば」

少し嫌な予感がした。

「可愛くて高性能の錬機手帳三十種類作って。そのための三日間だから。あ、安心して。素材はこつちで用意するから」

シスカの思考が停止した。

基本万能用途のある錬機手帳…。

アルバムに音楽プレイヤーに位置情報システム…挙げたらキリがないその機械を三十種類。

この三日間、睡眠を取ることが許されないうつ…。

いくらなんでも酷い依頼だった。

「友達だもん。断れないよね？」

ニムの笑顔が凶悪な悪魔の笑みに見えた。

## 第13話 関係

三日後。

今日も変わることなく、学園内は生徒達の澁刺はじりとした声がざわめいている。

「あ、そういえば今日だっけ。シスカ君来るのって」

「うんうん。錬機術の宿題教えてもらおうと」

「アンタねえ…シスカ君に教えて貰うために宿題やってないわけ？  
呆れるわ」

そんな一部の女子生徒が話をしていると教室の扉が開かれる。

「あつ、おは…よ？」

最初は明るい表情で振り向くが、次にはぎよつとした顔をしてその人物を見た。

彼女達が待ち望んでいた人物：シスカだった。

しかし、彼の周囲には禍々しい黒いオーラが渦まいており顔が青褪めていた。

「あーっ！ 来た！」

ニムが軽いステップを踏んでシスカに駆け寄る。

「で、例のものは？」

「……これ」

ラッピングされた女子が好むような袋をニムに渡す。

「基本の情報ツールに三十種類違うデザイン：モニターは最新のハンマリングフィルタを使った十トンまでだったら傷一つつかない仕様：位置情報ナビはニムさんの大好きなキャラクターがご案内。それと」

「うんうん、いいわー。いいわね！ しかもラッピングとかケースとか頼んでないの作ってくれるなんて流石だわ」

「いや…あの…此処までやらないと、言われたことしか出来ないのかとニムさんに殺されるから…。お陰でこの三日、仮眠すら取れなかったよ…」

口に出していないが、その他にブレスのシミュレーションテストや調整もプラスされてシスカは今すぐにでも倒れそうだった。

「いやー、ホント助かるわ。お礼のおつりが出ちゃうわね」

機嫌良さそうにニムは、にっこりと笑った。

そのやり取りの中、ルカとユリアとアニーミが雑談を交えながら教室に入ろうとした時だった。

「ありがと、シスカ。愛してる」

ニムがシスカの首に手を回してキスをした。

マウストウマウスのキス。

柔らかい唇の感触にシスカの顔が紅潮した。

目が覚めるには、十分な衝撃だった。

それに呆然としたクラスメイトとルカとユリアだったが、アニーミは凶悪な珍獣でも見たかのような驚愕の表情を浮かべ身の毛が逆立った。

「それじゃ、また今度何かあったらよろしくね。良い出来の分だけ、良いこととしてあげるから」

特に気にした様子もなくニムは笑いながら上機嫌で席に戻り、錬機手帳を弄り始めた。

放心したシスカは、胸の高鳴りが止まらなくて顔を真っ赤にさせたまま卒倒した。

「シスカさんっ」

誰よりも早くアニーミがシスカを支えた。

この三日間、シスカが殆ど部屋に閉じ籠っていたのも無茶難題を吹っかけたニムだということが今分かった。

アニーミは、眉間に皺を寄せた。

(いくらあの事件を救ってくれたからって…キスすることないじゃない)

アニーミは膨れた。

(はっ！ も、もしかして…この二人って既にそういう関係？ そんなまさかっ！)

身分違いの恋愛？

超一流貴族のニムと下町に住んでいたシスカ。

二人が知り合いだとは聞いていたが、そんなまさか。

(い、い…いやあああああ)

アニーミの表情が絶望したようなものに変わる。

「あ、アニーミ？」

恐る恐るユリアがアニーミに声をかける。

「ち、違うから！ そんなの絶対嘘だからっ！」

普段大人しいアニーミが叫ぶとその場の全員がビクツと身体を震わせた。

錬機手帳に夢中のニムと放心しているシスカを除いて。

「…アニーミ？」

双子の片割れに何があったのかと、ユリアは心配でならなかった。

「一体、何なんだ？」

流石のルカもアニーミの様子にただ驚くだけであった。

\*\*\*

その日の授業は、シスカにとっての睡眠時間だった。

その様子を隣で見ていたアニーミは、ぼうつとしていた。

(…何か無防備でいるシスカさんって、可愛いなあ)

授業は殆ど耳に入っていなかった。

「では、次…。アニーミ＝アナリーゼ」

教諭がアニーミを指名する。

(シスカさんは、ニムさんのことどう思ってるんだろ。これ…積極的にアプローチしないと駄目かなあ)

「アニーミ！ アニーミ＝アナリーゼ！」

教諭がアニーミの名を呼ぶ。

今度は怒鳴るような大きい声だ。

「は、はい！」

アニーミは現実には引き戻され、大声を上げて立ち上がった。

教諭は咳払いを一つした。

「これは、将来的に一般汎用として使用されるシンフォエニッタです。しかし、今は政府関連のみのトリアルとして使用されています。さて、このシンフォエニッタは、何に使用される錬機動システムでしょうか」

「え、えつと…それは…その…」

難題だった。

錬機術に詳しくない上に授業を聞いていなかったアニーミの頭は混乱していた。

加えて今日は、予習ノートを持ってきていない。

最悪だ。

「…いかにシステムを有効に使うための高性能CPU」

シスカの声が聞こえた。

寝言なのか、授業を聞いているのか分からない。

「基本メモリは三十テラから三ペタまで。しかし、巨大システム専用のものなので現在研究中。一般汎用されるのは、一番小さいシステムのみと想定されている」

きつとそれが答えなのだろう。

もごもごと小さく解を唱えるシスカの寝言をアニーミは復唱した。

「よく予習してきているようですね。素晴らしい。着席しても良いですよ」

「は、はい」

ほつと息をついてアニーミは着席した。

そして寝息を立てているシスカを見て、嬉しそうに笑った。

「うっわー…寝ながら授業受けてるとか器用ね」

ユリアが呆れたような溜息を吐いた。

ユリアの隣に座るルカは机に伏して爆睡していた。

\*\*\*

「シスカさん！」

放課後、帰ろうとしたシスカにアニーミが声をかけた。

「ん？ どうしたの？」

「あの、ちよっと付き合っただけで欲しいところあるんですけど」

「え、いいよ。じゃあ、ルカ達も誘って……」

「い、いえ！ ちよっと時計が欲しくて。私、朝苦手なので時計を買おうと思って……でも、どういうのがいいか分からなくて。システムに詳しいシスカさんにアドバイスを貰えたらって」

ただの口実である。

錬機術関連の誘いならシスカは断らない。

それを確信しての誘いだった。

「そっか。それだったらルカ達は退屈かも……。でもいいの？ 俺、結構そっち方面だと……その」

「詳しい人に聞くのが一番ですからっ」

「逃すものかとアニーミは必死に誘う。」

「あー……うん、わかった」

了承するシスカを見てアニーミの表情が明るくなる。

「それじゃ、行きましょう」

「……？ うん」

何故此处までアニーミが嬉しそうなのか、シスカには意味不明だった。

\*\*\*

街に出ると、アニーミがリードしてシスカを連れ回した。  
ファンシーショップにデパート。

そして鍊機動シヨップ。

機械製品が置いてあつて何がなんだか分からなかった。

「あ、これ可愛い」

小さなオルゴール付きの時計が目に入った。

それを手にとって、シスカは首を傾げた。

「あの…すみません」

少し遠慮がちにシスカは店員を呼んだ。

「はい？」

「あの、これオプションつけられますか？」

「ええ、つけられますよ。どのようなオプションを？」

につこりと笑う店員に、シスカは一つ咳払いをした。

「表面のガラス部分のフィルタをハンマリングフィルタのS型でお願いします。それから内部のオルゴールですが、チターの値を三つほど上げて下さい。それから消耗を防ぐためにアゴーギグをランク上のL型で。それと…」

「あ、あのー…お客様？」

少し引き攣つた笑顔で店員が制止する。

「あ、はい。何ですか？」

「申し訳ございません。当店では、オプションをメニューから選んで貰う仕様になっております…」

「あ…そ、そうなんですか。えっと、見せてもらつても」

「はい、此方でございます」

そう言つて店員は、メニューを渡す。

それを見ても機能性に特化するものはなく、アクセサリー等のオプションしかなかった。

「…なんか、いいのある？」

アニーミにメニューを見せてシスカは溜息を吐く。

どうやら、自分がオタクだということをしらしめたことと気に入つたオプションがないことに落ち込んでいるらしい。

アニーミ的には自分の好きな可愛いアクセサリーはあつたが、シ



スカの様子を見て購入をやめた。

「えっと、これ…また今度にします。シスカさん、行きましょ」

「うん…」

丸くなったシスカの背中を押してアニーミは外に出た。

その後、何軒か回ってみるもデザインと機能が一致するものは見つからなかった。

二人は公園のベンチで休憩していた。

(うーん…。折角のデートなのに失敗しちゃったかなあ)

アニーミは深い溜息を吐いた。

「何かごめん。俺、こういうのなると結局…こういうことになっちゃって」

シスカが少し項垂れて深い溜息を吐いた。

「あ、いえっ！ 付き合ってもらっただけでも嬉しいですし…！」

「うーん。…あ、ちよっと待ってて」

何かに気付いたららしいシスカは、ベンチを離れて走っていった。

(…？ 何だろう)

首を傾げてシスカの姿を見送るとアニーミは小さく溜息を吐いた。

(シスカさんは、デートだと思ってないんだろなあ。友達との買い物程度にしか、多分…)

「はい」

シスカは、アニーミにクレープを差し出した。

生クリームと色とりどりのフルーツの入ったクレープだ。

「あ、ありがとうございます」

アニーミがクレープを受け取るとシスカは少しだけ微笑んだ。

アニーミの隣に座ってアイスコーヒーを飲む。

「あれ、シスカさんは食べないんですか？」

「いや、俺…その量食べれないしさ。それに、俺…男だから…その男が外で甘いものを食べるなんて恥ずかしい。

そんな時代錯誤なことを言わんとしているのがわかる。

その顔にアニーミは小さく笑った。

「あ、良かった」

「え？」

何が良いのか、アニーミはきよとんと目を丸くした。

「何か…ちよつと落ち込んでたみたいだから。食べ物で釣るのは良くないって思ったけど…やっぱ、アニーミは明るい方が似合うし…」

シスカのその言葉にアニーミの顔が紅潮した。

意外と自分を見てくれているという事実が嬉しかった。

クレープを口に含むと酸味の利いたフルーツと甘い生クリームがマッチして美味しかった。

「あ、美味しい」

「それなら良かった」

美味しそうにクレープを食べるアニーミにシスカは笑いかけた。

優しい笑顔。

しかし、その笑顔はずっと向けられている。

何か…おかしい。

「あの…どうかしたんですか？ 凄くニコニコしてますけど」

「あ、ごめん。何か、アニーミって犬っぽいなって思って」

「へ？ い、犬ですか？」

「何ていうか…人懐っこい仔犬みたいな。気に障ったなら…あの、

ごめん」

アニーミは落ち込んだ。

恋愛対象どころか…犬扱い。

人間扱いすらしてもらえなかった。

でも…それでも、シスカの笑顔を見るのは好きだ。

だけど、今日はもう一つ目的があった。

シスカとニムの関係。

「あの…シスカさん」

「え、何？」

恐る恐る顔色を伺ってアニーミがシスカに尋ねる。

「シスカさんとニムさんって…恋人同士なんですか？」

「……………は？」

意味が分からないという様子でシスカは固まった。

「あ、あの…今朝のこととか…。なんか、シスカさん…ニムさんのために凄く頑張っているっていうか」

そこでアニーミは、我に返った。

(何これ！ 嫉妬丸出しじゃない、あたしっ)

後悔に苛まれていると、突然肩を掴まれた。

「アニーミ！ あんまりおぞましいこと言わないで。本当に！」

「へ？」

おぞましいこと？

シスカの顔が段々と青褪める。

「あの人は、人に恩を売って無茶難題なお礼をさせて相手が疲れているのを楽しんでいるドSなんだ。言われた通りにやっていけば、思っていたのと違うとか言われたことしか出来ないなんてこのお馬鹿とか…。今回だつて完璧にしてオプシオンつけなかったら、俺殺されるとこだつたんだから」

恐怖にまみれた表情でシスカは語る。

「で、でも…今朝のキスは」

「多分、あれもあの人の道楽。俺の反応見て楽しんでる。でも、キスは初めてだつたかも」

「き、キスは…って？」

他にも何かあるのかと恐る恐る聞く。

「俺の手使つて胸揉ませたり、耳噛んだり、首舐めたり…。セクハラだよ。何考えてんだか、あの人は…」

勘弁してよ、とシスカは頭を抱える。

つまり、シスカはセクハラの被害者だつたらしい。

「あつれー？ シスカ、そんなこと言っていていいと思つてんの？」

「ひいっ！」

背後からニムの声が聞こえてシスカの背中に悪寒が走った。

「今朝のキスもセクハラだなんて随分な言いようじゃない？」

ニムがいた。

草葉の陰から歩いてくる。

「だ、ただだだだって…ニムさん、いつも変なことばかりして。と  
いうか、いつからそこにつ？」

「何よう、変なことって。じゃあ、セクハラじゃないってこと教え  
てやるわよ。おいでなさい」

ニムがシスカの腕を、無理矢理引つ張る。

「ご、ごめん。アニーミ！ また後で…。いや、今度時計作ってあ  
げるか…ってて！ ニムさん痛いっ」

無理矢理連れて行かれてしまった。

アニーミは呆然とするしかなかった。

「な、何なのよ！ あの人ー！」

わなわなとアニーミの手が震えた。

\*\*\*

誰もいない高台に連れて行かれたシスカは、ニムに怯えていた。

一体何をされるのかと思うと震えが止まらない。

「じゃ、やるわよっ」

「な、何を…？」

楽しそうな表情のニムにシスカの顔が引き攣る。

「今朝の仕切りなおし」

「はあっ？」

「ね、シスカ。キスしよ」

満面の笑顔でニムが言うが、シスカは目を逸らした。

「そんな簡単に言わないで…下さい。だって、俺…そういうんじゃ

「じゃあ、あの子だったら出来るの？」

「は？ あの子って」

「さっき一緒にいた彼女。アニーミちゃんだっけ？ アンタと一緒に  
で奥手そうよねえ」

「何でそこでアニーミが出てくるんですか。今日はたまたま買い物と一緒に行っただけで…」

「ほんと、お馬鹿ね。シスカは」

「…はい？」

話が噛み合わないとしても言うように呆れた表情をシスカは浮かべた。

「いいから、いくわよっ」

「え、ちよっ…ニムさ…ッ」

有無を言わず、ニムはシスカの唇に口付けた。

今朝みたいな軽い触れ合いではない。

ニムの舌が、シスカの歯を抉じ開ける。

「ッ！」

舌が絡み合い、吸われる。

身体のどこかがむず痒くなり、震える。

自然とニムの身体を抱きしめていた。

(…どうせ、悪ふざけだ。でも…)

いつものセクハラと違う。

こんな濃厚なキスは知らない。

悪ふざけも此処まで来ると酷い。

シスカは、ニムを離れた。

「シス…えっ！」

そのままシスカは、ニムの身体を押し倒した。

「…悪ふざけもいい加減にしてください。じゃないと、怒りますよ

…」

真面目な顔つきだった。

こんなことを別の男にしたら、間違いなく誤解されて冗談じゃ済まないことになる。

「それとも…痛い目に遭いたいんですか？ 傷つくのは、ニムさんなんですよ」

本気で心配して本気で怒っているようだった。

その姿にニムは小さく笑った。

「シスカじゃないとやらないよ、こんなの…。だって、本当にあたしシスカのこと…」

「…確かにニムさんには感謝しています。それでも、取引代わりにこういうのは…俺、おかしいと思うんです」

「おかしくてもいい。いいよ、別に好きになつてなんて言わない。

でも…今は、今このムードでさ、何もしいなんて男じゃないですよ？」

「え…？」

「シスカ。本気なの、あたし。今だったら何されてもいい」

「…ニムさん」

きつとニムは本気だ。

今だったら…シスカになら何をされてもいいと本気で思っている。

普段は、こんなこと出来ない。

ニムとは友達だ。

恋愛感情なんて持ったこと無い。

「本当に…いいんですか？」

「うん。今ならシスカの言うこと何だって聞いちゃう」

「それじゃあ…」

ゴクリとシスカは息を飲んだ。

「家までうさぎ跳びで帰って下さい」

シスカの言葉にニムの目が点になる。

ニムから手を離して立ち上がると、シスカは溜息を吐いた。

「…別に報告とかいらないですから」

「ちよっ！ あんた…この空気でももしない気っ？」

「出来ませんよ…。俺、そんな勇気も無いし…そういうつもりもないし。第一…」

シスカは周囲を見て一呼吸置いた。

「此处、学園の近くなので誰が来てもおかしくありませんよ…」

その言葉に暫しの間。

「あー、そつか。人に見られるの恥ずかしいんだ？」

「あ、当たり前じゃないですか！ し、しかも…一応、俺…男だからそついうの…えと…」

「ほほう？ じゃあ、室内ならいいんだ？」

「何でそついう流れに持って行くんですかっ。はい、うさぎ跳び！」「ちえ…。はい、分かりましたあ〜」

少し膨れて、ニムはうさぎ跳びでその場を後にした。

その姿を影でアニーミは見ていた。

最初から…最後まで。

(な、何なの…。あの二人っ！ ま、ますますわかんないっ)  
アニーミはただただ混乱するだけであった。

## 第14話 揺れる自制心

ソルフェージュに戻るると玄関口にユリアが仁王立ちしていた。怒りのオーラを発している。

「え…ゆ、ユリア？」

「ちよつとツラ貸してもらおうか。このくそ野郎」

「へっ？ え、ちよ…いだだだっ！」

ユリアに耳を引つ張られシスカは連れて行かれた。

庭園に辿り着くと、ユリアはシスカを突き飛ばした。

「いてっ…！ ど、どうしたの？」

何故こんなにもユリアは怒っているのだろうか。

皆目見当もつかない。

「どうしたのじゃないわよ！ よくも先にデートした女の子放っておいて、別の女とデート出来るわねっ」

「え…？」

きよとんとシスカは目を丸くした。

「えーと、誰と誰がデート…したの？」

「はあっ？ アンタがアニーミ放ってニムとデートしたのは分かってんのよ！ ホント最低な男よね、あんた！」

怒りのユリアが発した言葉に思考を巡らせ、シスカは苦笑を浮かべた。

「いや、アニーミとは買い物行っただけだし…ニムさんには拉致されただけだし」

「だけ？」

ユリアのドスのきいた眼力に、シスカは肩を震わせて口を噤んだ。シスカの胸倉をユリアは掴んだ。

「あの子がどんな気持ちでアンタを誘ったのか分かってんの？ ニ



ムとどういう関係か咎めるつもりはないけど、他の子の気持ちちゃんと考えてやりなさいよ！」

「ご、誤解だよ！俺とニムさんは、そういうのじゃ……」

「…ほんと、馬鹿」

「え……？」

「今度あの子のこと傷つけたら、絶対許さないから！」

乱暴にシスカの胸倉から手を離し、ユリアは歩き去っていく。

呆然とユリアを見送ったシスカは、体育座りで俯いて溜息を吐いた。

(アニーミが傷ついた？途中で帰っちゃったから…だよな)  
傷つけた。

そういう意味だったら、後で謝らないといけない。

アニーミを放って、ニムに着いて行った自分が明らかに悪い。

それに、ニムのことにしたって…。

あの高台のキスを思い出して、シスカは顔を紅潮させた。

(何でニムさんが、俺なんかのこと…。俺は、友達でいたいのに。

…それに)

シスカは自分の手を見た。

あのキスの時に抱きしめた自分の両手。

どうして、抱きしめたのだろう。

そして、あの雰囲気では無理矢理乗り切ったけど…流されていたら、もしかして。

「いくらなんでも、それは無いよね……」

はは、と小さく苦笑した。

それでも、あの出来事は暫く忘れられそうも無い。

アニーミには、本当に悪いことをした。

このお詫びは、しないとイケない。

「ようー！モテ將軍！」

頭上から声がした。

顔を上げると満面の笑みを浮かべたルカだ。

「…何だ、ルカか」

「何だとは随分じゃねえか！ ま、お前がそれ所じゃねえのは分か  
つてるけどよ」

「…人事だと思って楽しんでる？」

「まあまあ、話聞けよ」

シスカの隣にルカが座った。

「ニムのことなんだけどよ…。あいつ何で戻ってきたか、分かるか  
？」

「え？ ニムさんが戻った理由？」

「…知らねえのかよ」

確かにニムは、事業の開拓に街を出て他の街へと移った。

社員に任せてモティーフに戻っただけだと思っているが、違うの  
だろうか。

「親父さんが事業に失敗したんだと」

「え？」

ニムの父親？

完璧主義者でいくつもの大企業を仕切っている男だ。

そんな彼の手駒の一つの会社が駄目になったくらいで、それが何  
だというのだ。

「それで失踪したらしくてな。今も搜索はしてるけど一向に見つか  
らねえ。だから、家を守る為に戻って来たんじゃないかって話だ。

クラススの奴が言った」

「失踪して…。家を守るって、だってあの人のお母さんは…。ほら、  
あの綺麗な…」

「は…？ おい、まさか知らねえのかよ」  
何が？

ニムの母親を何度か見たことがある。

上品でおしとやかさそうで…とてもあの人からニムが生まれたのか  
と疑うくらいに清楚な人だ。

「あれ、母親じゃねえぞ」

「え…？ それ、どういう…」  
母親じゃない？

だって、確かにニムの父親と一緒にいたし家に入ったりして  
いた。

自分の家のように。

「…まずったなあ、くそ」

「ルカ、どうということだよ。あの人がニムさんの母親じゃないなら、  
何なんだよ！」

「おい、落ち着けて。何かおかしいぞ、お前」

立ち上がり興奮して叫ぶシスカをルカが制止した。

「別に…おかしくなんて、無いよ…」

落ち着いたシスカは、再び座り込んだ。

「それで…何。どうということ？」

動揺してる。

どうでもいいじゃないか。

ニムさんの家庭事情がどうだろうが、関係ない。

でも…。

でも…。

「…愛人なんだと。父親の。母親は、もう死んでいるらしい」

シスカの表情が硬直した。

ああ、そうか。

だから、父親と寄り添って歩いていて家にも出入りしている。  
その父親がいなくなったら、当然愛人は…。そういうことだ。

つまり、家を守るのはニムしかいなくなる。

「…だから？」

自分でも冷たい声だと思った。

「だからって、お前…」

「ニムさんの家庭がどうであれ関係ないよ。知ったことじゃない…」  
そうだ。

知ったことじゃない。

俺には、関係ない。

母親がいらないのに愛人を受け入れなければならぬ？

嫌なら受け入れなければいいじゃないか。

でも、あの人は違うんだ。

父親の重荷にならないようになりたくて、父親の幸せを願って……。

だから、好きでもない愛人を母親のように慕う振りをした。

我慢してたんだ。

自由奔放な”振り”をして。

でも、だから何だっていうんだ。

友達でいることには変わらない。

変わらない、筈なのに。

「戻ろう、ルカ。少し冷えてきたし」

「お、おう」

ソルフェージュの玄関へと歩いていく。

突如、シスカの携帯端末が鳴った。

発信元は、ニムだ。

「……………」

出るか迷った。

反省すべきだ。

きつとまた軽々しくくだらないことをやるに違いない。

無機質で規則的な着信音が鳴り続く。

仕方ない。

そう思って、シスカは通話ボタンを押した。

「ニムさん。本当に、いい加減に……して……」

先手を打とうと思った。

しかし、様子がおかしい。

妙に静かだ。

しかし、すぐに大きな物音がした。

「シスカ……」

妙に弱々しい声だった。

「助け…助けて」

そこで、通話は切られた。

シスカの身体全体が硬直して、瞳が戦慄いた。

嫌な予感がする。

「あ、おい！ シスカ！」

自然と走り出していた。

ルカは追いかけてようとしたが、それが出来なかった。

あんなシスカは見たことが無い。

前はそんなことなかったのに、ニムの話になると様子がおかしくなるのは確かだった。

その後姿を見て、ルカは呆然とするのだった。

\*\*\*

高台。

公園。

学園。

配達店。

自宅。

彼女が行きそうな場所には、何処にもいない。

「何処だ…。ニムさん…！」

周囲を見渡す。

一体、何処にいるんだ。

息を切らす。

嫌な予感しかしない不安で怖くなった。

「テメエが最初に誘ったんだろうが！ あアっ？」

男の怒鳴り声が聞こえた。

まさか。  
まさか…。  
まさか……。

\*\*\*

「だ、だから謝ってるじゃない。冗談だって…」  
怯えた様子でニムが男二人に言う。

「良いことしないかって言ってることは、そういうことなん  
だろ？ 今更、冗談で済むかよ。いいから、こっち来いよ！」

「い、痛い！ や…やめてよ！ 男の癖に女の子にこんなことして  
…」

「女だからするんだろうが！ 誰に電話したのか知らねえけど、な  
めてんじやねえぞ」

男の一人がニムを押し倒す。

「やつ…！ 嫌あああっ！」

ニムの悲鳴と同時に彼女を乱暴に扱っていた男が吹っ飛んだ。  
冷たく鋭い眼光。

シス力だった。

「何だデメエ…」

「…何だ？」

冷たい声で静かに言うと、男の胸倉を掴んで壁に叩き付けた。

「いつで！」

「お前らこそ、何やってんだ？」

男は抗うが、シス力の強い力に押さえ込まれびくともしない。  
その目と力に恐怖で男は口をばくばくと開閉させた。

「調子乗ってんじやねえぞ！ ガキが！」

もう一人の男が折れ曲がった鉄パイプを持ってシス力に襲い掛か  
る。

しかし、掴んでいた男を背負い投げして向かってくる男を巻き込

んだ。

そして、男の一人の首を絞めた。

「調子に乗ってるのは、お前らだろ。女の子一人相手に男二人が何やってんだよ。この人に手出してみろよ。…殺すぞ」

「あが…！」

ギリギリと男の首を両手で絞める。

首の骨が軋み、本当に相手を殺してしまいそうだった。

「シスカ！ やめてっ」

ニムの声で、ハツとシスカは普段の表情に戻る。

男から手を離すと、二人は情け無い声を上げて逃げて行った。

シスカの顔が青褪めて、へなへなと座った。

「あ…また、俺…。何でこう…」

落ち込んだ様子でシスカは項垂れた。

最近、キレる確率が高い。

つい頭に血が上ってしまっ。

「…ニムさん、平気？」

シスカは、優しくニムの肩を掴む。

情けなくて心配そうな表情だ。

「う、うん。あはは…ありがとう」

頭を掻いて苦笑するニムにシスカは顔を上げた。

パン、と乾いた音が裏通りに響く。

ニムは呆然とした。

シスカの平手打ち。

初めてだった。

「…本当に、心配しました。言った筈です…。傷つくのは、ニムさんなんだって。俺が来なかつたら、大変なことになっていたかもしれない…」

シスカはニムを抱きしめた。

その強くて優しい抱擁（ほうよう）にニムの頬が赤くなり、シスカを抱き返した。

「…ごめんね、シスカ」

「謝るくらいなら…最初からしないで下さい。俺以外だったら…みんな、誤解して当たり前です…」

「…シスカは、誤解してくれないの？」

少し寂しげにニムが言うと、シスカは言葉を嚙<sup>く</sup>んだ。

少しの間を置いて、再びシスカは口を開いた。

「誤解して欲しいんです、か…？」

少し消え入るような声。

ニムは小さく笑って、頷いた。

シスカは、顔を紅潮させた。

「でも、俺…その…。ニムさんとは…」

「お願い、シスカ。じゃないと…私、また」

「うっ…。それは、困り…ます…」

「じゃ、お願い」

ニムは笑顔を向ける。

慌てたように顔を真っ赤にするシスカは、息を吐いて少し抱きしめていた身体を離れた。

「…本当に、もうやらないって…約束、出来ますか？」

「勿論。あたし、約束は守るもん」

そして、目を伏せたニムにシスカは息を飲んだ。

この一回…一回だけでいいんだ。

軽く、軽い所までで済ませる。

それが、彼女にとつて物足りなくても…一回は一回だ。

目を伏せたニムにシスカは口付けた。

積極的に舌を絡ませる。

「んっ…」

拙いけれど、高台でキスした時よりも濃厚なキスだった。

キスをしたままニムを優しく押し倒し、唇から首へと徐々にキスをした。

顔を上げるとシスカは自分のしたことに顔を赤くして、今にも心



臓が爆発しそうだった。

「キス、上手いじゃん。他の子にもしてたとか？」

「ち、違…！俺、こういうの初めてで…その…。本当に…いいの？俺だから安心してると言っただけなら…その…」

「此処までして何言ってるんの、馬鹿。知ってるわよ。シスカだって男の子だもん。狼になる時だってあるよ、そりゃ」

「うっ…。で、でも…」

「それとも、外だから嫌？」

「…もうそういうの、吹っ飛んでるかも」

「はは、と苦笑してシスカは頬を掻く。

「…ニムさん。俺…やっぱり」

好きでも無い相手とこんなのおかしい。

そうは思う。

流されている。確実に。

「…お願い、シスカ」

彼女は求めている。

シスカがニムを友達以上に好きじゃないことは知っている。

だからこそ、最初で最後のわがままだ。

そうだ、彼女の為に軽くだけ…。

…最後までやらなければいいだけだ。

抑えないと…。

そうじゃないと、きっと今までの関係が崩れてしまう。

「…分かった」

\*\*\*

ジエントは、一人それを見ていた。

スフォルツァンドのシミュレーション結果。

真面目な顔で、それを見ている。

「…やっぱり、そうか。彼は…」

意味深に呟いて、ジエントは溜息を吐いた。

「これ、報告するの勿体無いなあ……」

小さくぼやいて、子供のように楽しそうな笑みを浮かべた。

## 第15話 同化

憂鬱だった。

昨日の出来事を思い出して、シスカは机に突っ伏した。幸いなのかは知らないが、ニムは欠席していた。

シスカが憂鬱な理由。

あの後、自制心がきかずに最後までしてしまったのである。

(しょうがないじゃないか。俺だって、男なんだから)

はあ、とシスカは溜息を吐いた。

(でも、これでニムさんがあんなことしなければ…充分だ)

きつと彼女は、甘えたかったのかもしれない。

父親がいなくなつて寂しくて、あの広い屋敷に一人…だから心許せる自分を頼つてきた。

でも、その甘え方は歪んでいた。

「あ、あの…シスカさん？」

アニーミの声がした。

顔を上げる。

「あの…次、移動教室ですけど…」

「あー…」

ぼうつとして周囲を見渡すと、アニーミとシスカ以外誰もいない。とてもじゃないが、授業を受ける気になんてなれない。

そうだ。

アニーミに謝らなげや。

「アニーミ…」

「は、はい？」

「んと…ごめん。昨日、置いていたりして」

「……………」

二人の間に沈黙が訪れる。

「あの、シスカさん…」  
アニーミが何か言いかけた時、警報が鳴った。  
避難勧告が発令された。  
「…行こう、アニーミ」  
「え、あ…はい」  
一般市民は、シエルターへ。  
騎士隊やそれに関係する者は、ソルフェージュへ急いだ。

\*\*\*

今日のルーディメンツは、無数の足が生えていて身体の至る所にゼリー状の皮膚がテラテラと見える。

「何アレ。きつも！」

ユリアが怪訝な顔をする。

「そいつの装甲は硬い。通常の武器では傷がつかないから強度の高いビーム粒子の武器を装備させた。頼むぞ、シスカ」

通信でロツクの声を聞いて、シスカは顔を上げた。

「…はい」

もう前ほどの恐怖はない。

何故か落ち着けた。

冷静になれば、きつと見える。

シミュレーションテストでもそうやってきた。

でも、何処か精神が安定しない。

(駄目だ。集中しないと)

シスカは操縦桿を強く握った。

「さて、お手並み拝見だな」

カペラもブリッジで両腕を組んでモニターを見た。

(シスカさん…)

どうしてもアニーミは、シスカとニムのあの高台のやり取りが脳裏から離れなかった。

その後の情事を知らないのが幸いなのだが、アニーは深い溜息を吐いた。

\*\*\*

ソルフェージュから飛び立つとその巨大なルーディメンツに息を飲んだ。

マシンガンを装備しルーディメンツに牽制すると、叫び声が轟き激しいスピードで向かってくる。

それを想定してビームサーベルを装備して斬り付ける。

一刀両断したかと思えば、ルーディメンツが分離した。

「分離したっ？」

向かってくる敵が二体になったことでシスカは焦り始める。

「ど、どうしよう…。斬る度に分離するんじゃ…。こ、これ…」

『シスカ！ 落ち着けっ』

ロックの喝に、ハッとシスカは抱えていた頭を離す。

『ダメージを与えることで増殖するなら、粉碎するんだ。爆弾があるからそれで叩け』

「は、はいっ」

パネルを弄り、爆弾を装備しようとした時だった。

「え……？」

遠くに何か小さい影が見える。

岩陰に隠れていたのは、貴族の男子生徒達…アルベルトとジェリドだった。

「へえ、あれがブレスか。あの弱虫シスカが乗ってるなんてまだ信じられねえぜ」

「どうせ無様に倒されるんだろ。まぐれがそう何度も続くものか。見届けてやるうぜ」

笑いながら、二人は双眼鏡でその戦いを見ていた。

その二人を見つけたシスカは、目を戦慄させた。

「な、何で人が…。避難勧告は出た筈なのに…」

『シスカ、どうした』

「民間人が二人ほどいます！ 敵を引き付けながら遠ざけます」

『待て、シスカ！』

ロックが呼び止める前にスフォルツァンドが敵を引き付け、アルベルトとジェリドから離そうとする。

そのためには、近接戦に持ち込むしかなかった。

(どうしよう。ああは言ったけど…守りながらの戦闘なんて)

いつも以上に神経質にならなければならない。

敵を引き付けようとするが、どうしても一匹しか引き付けられない。

目の前のことに集中していたせいか、ハッと気付くともう一匹が二人へと向かっていた。

「え、あれ…やばくね？」

「う、うわああああ！ に、逃げろっ」

二人が走って逃げようとするが、敵の方が速い。

「くっ…」

スフォルツァンドは走った。

間に合え…間に合え…間に合えっ！

ルーディメンツが黒い霧を吐いて二人を攻撃しようとした時、ギリギリのラインでエネルギーシールドで守った。

初戦で使った搭載されていないはずの装備だ。

「早く…早く逃げて！」

シスカが叫ぶ。

「は？ …助けてくれた？」

「お、おい！ 早く行くぞっ」

呆然とするジェリドをアルベルトが急かした。

黒い霧がシールドを溶かしていく。

二人が遠くに逃げるまで耐えないと…。

「や、やばい…！」

二人が十分な距離に到達しようという時、シールドが割れた。

「うわあああああぁっ」

黒い霧がスフォルツァンドを貫き、コックピット内のシスカを捕らえた。

「シスカ！」

ロックが叫ぶ。

まさか、また…。

今度こそ、あんな奇跡は起きない。

「くっそ！ いつになったら、俺は出れるんだよ！」

「落ち着けルカ。今騒いでもどうにもならん。シスカ、聞こえるか？ シスカ！」

通信を送り、ロックは叫んだ。

コックピット内のシスカは、黒い霧に首を絞められていた。

「ッ、かは…ッ。だ、大丈夫で…すっ」

精一杯の返事だった。

意識を強く保っているからか、飲み込まれることはなさそうだが息苦しいのは変わらない。

（苦しい…。早く、やらないと…！）

操縦桿に手を伸ばし体勢を立て直そうとした。

しかし、ルーディメンツが先にスフォルツァンドの頭に噛み付いた。

「ひぎっ、あああああぁっ！」

脳味噌を無理矢理こじ開けられるような感覚。

何だこれは…。

スフォルツァンドが傷ついて、どうして中の人間に此処まで影響

が出る？

人間と機械は切り離された存在のはずなのに、神経が通っているようだった。

ルーディメンツの歯がスフォルツアンドを捕食する度、シスカの脳が汚染され、激痛が走る。

「うあ…ッ！　ぐっ…あああう！」

ガリッ…ガリッ…ガリガリッ

脳内を貪られる。

それがルーディメンツの栄養となっていた。

「やめるおおおっ！　うわあああああっ！」

シスカは叫んだ。

食べられる。

このままじゃ…内部から汚染されて食べられてしまう。

ガリッ…ガリリッ…バリッ…バリッ…バリッ。

「ひっ！　ふう…あっ！　あああう！」

バキッ。

亀裂が入った。

「…ッ、あ…！」

シスカの目が大きく戦慄いた。

何かが壊れる音がした。

スフォルツアンドが停止し、シスカの脳内にルーディメンツが干渉してきた。

「ッ、ああああああああっ！」

「シスカッ！　返事をしろ、シスカッ！」

ロックが呼びかけるも聞こえるのは、シスカの悲鳴だけだった。

「どういうことだった！　プレスが傷ついてもパイロットにそこまで影

響は…！」



「同化しているんだよ」

焦るロツクに静かにジェントが言う。

「おかしいと思ったんだ。多少パイロットとブレスの相性にズレがある筈なのに、シスカの場合はそれがなかった。データを見て確信したよ」

「…どういうことだ」

「一ミリのズレがないんだよ。だから常に安定していたし、自分の手足のように操縦できる。相性が良すぎるどころの話じゃない。同化しているとしたか思えない」

その言葉にロツク達は驚愕した。

「…へえ、興味深い」

ニヤリとカペラが笑った。

「テメエ…！ シスカがあんな目に遭ってるのに何笑ってやがる！ ルカがカペラの胸倉を掴んだ。」

「やめろ！ ルカっ」

ロツクが制すると震えてルカが手を離した。

最高責任者に手を出したらどうなるかくらいルカにも分かっている。

身なりを整えてカペラは、息を吐いた。

「今までにない症例だ。ブレスとの同化。それが吉となるか凶となるか、楽しみだな」

「てめっ…！ あいつを何だと…！」

「兵器だ。ルーディメンツを倒すための道具だよ」

「ふ…ふざけんなああっ！」

ルカの怒りが頂点に達した。

「ま、待ってください」

今すぐにもカペラに殴りかかりそうなルカだったが、アニーミの焦りの声が上がったことで止まった。

「パイロット…スフォルツァンドから分離。る、ルーディメンツとのシンクロを始めました！」

「な、何だとっ！」  
ルーディメンツとのシンクロを開始？  
もしジェントの推測が本当なら…。  
スフォルツァンドの代わりにルーディメンツと同化するというこ  
とか。

しかも、今のシスカは脳が汚染されている。  
嫌な予感しかしなかった。

\*\*\*

シエルターに到着したアルベルト達は、恐怖に息を荒げていた。  
「あ、あいつ…あんなのと戦ってんのかよ！ や、やばくね？」  
「つか、俺達守ったせいでやべえことになってやがる。し、死んだら  
どうしよう…」

アルベルトとジェリドは、頭を抱えて涙目になっていた。  
「どういうこと…？」

ニムの声が聞こえた。  
「ど、どういうことよ！ シスカが死にそうって…あんだ達を守っ  
た所為でって、どういうことよ！」

怒りの形相でニムは叫んだ。  
アルベルト達は、黙って目を逸らした。  
拳を握って歯を食い縛り、ニムは座り込んだ。

「シスカ…。お願い、死なないで…。戻ってきてよ…！」  
涙声でニムは切実に呟いた。

## 第16話 知りたいもの知らないもの

ルーディメンツに脳を貪まれ、シス力は操縦桿を握り堪えていた。自分でも分かる。

飲み込まれていくことが、分かる。

でも、絶対に負けたくなかった。

何処までもこいつらは、干渉してくる。身体を取り込もうとしているのが分かる。

きつと、自分が戦う前は同じように戦っていた人達がいた筈だ。

今も…みんな、戦っている。

きつと今まで沢山犠牲が出たのだろう。

ブレスが二機しかないのはそのせいかもしれない。

だとしたら…これ以上、犠牲を出したくない。

その中には勿論自分も…。

「ッ、…ぐうっ！」

脳を掻き混ぜられる感覚がして、何度も吐きそうになる。

通信のパネルを押すが動かない。

スフォルツアンドも機能を停止している。

絶望的…。

いや、絶望なんて…簡単に思っちゃいけない。

生きている限り…絶望なんかない。

絶望を感じていた二年前だって、自分の足で歩けた。

ルカがいたから、一緒に歩けた。

今は、仲間がいる。

騎士隊のみんなが…いてくれる。

だから、俺は負けない。

「負けて…たまるかあああああっ！」

汚染された脳内を振り払うように顔を上げて、操縦桿を力いっぱい握り締めた。

この気持ちは自分だけのものだ。

この気持ちまで侵されるわけにはいかない。

だから、頼む。

動いてくれっ！

シスカの叫びに呼応するように、スフォルツァンドの目が光り再起動する。

それだけではない。

スフォルツァンドのステイルブルーの装甲が眩いほど青く輝いている。

シスカを巻き付ける黒い霧も消滅し、頭の中も妙にクリアだ。

「これは…」

自分でも不思議な感覚がした。

力が漲ってくる。

手に残る光の粒子を握り締める。

何がなんだかよく分からない。

でも、これは自分を優勢に立たせてくれる力だ。

あの時の…初めて戦った時の力の比じゃない。

あんなビームやシールドの比じゃない力が漲ってくる。

シスカは、スフォルツァンドを走らせた。

大きく口を開ける敵が迫ってくる。

その口に拳を入れて手を開くと爆発的なエネルギー粒子が弾け、

ルーディメンツは木っ端微塵に吹き飛んだ。

「あと、一匹！」

ビームサーベルを構え、突進する。

普通に斬れば分裂するのは分かっている。

だったら…。

「粉々に吹き飛ばすだけだっ！」

敵の口から発せられる泥のような液体。

地面に跳ね返り、スフォルツァンドの足の装甲の一部を溶かした。  
「うぐうっ…！」

溶けた瞬間、足に激痛が走った。

「ああっ！…ぐっ…くっ…！」

この痛みが、生きていることを実感させてくれる。

「うおおおおおっ！」

痛みを振り切るように叫んで、敵をビームソードで串刺しにしてスフォルツァンドから伝わるエネルギーがビームサーベルを伝わり敵の身体へと集中する。

ビームサーベルを抜き取り、敵から離れた瞬間、爆発が起きた。

戦闘が終わった後、シスカは動かずに自分の手を見ていた。

スフォルツァンドと繋がる神経、謎の爆発的な力…。

スフォルツァンドとは何なのか、ブレスとは何なのか…ルーディメンツとは何か。

その答えを知りたかった。

大事な人達を守るために戦う。

でも、答えを知りたい。

政府が何故、こんな力を持っているのかと。

\*\*\*

ソルフェージュに戻ったシスカは、厳しい顔をしていた。

皆、勝利に喜んでいたが…何処か雰囲気がおかしいシスカに気付いて周囲も大人しくなった。

「よっ！ シスカ、やっぱお前はやる奴だと思っ」

「ごめん、ルカ。後で聞くから」

ルカを横切って、シスカは先程の戦闘で痛めた足を引き摺ってカペラとシロフォンへと近づく。

少し緊張した様子で目を泳がせ、漸くその顔を上げた。

「あの…教えて欲しいことがあるんです。その、スフォルツァン

ドは」

「今日はよくやった。疲れただろう、休め」

シスカの言葉を遮り、カペラがはっきりと物言いをする。

「聞いてください。俺…！」

「悪いな。こつ見えても忙しい身だ。今、君に語ることは何も無い」

「そんなんっ！ だって、俺とスフォルツァンドは！」

「くだい。今日はもう休め。…命令だ、分かったな？」

「ちよつと待っ…待っててください！」

「シロフォン、行くぞ」

「はっ」

背中を見せてカペラとシロフォンは、去って行った。

語ることは無い。

どうして…？

だって、知らないことばかりじゃないか。

それなのに、どうして教えてくれないんだ。

モヤモヤする。

物凄く、心の中が…不快だった。

「シスカさん…」

シスカが俯いて拳を握る姿を見て、アニーミは小さく彼の名を呼んだが返答は無い。

俯いているシスカの頭に大きな手が乗る。

顔を上げた。

ルカだ。

「腹減らねえか？ 何か食いにいくこつぜ。少し落ち着いてからでもいいだろ」

シスカの心中を察し、満面の笑顔をルカは浮かべた。

こついう時、ルカのこの笑顔に救われる。

単純だと思つが、少しだけ心が軽くなった気がする。

「んー！ あたしもおなかへった。アニーミも行くこつよ！」

「う、うん…！」

背伸びをするユリアとシスカを見ていた視線をユリアに向けてアニーも便乗する。

「おう！ ロック達はどうすんだ？」

ルカがロックとジエントに声をかけるが、二人は苦笑した。

「大人は、ガキ共と違って仕事あんだよ。お前らだけで行って来い」  
「まあ、あんまり遅くならないようにね。特にシスカは疲れているんだから」

「あ…は、はい」

気を使ってくれたのかどうなのか分からない。

それでも、今は大人達がいると余計なことを聞いてしまいそうだった。

また今度、頭の中を整理しよう。

今は…少しくらい、気が緩むのを許して欲しい。

「で、何が食べたいのよ。シスカに合わせるわよ。なんたって今日のMVPなんだからね」

「えー…と、じゃあ…あの店かな」

「おっ！ もしかして、あそこか。お前も好きだな！」

ルカは足を引き摺るシスカの肩に腕を回し、無理矢理自分の歩幅に合わせ歩いていく。

「…何処？」

ユリアとアニーは顔を見合わせ、首を傾げた。

\*\*\*

向かった先は、一軒のラーメン屋だった。

店内はお世辞にも綺麗とは言えなくて、壁には油の染みがあり何処か一昔前の雰囲気を行拂とさせる。

「よーっす！ 親父、久しぶりだな」

「久しぶりも何も、おめーは昨日来ただろうが」

頭にタオルを巻いて無精髭を生やす男が豪快に笑う。

「おっ！ シスカが来たってことは…恒例のアレか！」

「その為に此処選んだんだもんな？ 賞金高えし」

「うん。おじさん、俺いつもの」

明らかに常連のシスカとルカを見てユリアとアニーは呆然とした。

「しよ…賞金？」

「お前ら適当に頼んでいいぜ。どうせシスカの奢り…つか、タダだしな」

「は…？」

ユリアとアニーは意味が分からないといった様子でルカとシスカを見た。

未だに状況が分からない。

「まだ決まったわけじゃねえ！ シスカ、今度こそ負けねえぞ！

今回はこれだっ！」

バン！と店主は、壁に張ってあるチラシを叩いた。

「激辛味噌特盛ラーメン、特盛チャーハン、餃子三十皿！ スープ

一滴、米一粒残すことなく三十分以内に食えれば、賞金一万ネカだ

！ 食えなかつたら、料理分の代金だ。やめるなら今のうちだぜ、

シスカ！」

自信満々に腕を組む店主が笑うも、シスカは何事も無いようにカウンターに座った。

「じゃ、それをお願いします」

シスカは、特に怯える様子もなく店主の挑戦を受けて立った。

シスカにとつては、良い小遣い稼ぎだった。

他の同じような場所へ行っても賞金は精々三千ネカ。そうなると、

この店は七千ネカも稼げる。

たくさん食べてお金も貰える。

貧乏なシスカには、持って来いの挑戦だった。

ぐぬぬ…と呻き、店主は厨房の奥に消えた。

「だ、大丈夫なんですか？」



「シスカはこの店のチャレンジ常連だからな。今まで、全勝してるし大丈夫だろ」

「…どんな胃袋してんのよ」

呆れた表情でユリアはシスカを見る。

アニーミは心配そうにおろおろしていて、ルカは勝利を確信するように笑いながら各々が食べるメニューの注文をした。

そして並べられたチャレンジメニュー。

店の客全員が、ギャラリィとしてシスカを見ていた。

「…よし、始め！」

店主の掛け声を合図に割り箸を割り、シスカの挑戦が始まった。

ただ食べるだけではなく、無駄の無い動きはまるで研究を重ねた上で身につけた技術のようだった。

しかも時間を気にしながら苦しそうに食べるのではなく、美味しそうに食べている。

しかし、そのスピードは常人を卓越していた。

客全員が魅入っている中、最後のスープ一滴を飲み干しどんぶりを置いたことで勝負は決した。

「よっし、終わったな。さて、タイムだが…。……は？」

店主がストップウォッチを見て大量の汗を流しながら震えていた。ゴクリと生唾を飲んでシスカ達が店主を見ると彼は、ストップウォッチを前に出して涙を飲んだ。

「二十三分四十秒…。うおおおおっ！ 新記録じゃねえか、シスカ！」

「今回も勝ったよ、ルカ！」

ルカとシスカがハイタッチすると、客からも歓声上がり拍手が送られる。

「あ、おじさんご馳走様でした。激辛味噌おいしかったです」

特に嫌味でも何でもなく、シスカが笑って見せると肩の力が抜けたように店主は溜息を吐いた。

「…たく…。おめえには敵わねえよ。このチャレンジコースで稼げる

と思いきや、おめえみたいなのいるしよ。…まあ、おめえの姿見て安易に挑戦した奴の屍は見てきたけど」

「し、屍って…。あ、おじさん。あとアイス食べたい」

「まだ食べるのっ?」

流石のユリアも突っ込まざるを得ない。

あれだけ食べておきながら、まだ食べるというシスカの胃袋が信じられなかった。

しかもラーメン屋にアイスが置いてあるのかという疑問もあったが、店主はすぐに市販のカップアイスでシスカへと渡した。

「この店でアイス食べる奴なんて、おめえしかいねえよ。…っか、うちじゃ扱ってねえんだけどな。良い食いつぶり見せてもらったから、おまけだ」

「ありがとう、おじさん」

美味しそうにシスカはアイスを食べっていて、店主は機嫌よさそうに笑った。

しかし、ふとアニーミは疑問に思ったことがある。

「あれ? そう言えば…シスカさん。以前、私にクレープ奢った時に全部食べれないって言ってましたけど…あれって」

「あー、あれ?」

前に時計を探しにアニーミと出掛けた日を思い出した。

「食事とデザートは別だから」

確かに別腹という言葉はある。

しかし、シスカの言っていることはそうではなく食べられる量の問題を言っているのだろう。

だが、シスカがこれだけ大食いであればクレープの一つくらいものともしないと思うのだが…。

「あと、ちよっと…生クリームが苦手です」

確かに、デザート系のクレープに生クリームは付き物だ。

それじゃあ、それと量の問題を取り除いたら…。

想像するだけで恐ろしい。

「ぎゃあああああつ」

客の一人が悲鳴を上げた。

「かつら！ 辛いつていうより、痛い！」

シスカが挑戦したメニューの激辛味噌ラーメンの並を食べていたらしい。

飛び跳ねるほどの辛さらしく、店主は誇らしげに笑った。

「あつたぼうよ！ なんとつてブート・ジョロキア十七本をスープに染み込ませたんだからな！」

その場の全員の顔が青褪めた。

ブート・ジョロキアといえば世界一辛い唐辛子と有名だが、それが十七本。

明らかに人間が食べる辛さでは無い。

それを涼しい顔で食べるシスカは、化け物かと思ってしまう。

「ほんとにシスカの辛党には参るぜ。おめえ、いつか早死にすんぞ」「大丈夫だよ。普段はちゃんと栄養取ってるし」

「だったら良いけどよ。おめえが来ると心が躍っちまうぜ、別の意味で」

「うん。チャレンジメニューとは別に、此処おいしいから。次に来るのが楽しみになるよ」

「かー！ 言ってくれるじゃねえか！ その言葉あつてこそこの商売やっていけるってもんだ！」

「うん、いつもありがとう」

そんな風に和やかな会話を聞くが、先程の戦場が忘れられないユリア達にはその光景が次なる戦いの宣戦布告にしか聞こえなかった。「流石は、俺の見込んだ男だけあるぜ」

ルカは、満足そうに笑った。

\*\*\*

店を出る頃には、陽が沈みかけていてオレンジ色の空が眩しかった

た。

「さーってと、そろそろ帰ろつか。あたし、夜に見たいテレビあるし」

「俺も、ちつと筋トレしねえとな。最近サボリ気味だし」

「ユリアとルカは帰宅モード万全だった。」

「それじゃあ、帰りま……」

「あ、ごめん。俺とアニーミちょっと用事あるから先に帰ってて」  
二人と同じく帰宅モードに入ろうとしたアニーミの言葉をシスカが遮る。

「えっ？」

驚いてアニーミは、シスカを見た。

その様子を何となく把握したユリアは、笑みを浮かべた。

「分かった。でも、あんまり遅くならないようにね！ …シスカ」

「え？ うわっ！」

ユリアはシスカの肩に手を回し、耳元で囁いた。

「次、アニーミを傷つけたら全力で殺すから覚悟しなさい」

「は…はい…」

先日、アニーミを置き去りにしたことを言っているのだろう。

あの時のことを肝に銘じておけということだ。

次、同じことがあれば自分の命は無い。

確信できた。

「おう、シスカ。あんま遅くなんなよ？ 疲れてんだからな」

「うん、わかった」

ルカが念の為に注意をすると、シスカは頷いた。

「んじゃ、行くぞ」

「はいはい。アニーミ、シスカに襲われたら全力で助けを求めろよ！」

そう言ってユリアは、ルカと共にソルフェージュへ向かって歩き出した。

「もう、ユリアったら…」

「はは、信用されてないなあ」

シスカは苦笑を零すも、次にはアニーミを見て微笑んだ。  
その笑みにアニーミの胸が高鳴った。

「行こうか」

「…はいっ！ あ、あの…シスカさん…。その…」

「ん？」

「その…あの…手を…繋いでも…」

精一杯の勇気だった。

きつと自分からアプローチをしないと誰かに取られてしまいそうで不安だった。

ニムのことがあった以上、負けていられない。

ニムに負けないくらい、彼に気にかけてもらいたい。

(だ、駄目かな…。どうしよう)

駄目だったらどうしたらいいのかと考えて、うつたえるアニーミの前に手が差し出された。

「うん。ちよつと足痛いから、手…貸してくれると嬉しいかな。ありがとう、アニーミ。その…気を遣ってくれて」

アニーミの想いは届かず勘違いをしていたが、それだけで充分だった。

シスカの手をアニーミが取る。

胸が高鳴って少しうるさい。

それでも、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

## 第17話 少女の面影

シスカとアニーミは、既に使われていない大きなビルの最上階を目指した。

差し詰め、経営困難になって倒産した企業というところだろう。人はいなくても、オフィスのような机や椅子が各々の部屋に並べてあった。

エレベーターが使用できることから、まだこの場所は管理されているということが分かる。

切れかけた白熱灯が、薄暗い光を発し何処か不気味だった。

「あの、シスカさん…。ここは？」

何故こんな場所に連れて行かれているのか、アニーミは不思議だった。

しかし、シスカはずっと無言でアニーミの手を握って先導していた。

エレベーターの最上階は、屋上だった。

オレンジ色の夕陽をバックにした街全体が見渡せる綺麗な景色だった。

「綺麗…」

思わず感嘆の息をアニーミは漏らした。

「…俺、気に入ってるんだ」

「…綺麗ですもんね。こんなに街が見渡せて…ふふ、ちょっと街の建物が玩具みたいに見えます」

嬉しそうなアニーミにシスカは微笑んだ。

「こないだのお詫び。ルカにも教えてないんだ、此処は」

「そう…なんですか？」

大親友であり家族同然のルカにも教えていないこの場所をアニーミに教えた。

それは嬉しかったが、何故自分に教えてくれたのだろうか。

「ま、それだけなんだけどね。何となく、見て欲しかっただけ。アニーミだったら喜んでくれるかなって…。今は無性に誰かの笑った顔が見たくてさ…」

「笑った顔…？ ……さっきのラーメン屋でルカさんやお店の人が思いつきり爆笑していましたけど」

「ルカの馬鹿笑いじゃなくて…。んー…うまく言えないんだけど。…あっ！」

困ったように頭を悩ませるシスカだったが、何か閃いたように笑った。

「そう、笑顔。嬉しそうな感じの…アニーミみたいな優しい笑顔が見たかったんだ、多分」

へへっと笑うシスカを見て、アニーミの胸が高鳴り顔が紅潮した。夕陽で誤魔化せているか誤魔化せていないかはわからない。

「…戦闘が終わるとさ」

シスカは、アニーミから夕陽に目を移してぼつりと呟いた。

「戦闘が終わると生きてる実感があって、ほっとする。また乗り越えられたんだ、みんなを守れたんだって。でも、今日は考えることが多くて余裕がなかった。それで、落ち着いてみるとちよつと寂しくなっちゃって…。誰かの優しい顔が見たいなって思ったんだ」

「寂しい…？」

「うん。子供みたい…かもしれないけど、ルカやユリアには癒し効果はあんま期待できないし。ええっと…何て言えばいいのかな…」

あの二人はどつちかと言えば、元気をくれる感じ。そうなる、やっぱアニーミかなって。えっと…わ、分かるかな？」

「シスカさん…」

嬉しかった。

上手く喋れなくてそれでも自分の言いたいことを伝えようとしているシスカを見て、アニーミの顔が自然と綻ぶ。

そんな戸惑った顔も、優しい声色も心地よかった。

やっぱり、この人が大好きなんだと実感してしまう。

しかし、アニーミはふと気になった。

「あの、突然すみません。シスカさんって何歳なんですか？」

「俺？ 十五…だけど」

アニーミは衝撃を受けた。

ルカと馬鹿話ばかりしているから、彼と同じ年かと思っていた。

「と、年下…」

「え？」

「私…十七です。てつきり、ルカさんと同い年かと」

「あ…うん。よく言われる。ルカは、十八。あいつ馬鹿だから、

幼く見えるのかな」

恐らくそれは違う。

ルカが馬鹿をやってシスカが正論を通す事でこの二人はバランスが取れているのだ。

見た目の容姿の問題じゃない。

確かにルカの存在もある。

しかし、それ以上に様々な苦境を乗り越えてきたシスカは、同年代の誰よりも精神的に大人なのだ。

「…ねえ、アニーミ。何で、年聞いたの？」

素朴な疑問をシスカは投げかけた。

「いえ、さつきシスカさんが自分は子供みたいだって言っていたのが気になって…。充分に子供じゃないですか」

「…言われてみれば。はは、確かにそうかも」

「ですよね？」

シスカとアニーミは、くすくすと笑いあった。

その後、シスカも思い当たる節があったのかアニーミをじっと見た。

「俺も気になったこと聞いていい？」

「あ、はい！ 何なりと」

何を言われるのかと緊張しながらアニーミは構えた。



「何で、アニーミって敬語なの？」

「えっ？」

本当にどうでもいい質問だった。

関心というよりは、ただの素朴な疑問だろう。

「上官のロツクさんやジェントさんは分かるけど……。俺とルカに対して凄いい敬語だよな。さん付けだし」

「そ、それは……」

「……まだ、仲良くなりきれてないってことなのかなって思っちゃって。あつ！ その、別に無理する必要は……ないんだけど。えと、出来たらで良いから呼び捨てがいいかなって……」

「よ、呼び捨てっ？ なっ、そんな大それた事を！」

「うわっ！ いてっ……！」

突然大声を上げたアニーミに後ずさりをしたシスカは、痛む足に力を入れてしまい少し表情を歪めた。

「あ、あああつ！ シスカさん、すみません！ ……じゃなくて、ご……ごめん」

「大丈夫大丈夫。……んー、やっぱり呼び捨てがいいなあ。現に俺の方が年下だし違和感感じるかも。あ、無理はしなくてもいいよ。年の関係って言ったら、俺だって今更アニーミさんなんて言えないからさ」

少し寂しそうにシスカは座り込んだ。

「わ、分かりまし……分かった！ い、言ってみる……。え、えと……シッ……シシシ……ッ……シス……カ……。………さん」

言えなかった。

突然、変えろと言われても無理な話だ。

そもそも男の子を呼び捨てにすること自体が恥ずかしい。

ユリアと違って積極的になれない分、尚更だった。

茹で上がりそうなほど顔を真っ赤にして必死そうなアニーミを見て、シスカは嘔き出した。

「あっはははは！ あ、アニーミ……！ ゆ、ゆでだこ……お、おもし

ろ…くくっ」

爆笑していた。

堪えられないというように涙を浮かべて笑い声を上げていた。

こんなシスカは見たことが無い。

「え、え…？」

「あははっ、もっかい言っつて。アンコール」

完全に引っかかっていた。

アニーミがすぐに出来ないことを知っていてやらせたんだと漸く気がついた。

多分、最初はそんなつもりはなかったのかもしれない。

でも、この様子を見る限り途中からは騙っていたのだ。

こんなことをする人だとは思えなくて、益々シスカのことが分からなくなつた。

「もっつ！ 何やらせてんですかっ」

「ほら、敬語出てるって」

「うっ…うう…。シスカ君の馬鹿っ！」

ハッとアニーミは気付いた。

今、シスカ君と言った。

シスカさん…じゃなくて、シスカ君と言えた。

何故か、嬉しい。

「…ありがと、アニーミ」

嬉しそうにシスカは笑った。

「……。馬鹿って言われるのが嬉しかったの…？」

「いや、そうじゃなくて…」

シスカは論点がずれているアニーミに苦笑を浮かべた。

しかし、すぐにまた元の笑顔に戻った。

「アニーミがちゃんと対等に見てくれて嬉しいんだ。アニーミとも遠慮なく話せる友達に…なりたかったから」

「対等…？」

「うん。えっと…俺達四人にいる時、何となくかな…アニーミが」

歩引いてる感じがあつて。違和感みたいなの…うん、感じちゃって」  
「それ言ったら、シスカ君…もあんまり積極的じゃないような」  
「俺は、ほら…何かあの二人が変に絡んでくるから引いてるだけで…。割と話すよ？」  
意外だった。

そういえば、シスカは大人に対してはかなり言葉を飲み込む癖はあるものの自分達に大しては普通だ。

最初はびくびくしていたが、あれは人見知りゆえかもしれない。それ以上に、騎士隊に入る時のシスカは心に余裕がなかった。最近の彼は、普通に無理なく話をしている。

しかも、ルカには容赦なく殴るほどの仲良さで羨ましいくらいだ。彼も普通の男の子なんだなと感じられて嬉しかった。

シスカは立ち上がり、アニーミに手を差し伸べた。

「…帰ろうか？」

胸がドキドキして、少しうるさい。

少しだけシスカと近い距離になれたことが嬉しくて胸が躍る。

今は友達でもいい。

此処から少しずつまた頑張れるような気がした。

「うんっ」

アニーミはシスカの手を取り、その手の温かさが心地よく感じた。

\*\*\*

「ルバートの修理が終わった？」

書類を纏めているロツクにジェントが報告に来た。

「うん。ルカとの同調試験が終われば完璧。もうシスカ一人に頼ることなく出来るってわけ。ただ、戦力になるか足手纏いになるかっていうのは別の話だけだ」

「近距離・遠距離共にバランスの取れているも装甲的には少し心許ないスフォルツァンドに対して、格闘に適した近距離型で装甲の硬

イルバートの欠点といえばスピードか。この二機が上手く連携が取れれば大きな戦力にはなる」

「シスカは最近何とか形になりつつはあるから…あとはルカ次第かな」

「……。ルカか。あいつ大丈夫か」

「いや、まだ何とも。まずは、テストしてみないと…」

「そうじゃなくて。…まあ、これちょっと見てくれ」

ロツクが端末のキーボードを弄ると、モニターにルカの顔写真とデータベースが表示される。

「ルステイカ」ピッツィカード…って、え？ これって…」

データを見てジェントは驚愕に目を戦慄かせた。

「ああ…。もしかしたら、奴を前線に立たせるのは危険かもしれない。いや、そもそもシスカと一緒に戦闘に出ること自体が…」

「…シスカと？ それってどういう…」

ロツクの言わんとしている事が理解できず、ジェントはデータを見ていた。

ルカのデータの次ページを開く。

そこには中年の男女と幼い少年と少女の家族写真らしきものがあった。

恐らく、この少年がルカなのだろう。

しかし、着眼点はそこではない。

少女の写真を見て、ジェントは驚きを隠せなかった。

黒髪にポニーテールの幼い少女の顔は、あまりにも似すぎていた。

彼が大切にしている少年の面影と瓜二つだった。

「これは…」

その先を続けることが出来ず、ジェントは口元を押さえた。

「…ルカのシスカに対する依存が強くなればなるほど感情が左右されてプレスとの同調が乱れる。…奴は、ある意味危険すぎる」

ロツクは不安に満ちた表情で深い溜息を吐き、もう一度ルカのデータの中にある家族写真を…無邪気に笑っている少年と少女の姿を

見ていた。

\*\*\*

「……で、何でおめえが此処にいるんだよ」

腕立て伏せをしながら、ルカは横目でその人物を見た。

その人物…ユリアはまるで自分の部屋のように寝転がりながらお菓子を食べ、テレビを見ていた。

「言ったじゃん。見たいテレビあるって」

「てめえの部屋で見ろや！」

「あたしの部屋のテレビ映り悪いのよね。今度シスカに修理頼もうかな」

「シスカは便利屋じゃねえんだぞ。あんま、あいつに甘えんなよ」

腕立て伏せから起き上がって少し機嫌悪そうにするルカを、ユリアはじっと見た。

「…んだよ」

「ルカって家族とかに騎士隊に入るって言わなかったの？ まあ、

シスカは身寄りが無いからしょうがないけど」

「あ？ だって、シスカの方が先に入ってたんだから許可いらねえだろ」

「そうじゃなくて…」

ルカの認識では家族と言えばシスカらしいが、ユリアが言いたいのはそうじゃない。

「あなたの本当の家族のこと言ってるの。シスカ抜きでね」

「あ…」

ルカはユリアの言葉の意味を漸く把握したが、暫く考えて首を傾げた。

「どっちのこと言ってるんだ？」

「は？」

「生みの親と育ての親のどっちだって聞いてんだよ。どっちにしろ、

んなもん取ってねえけどよ」

ユリアは硬直した。

もしかしてルカは、人に話しにくいわけありの事情でもあるのだろうか。

そうすると、自分が安易に聞いたものは…。

「…なんか、ごめん」

「あん？」

「あんたも苦労してたのね」

「…どういうことだよ」

目を細めてルカは頭を掻いた。

「…トーン財閥って知ってたか？」

「へ？ ああ、確かかなーりでつかい金融企業よね。金持ち過ぎて明らかに貴族の中の選ばれし貴族っていうか」

「生みの親がそれ」

「え…？」

ルカが何を言っているのか分からなかった。

名門貴族中の貴族のトーン財閥の子息がルカ？

あまりにも似合わない。

「ま、血だけで言えばな」

「…どういうこと？」

「兄弟多すぎて、養子に出されたんだよ。俺の苗字はそっからきてるわけ」

「兄弟多すぎてって…何人いんのよ」

「しらね。七十人はいるんじゃない？ 母親もそれぞれ違うし」

「多すぎ…。それ、一夫多妻ってこと？」

「おー、それぞれ。そんでよ、傑作なんだよこれが。トーン家にいられる将来有望な跡継ぎ候補と認められるのはたった三人でよ、それ以外はぜーんぶ養子に出される。な、ひでえだろ？」

笑いながら話すルカにユリアは胸が痛んだ。

聞いてはいけないことを聞いてしまった気がする。

笑ってはいるが、ルカに余計なことを思いださせたのではないか  
と思つてそこで会話を終わらせようとした。

「ごめん、ルカ…。あたし…」

「まあ、聞けつて。それで投げ捨てられた可哀相な俺様はよそ様の  
家の養子となり、そりゃ幸せな幸せな…」

「いいからっ！」

ルカの様子がおかしい。

いつも素直に感情のままに動いているルカじゃない。

何処か空元気のように見えて…無理をしている。

同情されたくないから、無理をしていて気が済むまで話そうとし  
ている。

こんなのは見てられない。

「あたし、部屋に戻る！」

ユリアは一刻もこの場所から離れたくて、ルカの部屋を出た。

その後ろ姿を呆然と見て、扉が閉まるとルカは溜息を吐いた。

「ほんとに幸せだったんだけど…何勘違いしてんだ、あいつ。…ナ  
ナ、どう思うよこれ」

ルカは、鍊機手帳を開き画像ファイルを開いた先にある一人の幼  
い少女の写真に語りかけていた。

「…あー！ くそっ」

頭をがしがしと掻いてルカは立ち上がった。

「モヤモヤする！ 風呂だ風呂！ 大浴場だーっ！」

ルカは叫び、お風呂セットを持ってソルフェージュ内の大浴場へ  
と向かった。

部屋の小さな浴室では我慢できないとでもいう表情で、エレベ  
ーターを使わず長い階段を駆け上った。

そのルカの様子に誰もが振り返り、ルカがまたおかしなことをし  
ているというくらいにしか思わなかった。

思い出したくない思い出を振り払うように走り続けるルカは、少  
しだけ苦しそうな顔をしていた。

## 第18話 安定のない心

とある飲食店。

少し元気のないニムは、ビートと一緒にいた。

ニムの目の前には、ついさっき来たばかりのカルボナーラが置かれている。

「ほら、食べなよ。冷めちゃうよ」

ビートがニムにフォークを手渡すと、彼女はそれを受け取った。

しかし、料理には手をつけない。

「……シスカに会いたい」

ぼつりとニムが呟いた。

これで何回目だろう。ニムはこれしか言わない。

いい加減に聞き疲れたビートは苦笑を浮かべた。

「ニムちゃんは、もう決めたんだろ。シスカと距離を置くって」

ビートが、頼んでおいたペロンチーノの麺をフォークで丸めて

口に運ぶ。

ニムは俯き、その視線は自然とカルボナーラに向けられている。

「うん、幸せだったからもういいの。あのね、シスカの肌って凄く

温かくて…触り方も優しくてね」

「ニムちゃん、その先はストリップ。飲食店で下ネタ禁止。しかも、

そういうのは人に話すネタじゃないから」

「うっ…うん。分かってるんだけど…。もしかしたら、戦闘でシス

カが苦戦していたのって…あたしとのことで集中出来なかったのか

なって思うと」

「で、それをニムちゃんは謝りたいわけだ？」

ビートの問いかけにニムが頷くと、ビートは盛大に溜息を吐いた。

「それで謝ったら、シスカは怒るよ。絶対に」

「え…?」



「ニムちゃんはその件について後悔してる？ それは覚悟を決めて君を抱いたシスカの気持ちを踏み躪ろうとしているってことだよ。多分そういうことに気付かないニムちゃんと気付かせられなかった自分に怒って、最悪…一生口きかないかも」

勿論、シスカがこのくらいで口をきかないなんてことはありえないだろう。

しかし、このお嬢様にはこのくらい脅しをかけないと自分を甘やかして自制がきかなくなっただけで同じ事を繰り返す。

振り向いてもらうことは無いのに、自ら傷つく方へと飛び込むかもしれない。

いい加減、成長すべきだ。

だから、敢えて大袈裟に事を運ぼう。

だが、シスカが怒るという意味では脅しても何でも無い。

間違いなく怒るし、自分自身を責める。

シスカと出会って二年見てきたのだ。

何となく分かる。

「シスカが怒るって…口きいてくれないなんて、絶対やだっ！」

ガタンと椅子から勢いよく立ち上がり、ニムは叫んだ。

「取り敢えず、落ち着いて。騒いでも解決しないよ」

ビートが宥めると、ニムは涙目で座った。

シスカが怒る…。

自暴自棄の自分を本気で怒ってくれて心配で心配でたまらなかったシスカの表情を思い出した。

もうあんな顔はさせたくない。

シスカに嫌われたくない。

「さて、ニムちゃんに出来ることは何でしょう？」

ビートは優しく問いかける。

「…ありがとう、かな。二重の意味で」

あの時のことと、ルーディメンツを撃退して守ってくれたこと。彼に言うとしたらきつとそれだ。

「分かってんじやん。ほら、早く食べないと冷えて固まるよ」  
「う、うん」

漸くニムは、カルボナーラに手をつけた。

「そうそう、俺がニムちゃんに会いたかったのは君の愚痴に付き合  
う為じゃないんだよね」

「え、何か用事あるの？ あたしに？」

首を傾げるニムにビートは笑顔を向けた。

「見つかったよ。…行方不明になっていた、君のお父さん」  
優しく笑いかけるビートにニムは硬直した。

いくら搜索をかけても見つからなかった父親が見つかった。  
嬉しさよりも驚愕で言葉を発することが出来なかった。

\*\*\*

風が少し冷たい。

今日の晩御飯は何だろう。

昨日の余りものの夕飯かもしれない。

お母さんは、料理を作りすぎてしまう癖があるから。

そういえば、昨日のカレー…かなり余ってたっけ。

新しく買った大きな圧力鍋で張り切って作って、結局半分も消化  
出来なかった。

今日の朝も昼もカレーだったなあ。

今夜もきつとカレーだ。

せめて、何か手を加えてアレンジしてくれたら嬉しいのに。

「お兄ちゃん？」

くいくいっとナナリーの小さな手が俺の服の裾を引っ張る。

「よしっ、帰ろっか」

「うんっ」

俺が笑うと、ナナリーも満面の笑顔を浮かべた。

ふわりと何か白いものが見えて空を見上げた。

白い結晶が落ちてくる。

「わぁ、雪だ」

「ほんとだ、初雪だ！」

「お兄ちゃんっ！ 今度雪合戦しよ。私、負けないからっ」

「もっちろん受けて立つぜ！ あ、でも石入れるの危ないからやめるよ。硬く握るのも痛いから駄目」

「は〜い！」

元気よく返事をして満面の笑顔を浮かべるナナリーの手を握った。軽快な足取りで家に向かう。

何の変哲もない普通の一戸建て。家族は四人。明るくて楽しい。

お父さんもお母さんも優しく好きだ。

本当の妹じゃないけど…ナナリーも大好きだ。

この大好きな家族とずっと一緒にいられたら…。いられたら…。

「…力。…ルカ」

遠くで名前を呼ぶ声がする。

誰だ？

「ルカツ！」

薄っすらとルカは目を開いた。

ぼんやりと視界に入ったのは、シスカだった。

「ったく、こんなところで寝てたら風邪引くよ」

大浴場の脱衣室にあるソファで横になるルカの顔を心配そうにシスカが覗き込む。

「…ナナ…？」

「へ？ ルカ…うわあっ！」

シスカを力強く抱きしめた。

「いたっ…痛いつて！ ルカツ」

「ナナツ！ ナナ、会いたかった！」

「…ルカ？」

シス力を抱きしめたまま、ルカは泣きじゃくっていた。  
異常だ。

何処か頭をぶつけたのではないかと心配になった。

「ナナッ！ 何処行ってたんだよ、お前！ 俺、心配で心配で…」  
重症だ。

これは目を覚まさせないといけない。

そもそも、このままでは動けない。

「いい加減に…しろっ！」

シス力は、ルカを殴り飛ばした。

その衝撃でルカは倒れて大の字になっている。

「ルーカー…起きてよ…」

ルカの身体をシス力が擦ると、むくりとルカは起き上がった。

「…あー、ねっみい。あ？ おー、シス力。何そんな疲れた顔してやがる」

「…別に。ただ、そんなところで寝てたら風邪引くよ。せめて服着なよ」

見るとルカは、腰にタオルを巻いているだけで全裸だった。

しかも下半身のタオルも緩くなっていて、いつ生まれた状態になるか分からない。

「おー、わりわり。…あ、パンツ忘れた」

腰のタオルを直し、自分の使用していたロッカーの籠を見ると下着だけ無かったらしい。

「…もう付き合ってらんない。俺もう行くからね」

「おっつ！ 湯冷めすんなよ」

「それ、俺がルカに言いたいんだけど。…あ、そうだ。ルカ」

「あ？」

少し考えた様子だったが、シス力はルカに尋ねた。

「ナナって誰？」

「なっ…！」

シスカのその言葉にルカの瞳が戦慄いた。あんな夢を見たから何か口走ったのか…。何を言ったのか何をしたのか全く覚えていない。

シスカの口からその名前を出されるのは、何となく嫌だった。

「あ…ちよつとした知り合いだよ」

歯切れが悪そうにルカは頭を掻いた。

「昔の彼女とか？ ルカも意外と…」

「そんなんじゃないよ！」

シスカがからかうように言うと、怒りを込めたような声でルカが叫ぶ。

怒鳴ったルカに驚いてシスカは硬直した。

二人しかいない脱衣所に沈黙が訪れた。

ルカの触れていけない何かに触れてしまった気がした。

「ご…ごめん」

その言葉しか出なかった。

少し落ち込んだような表情を浮かべるシスカを見て、ルカは自分の行いを後悔した。

シスカに自分の都合で怒鳴ったことなんてなかった。

シスカはどう思っただろうか。

理不尽に怒鳴られて、どう感じただろうか。

「いや、今のは俺が悪かった。すまねえ」

「……。じゃあ、俺…行くから」

少し俯き加減のシスカの表情は分からない。

「待ってくれ！」

脱衣所を出ようとしたシスカの腕をルカは引っ張った。

少し怯えた様子の子シスカを見て辛かった。

顔が重なる。

ナナリーが…悲しそうな顔をしている。

そうじゃない。

そうじゃないだろ。

こいつは、シスカだ。

家族同然の大親友の筈なのに。

おかしい。

あの夢のせいか？

「ルカ…手痛い」

「あ、ああ…。わりい…」

力強く握った手を緩めて離す。

何となく…何となく、心がちくりと痛んだ。

傷ついているのは、シスカの筈なのに。

シスカが出て行き、脱衣所の扉が閉まる。

扉の音が冷たく感じた。

\*\*\*

少しだけシヨック…というよりも怖かった。

基本的にルカの笑った顔しか見たことなかったから、甘えていたのかもしれない。

きつと何か逆鱗に触れてしまったんだ。

それは多分、ルカも後悔している。

「そういえば、俺…ルカのこと何も知らない」

シスカは、ぽつりと呟いた。

ベッドでぴよんぴよん跳ねるスフォルをキャッチした。

「埃飛ぶから飛び跳ねちゃ駄目」

「きゅー…」

「…ねえ、スフォル。俺、ルカにいつも助けてもらってばかりだけど…俺がルカを助けるって出来るかな」

「きゅっ」

シスカの問いに応えるかのようにスフォルは、シスカの頬を舐め

た。

ぎゅっとスフォルを抱きしめ、悩み困ったような表情を浮かべてシスカは溜息を吐いた。

ズキツと足が痛んだ。

昼間の戦闘が終わってから、痛みが全然解消されない。

脈打つように熱い。

医者に見せると言われたが、創傷も痕も無いからあまり意味のないように感じた。

「…考えることいっぱいだなあ」

ぼすんとベッドに倒れこみ、シスカは溜息を吐いた。

「これから、どうすればいいんだろ…」

シスカのその言葉には、複数の意味が込められていた。

スフォルツァンドのこと。

ルーディメンツのこと。

今後の戦いへの対策。

スフォルツァンドと神経が繋がっている以上、まともに戦えない。だから、知りたい。

そして…ルカのことも、どうしたらいいのか分からなかった。

\*\*\*

翌日。

シスカとルカのそれぞれブレスとの同調試験結果を見て、ロックとジェントは訝しげな顔をする。

二人とも、不安定だった。

常に安定している筈のシスカとスフォルツァンドは、メーターのラインが歪んでいる。

ルカに至っては、ラインが子供の落書きのように滅茶苦茶だ。

今迄で一番最悪だった。

「…どうした、お前ら」

ロツクの問いに二人とも無言だった。  
妙にピリピリとした空気が漂う。

「少し休んだら、もっかいやるぞ」

「はい……」

ロツクの言葉に返事をしたのはシスカだけだった。

「ルカも分かったな？」

「あー、はいはい！ わかってらあ！ ただ、時間ずらしてくれよ  
投げやりにルカは、ロツクに返事をした。  
しかし、気にかかる言葉があった。

「時間をずらす？」

「……シスカがいると集中できねえんだよ」

「……え？」

ルカが投げ捨てた言葉に、シスカの表情が固まった。

しかし、その顔を見ずにルカは立ち去った。

「何だ、お前ら。喧嘩でもしてんのか？」

頭を掻いてロツクは、シスカに尋ねる。

「いや、そういうわけじゃ……。……多分」

「何でもいいが、これからの戦闘でお前らの連携がキーになるんだ  
から早く仲直りしとけよ」

「……はい」

少し落ち込んだ様子でシスカは頂垂れた。

「それで、足の調子はどう？」

ジェントがシスカの足を見て尋ねた。

「あ、大丈夫です」

「……ていつ」

「うわっ」

ジェントがシスカをどんっと押すと、シスカはバランスを崩して  
座り込んだ。

「うぐっ……！」

足に激痛が走り顔を歪めたシスカを見て、ジェントは目を細めた。



「嘘つかないの。やっぱり医者に見てもらいな。そんなんじゃないから」

「でも…」

「これ、命令だから。ソルフェージュ内の医務室に腕利きの医者がいるから行っておいで」

「…はい」

溜息を吐いてシスカは立ち上がり、足の痛みに耐えながら歩いていく。

その背中を見送り、ロツクは腕を組んだ。

「重症だな」

「色んな意味でね」

シスカの足や同調試験だけじゃない。

ルカの問題もある。

あからさまにシスカを拒絶しているその意味が分からなかった。

これが解決しないと、連携なんて夢のまた夢だ。

ロツクが恐れていることが現実になるかもしれない。

執着にしても拒絶にしても、ルカは判断力を失ってしまう。

それを止められるのは、きつとシスカだけだ。

しかし、出来るだろうか。

ルカの態度に戸惑いを隠せないシスカには、話しておいた方が良い気がする。

だが、シスカは耐えられるだろうか。

様々な悩みを抱えている今のシスカにルカのことを…自分達が教えて良いのだろうか。

「きっかけを与えたほうが良いかもね」

「そうだな。俺達から話すと、悪化しかねない…。当人同士が解決した方が良いだろ」

ちゃんと言葉で話さないと通じるものも通じないのは、彼らが一番よく分かっている筈だ。

この件が解決されるまで敵が攻めてこないことをただただ祈るば

かりで、手のかかる子供達にロックもジェントも頭を悩ませずには  
いられなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1948x/>

---

錬機動騎士スフォルツァンド

2011年11月7日12時03分発行